共産主義者同盟
理論機関誌

季刊 赫旗 せっき

創刊号

1982.2

統合大会決定報告

■ 結成宣言 3
■ 綱　　領 7
■ 規　　約 19
■ 組織活動に関する準則 21
■ 統　合　報　告 27

当面する闘争と党建設

安保粉砕・朝鮮連帯・改憲阻止を環として
日帝打倒米帝一掃めざす隊伍をととのえよ
80年代半ばにむかう情勢の特徴とわが同盟のさしせまる任務 47

全国の共産主義者に訴える
情勢に応え統一協議会をつくろう 65

統合大会決定報告

結成宣言
綱領
規約
組織活動に関する準則
統合報告

結成宣言

きたれ！わが共産主義者同盟のもとに

全国の共産主義者、労働者、人民の皆さん！　われわれは、心からの歓びと闘いの決意をもって、新たな共産主義者同盟の結成を宣言する。

一九八一年九月×日、共産主義者同盟第一回大会は、綱領、規約を採択、旧共産主義者同盟（革命の旗）と旧共産主義者同盟（紅旗）の組織統合を実現し、ここに新たな共産主義者同盟が戦取された。

第一回大会は宣言する――わが共産主義者同盟は、戦争と革命の激動の八十年代情勢に応え、日本階級闘争の最前線をにない、これを領導し、鉄火の試練の中で、社共にかわる革命的労働者党創建の大道へ、潮流をこえて、大胆にすすみだす決意である――と。

綱領は、われわれのブンド総括をもとに、マルクス・レーニン主義の旗のもとで、日本労働者階級の解放をめざす基本的な政治宣言であり、戦闘宣言である。この綱領を、日本共産主義運動の混迷と分散に終止符をうち、その革命的再編、統一の公然たる戦闘的旗じるしとして提起する。

1

われわれは、日本共産主義運動の歴史に、新しい時代が、すなわち、本格的な〈分裂から統合の時代〉がはじまったことを宣言する。

六十有余年の日本共産主義運動の歴史の中で、日本共産党が現代修正主義に転化してから久しい。ブンドが日共現代修正主義と決別し、社会主義革命の旗をかかげ、全世界を獲得すべきプロレタリアートの前衛として、世界ではじめて意識された組織『共産主義者同盟』をついで、大いなる決意をいだきつつ革命党建設にふみだして、早くも二三年が経過した。

ブンドは、六十年代の巨大な戦闘の一時代を画しつつも、テロリズムと経済主義の両極に分裂し、とりわけ、六九年七・六事件以来、苦難の分派時代をへてきた。その党的敗北――思想的破産は、多かれ少なかれ、新左翼総体をつらぬく共産主義の根本をめぐる問題に他ならない。多くの同志たちが志なかばに倒れ、獄につながれ、海をわたり、あるいは困難な諸条件のもとで、あらゆる試練にさらされてきた。

にもかかわらず、七十年代の思想的混迷、分散の一時代のただ中から、胎動が開始された。第二次ブンドの党内・分派闘争の根本問題をえぐりだし、ブンド史をつらぬく急進民主主義と小ブル共産主義を総括し、マルクス・レーニン主義の復権を綱領にうちかためて、分裂から統合の時代の端緒を開いた分派の登場、これである。一九七六年に紅旗派が、七九年に革命の旗派が結成された。

いま、闘いとった共産主義者同盟こそ、この七十年代の苦難の一時代に準備された組織に他ならない。

われわれは、いまださささやかであり、かつ、いぜんブンドの一分派にすぎないことを知っている。しかし、われわれは、あえて分派をこえて、ブンドの革命的止揚、〝否定の否定〟にむかってすすむ決意である。

われわれは、単なるブンドの再建でなく、その革命的伝統を継承し、労働者階級の熱望してやまない革命党創建のため、ブンド史の栄光と破産をくいやぶって生まれた同盟に他ならない。

われわれは、共産主義と労働運動の結合を実現し、労働者階級に深く依拠し、「労働者階級の解放は労働者自身の事業である」とプロレタリア階級独裁の核心を、綱領といわず、戦術といわず、組織にまでつらぬいた、真に日本革命を勝利に導く前衛党創建のため闘う。

そうであればこそ、われわれは、ブンド系はいうにおよばず、潮流をこえて、すべての誠実な共産主義者の闘いに敬意をはらい、ともに、革命の事業をになうための団結を、心から願うものである。

2

今日、マルクス・レーニン主義は、かってない深い危機に際会している。

戦後、ソ連現代修正主義が社会帝国主義に転化し、七十年代には、ベトナム共産党が変質しはじめた。全世界的規模で共産主義とマルクス・レーニン主義をめぐって、深刻な分解、混乱、あらゆる動揺が革命運動の困難をつくりだしている。これにたいして決然と抵抗し、マルクス主義の原則をまもり、断固としたねばりづよい闘争をすることが、再び日程にのぼっている。

しかし、他方で、この深部から新たなマルクス主義の発展をうながし、深めている部分が生まれている。

しかり、ポーランド労働者階級の革命闘争をみよ！　朝鮮南半部人民の光州蜂起をみよ！

混迷の中に混迷だけを、分散の中に分散だけしかみることのできないものは、弁証法を知る共産主義者ではない。

いま、われわれは、国際階級闘争の発展の中に、マルクス主義の再生と新たな発展の質をみる。

マルクス・レーニン主義者は、闘いの中で結束をかため、共産主義の旗を堅持し、世界プロレタリア共産主義革命の一時代の成功と惨敗に学び、マルクス主義を死んだ教条におとしめず、生きた行動の指針として深め、発展させねばならない。われわれは、労働者の新しい世界を創造するためそれを敢然とひきうけるであろう。

3

今日、新たな戦争と革命の時代がはじまりつつある。疾風怒濤の嵐の時代の序鐘はうちならされている。

腐りきった帝国主義の危機からの脱出を、賃金奴隷制の廃絶をめざしたプロレタリア共産主義革命の勝利に導くのか、それとも、ブルジョアジーの帝国主義戦争――核戦争のぼっ発を許して全人類の悲惨な未来を導くか、この岐路の選択をにぎっているのは、まさに国際プロレタリアートである。

八十年代前半の日本階級闘争は、この歴史的選択をめぐって、決定的な正念場を迎えつつある。

われわれは、プロレタリアートの世界軍の一部隊として、全世界の共産主義者とともに、世界プロレタリア共産主義革命の勝利をめざして闘う。この途上において、われわれは、自らの国際主義的責務として、日帝打倒・米帝一掃、プロ独樹立の日本社会主義革命を実行するため奮闘する。

今日、この条件は広々と開けつつある。日本労働者階級は、日帝の戦争と反動の大攻勢に抗し、全国津々浦々の工場、地域から、反撃の火の手をあげはじめている。とりわけ、現下の労働戦線の右翼的再編をめぐる激動は、戦後革命期につぐような、階級深部での大地殻変動のはじまりをつげている。

社共をはじめ既成左翼は無力をさらけだし、同時に、革命的左翼もまた試練にさらされ、諸党派の急速な分解、流動、再編は不可避である。

今日、労働者階級は、新たな革命党を熱望している。

まさに、われわれにとって千載一遇の好機が訪れようとしている。

共産主義者とあろうものは、この好機をのがさず、敵の攻勢と戦略をしっかりとみぬき、八十年代半ばの二大階級の最初の会戦にまにあうように、これを闘いぬくための単一党の中核隊をつくりださねばならない。

八十年代階級闘争の劇的展開の中で、真に革命的方針で闘い、社共にたいする幻想から労働者階級の多数をとき放ち、獲得しつつ、この中核隊は大衆的革命政党として成長するであろう。

われわれは、この中核隊たるべく共産主義者同盟を戦取した。

全国の共産主義者、労働者の仲間たち！ 分散に終止符をうち、自らの狭いセクト主義、サークル根性をなげすて、日本革命の勝利をめざして、団結しよう！

われわれが、必勝不敗の共産主義の真紅の大旗のもとに、団結して闘うなら、勝利は、われわれのものである。

わが同盟は、この歴史的任務をはたすため、どのような試練、困難をも恐れず、革命の大義にもえた、炎の共産主義者同盟としてこの大道を進撃する。

全国の共産主義者と労働者、団結せよ！

万国の労働者、被抑圧民族団結せよ！ 日帝打倒・米帝一掃

プロ独樹立の社会主義革命万歳！ 共産主義者同盟の結成万歳！

一九八一年九月×日　共産主義者同盟中央委員会

綱領

一章　ブルジョア社会とプロレタリアートの社会革命

①一九一七年のロシア革命によって開始された世界プロレタリア共産主義革命は、さまざまな困難を経験したが、中国革命、インドシナ三国革命などをへて、現在なお発展の途上にある。

労働者階級は世界交通や世界市場の発展によってきわめて緊密に結びつけられており、また、その経済的地位の同一性にもよって、プロレタリアートの解放闘争は国際的な運動とならざるをえなかったし、ますますその国際的結びつきをつよめている。

われわれ共産主義者同盟は、現代修正主義に転落した日本共産党から決別した。われわれは日本プロレタリアートの階級政党として日本共産党、日本社会党にかわる単一の革命的労働者党を創建し、自己をプロレタリアートの世界軍の一部隊とみなし、他のすべての国の共産主義者のめざしているものと同一の終局目標を追求し、当面する日本社会主義革命の勝利をめざして闘う。

②前進しつつあるプロレタリア共産主義革命は、資本主義の発展、ブルジョアジーとプロレタリアートの階級闘争が不可避にもたらした結果である。この資本主義とブルジョア社会の本質はつぎのように特徴づけることができる。

③この社会では、商品生産が最高度に発展し、資本主義的生産様式が支配している。このもとでは、生産手段の主要な部分が少数の人間からなる階級——資本家と地主に属しており、この資本家と地主が労働者階級を経済的に隷属させている。労働者は、その経済状態にせまられて、生きるために、常時あるいは、定期的に自分の労働力を販売することをよぎなくされている。すなわち、資本家の雇人となって、自分の労働で社会の上層階級の所得をつくりだすことをよぎなくされている。

④技術の不断の改善によって、大規模生産による小規模生産の駆逐がすすみ、機械制大工業の出現による資本主義的生産様式の発展は、労働と所有の分離をますます拡大する規模で再生産し、資本家の手中に生産手段をますます集中、集積させ、一方の極により多くの、またより大きな資本家を、他方の極により大量の賃労働者を再生産する。

この同じ過程は、独立した小生産者を駆逐し、かれらの多くをプロレタリアに転化し、残りの部分についても、その社会、経済生活に占める役割を縮少し、資本にたいする完全な従属におとしいれる。

こうして、資本主義的生産様式の支配分野はますます拡大する。

⑤この資本主義的生産の発展は女性や児童を大量に生産過程になげいれる。同時にこの発展は、生産手段に投下される資本部分にたいして、労働力の購入にあてられる資本部分を相対的に減少させるので、過剰労働者軍がますます大量に生みだされる。その結果、資本にたいする賃労働の従属が増大し、その搾取の度合いがたかまる。

⑥ブルジョア諸国の内部におけるこのような事態と、世界市場におけるそれら諸国相互のたえず激化していく競争とは、たえず増大する数量で生産される商品の販売をますます困難にする。過剰生産は多かれ少なかれ鋭い産業恐慌となって現われ、恐慌のあとには、多かれ少なかれ長びく産業沈滞期がつづくが、この過剰生産は、ブルジョア社会において生産力が発展していくことの不可避の結果である。恐慌は、それはそれで、資本の集中をいっそう急速にうながし、小生産者をさらにいっそう零落させ、資本にたいする賃労働の従属をさらにいっそうふかめ、労働者階級の状態の相対的悪化に、ときにはまたその絶対的悪化にもいっそう急速に導いていく。

⑦こうして、社会的富の増加を意味する労働の社会的生産力の増大が、ブルジョア社会では、社会的不平等の増大、有産者と無産者とのへだたりの拡大、労働者階級と被搾取勤労大衆の貧困、搾取、肉体的、精神的磨滅、生活の不確かさ、あらゆる種類の隷属、社会的悲惨の増大となる。

⑧しかし、ブルジョア社会に固有なこれらすべての矛盾が増大していくにつれて、プロレタリアの数と結束、不満と憤激が増大し、ブルジョアジーにたいする闘争が激化し、資本主義の耐えがたいくびきからの解放をもとめる志向が増大する。それと同時に、資本主義的生産様式は、生産手段を集中させ、労働を社会化することによって、資本主義社会を共産主義社会にかえる社会革命の物質的可能性をますます急速につくりだしていく。

⑨労働者階級の解放は労働者階級自身の事業でしかありえない。今日の社会のその他のすべての階級は、私的所有を維持する立場にたっており、労働者階級のみがプロレタリア共産主義革命を首尾一貫しておしすすめることのできる革命的階級である。労働者階級の解放のためには資本主義の全発展によって準備される社会革命が必要である。すなわち、プロレタリアートの社会革命は、生産手段の私的所有を社会的所有にかえ、社会の全成員の完全な福祉と自由な全面的発展とを保障するために、社会的生産を計画的に組織化し、賃金奴隷制を廃止する。

このプロレタリアートの社会革命によって、社会の諸階級への分裂をなくし、階級差別の廃止とともに、これから生じるいっさいの社会的・政治的不平等はおのずから消滅し、「各人はその能力に応じて、各人にはその必要に応じて」が実現され、こうして抑圧された人類全体が解放されるであろう。

⑩この社会革命の不可欠の条件は、プロレタリアートの階級独裁である。すなわちプロレタリアートはブルジョア国家権力を打倒し、自らの国家権力を闘いとらねばならない。それは必然的に暴力革命とならざるをえない。プロレタリアートは、この国家権力をもちいて搾取者のあらゆる反抗を鎮圧し、社会革命をおしすすめなければならない。

⑪共産主義の低い段階である社会主義社会は、長期にわたる歴史的段階である。この歴史的段階においては、終始、ブルジョアジーとプロレタリアートの階級闘争が存在し、資本主義復活の危険性が存在する。それゆえに、プロレタリートは、共産主義の高い段階の実現まで、プロレタリアートの階級独裁を堅持し、社会革命を継続しなければならない。

⑫プロレタリアートにその偉大な歴史的任務をはたす能力を獲得させることを自己の任務とする共産党は、プロレタリアートの階級闘争のいっさいの現われを指導し、ブルジョアジーの利益とプロレタリアートの利益とが非和解的に対立していることをプロレタリアートの前に暴露し、きたるべき社会革命の歴史的意義と必要な諸条件とをかれらにたいして明らかにする。それと同時に、共産党はその他の被搾取勤労大衆の全体にむかって、資本主義社会ではかれらの地位は絶望的であり、かれら自身を資本の圧制から解放するためには、社会革命が必要であることを明らかにし、かれらがプレタリートの立場に移ってくるかぎりで、自分の隊列によびいれる。

二章

帝国主義と世界プロレタリア共産主義革命

⑬生産および資本の集積の過程は、二十世紀の初頭に、自由競争を排除することによって、経済生活全体で決定的な意義をもつようになった強大な独占的資本家団体——シンジケート、カルテル、トラストを成立させ、途方もなく集積された銀行資本と産業資本とを融合させ、外国への資本の輸出を強化させた。全世界がもっとも富裕な諸国のあいだに、すでに地域的に分割されつくし、国際トラストによる世界の経済的分割がはじまった。これは資本主義諸国家のあいだの闘争を不可避的に激化させる金融資本の時代、帝国主義の時代である。

⑭ここからして、帝国主義戦争が、すなわち販売市場のため、資本の投下地域のため、原料のため、労働力のため、つまり世界支配のため、被抑圧民族にたいする支配権のための戦争が不可避的に生じる。第一次大戦はまさにそういう戦争であり、第二次世界大戦もまた帝国主義世界大戦としてはじまった。

⑮帝国主義は民族抑圧と略奪、併合への志向をいちじるしくつよめ、飢えにあえぐ植民地、被圧迫従属諸国を生みだし、地上の大多数の住民を支配のくびきにしばりつけた。それは世界的規模で帝国主義にたいする民族解放闘争をつよめざるをえない。

⑯世界資本主義一般がきわめて高い水準に達していること、銀行ならびに資本家団体によって物資の生産と分配の過程にたいする社会的規制の機構が準備されていること、資本主義的独占体の成長と関連して、物価の騰貴と労働者階級にたいする独占体の圧迫が増大していること、労働者階級が帝国主義国家によって隷属させられていること、プロレタリアートの経済闘争と政治闘争が巨大な障害に直面していること、帝国主義戦闘が惨禍や災厄や零落を生みだしていること——すべてこれらのことは、資本主義の破綻と、より高度の型の社会経済への移行とをさけられないものとした。

⑰世界資本主義が到達したこのような発展段階にあっては、帝国主義戦争は不可避的に、プロレタリアートを先頭とする被搾取勤労大衆のブルジョアジーにたいする内乱に転化した。一九一七年のロシア十月革命は世界プロレタリア共産主義革命のはじまりをつげた。

⑱帝国主義が被抑圧民族を略奪することによって、ブルジョアジーはこの略奪によって獲得した超過利潤の一小部分でプロレタリアートの上層に特権的地位をあたえ、それによってかれらを買収し、平時には相当の生活をこの上層に保障し、この層の指導者を自分の召使い、労働貴族とした。こうした事情は、労働者階級の内部に、日和見主義と社会排外主義の潮流を生みだした。日和見主義は、プロレタリア階級独裁を否定し、社会改良のスローガンで労働運動を階級協調に導くことによって、労働者を永遠に奴隷の地位にしばりつけるものにほかならない。日和見主義の成長した社会排外主義は、口先での社会主義、実際の排外主義であって、総じて自国ブルジョアジーの略奪者的利益の擁護を祖国擁護の

スローガンでおおいかくすものである。

⑲世界プロレタリア共産主義革命の究極の勝利のための不可欠の条件は世界プロレタリア階級独裁である。それゆえ、この実現にむけて、国際共産党を建設する必要がある。

三章

世界プロレタリア共産主義革命の時代と国際プロレタリアートの当面する任務

⑳ロシア十月革命は、プロレタリア階級独裁を樹立し、最初の社会主義革命を実現し、こうして世界プロレタリア共産主義革命の時代がはじまった。ロシア共産党をはじめとする革命的潮流は、社会民主主義の潮流と仮借なく闘うことによって共産主義インターナショナル（国際共産党）を創設した。

全世界における帝国主義と搾取者にたいするプロレタリア、被搾取勤労大衆の反抗がいちじるしくつよまり、プロレタリアートの国際的結束は飛躍的に強化された。

さらに、植民地、半植民地、被圧迫従属諸国において、労働者、農民を中心とした帝国主義にたいする闘争もまた大きく発展し、国際共産党と国際プロレタリアートの革命運動と緊密に結びつくことによって、世界プロレタリア共産主義革命の一環に転化した。

プロレタリアートの闘争は、文字通り世界的なものになり、地上の大多数の住民、被抑圧民族、被搾取勤労大衆をひきよせるものとなった。こうして帝国主義から社会主義への世界史的過渡期にはいった。

㉑民族解放闘争の発展によって、これら諸国の多くに共産党が誕生し、革命を指導することによって、植民地の多くが政治的独立を闘いとった。その少なからぬ部分が民族解放闘争の勝利からひきつづき社会主義革命にむけて歩みはじめた。これにたいし、帝国主義ブルジョアジーはこれらの発展をおしとどめるため、あらゆる暴力手段をもちいるだけでなく、被圧迫従属諸国の搾取階級を懐柔し、支配を強化した。

㉒第二次大戦後、国家独占資本主義がいちじるしく発達し、一つの巨大な帝国主義、アメリカ帝国主義が他の帝国主義諸国さえも、政治的、軍事的、経済的に自己のくびきにしばりつけ、ますますつよまる革命と民族解放闘争を圧殺するために、これら諸国を国際反革命支配体制（NATO、日米安保等）に統合した。帝国主義は社会主義国を政治的、軍事的、経済的に封じこめ、すべての国のプロレタリアート人民の革命運動を直接に鎮圧するとともに、世界的規模で、系統的に人民を搾取することに力をそそいでいる。

㉓ロシア共産党内部に現代修正主義の潮流が発生、成長し、プロレタリアート独裁がブルジョア独裁へ転化され、資本主義が復活、発展した。こうして、ソ連は、官僚ブルジョア階級が支配する新しい形態での国家独占資本主義へ転化している。

ソ連の官僚ブルジョア階級は「全人民の国家、全人民の党」の旗をかかげて、ブルジョア独裁を実行し、「社会主義大家庭論」等のもとに東欧諸国を従属化し、「社会主義」と資本主義の永遠の平和共存の主張のもとに帝国主義と結託してきた。今日では、国際プロレタリアート、被抑圧民族の闘争を抑圧しているばかりか、その闘いを利用して米帝を中心とする帝国主義と世界支配のための争奪をおこなっている。それは口先での社会主義、実際の帝国主義、すなわち社会帝国主義である。

㉓多くの諸国の公認の共産党もまた、公然とプロレタリア階級独裁を放棄し、マルクス・レーニン主義の革命的原則を踏みにじり、

日和見主義、社会帝国主義の一大潮流を形成している。

現代修正主義は、社会主義の名で、プロレタリアートの階級独裁と階級闘争を放棄するものである。とくに、帝国主義国における現代修正主義は、日和見主義、社会排外主義と同一の物質的基礎の上にたっており、その役割も同じである。議会を通じた平和革命、資本主義のもとでの軍備縮少などの主張は、反動的ユートピアであるばかりか、プロレタリアート、被搾取勤労大衆を露骨に欺まんするものであり、プロレタリアートを武装解除し、搾取者の武装解除という任務からプロレタリアートをそらせることを目的とするものである。

㉕今日、新たな戦争と革命の激動の時代がはじまりつつある。アジア、アフリカ、ラテン・アメリカ等において被抑圧民族の解放闘争が爆発、発展し、社会主義諸国において、さまざまな困難を経験しつつも、社会主義建設が前進している。そして、相対的安定期がおわり、激動の時代へ突入した帝国主義諸国においてプロレタリア階級の反抗も増大している。

ソ連社会帝国主義は、米帝国主義との世界支配のための争奪を激化させ、民族解放闘争に介入し、新植民地支配と他民族抑圧を世界各地で拡大、強化している。

民族解放闘争とプロレタリア革命の前進、ソ連社会帝国主義の勢力拡張に後退をよぎなくされてきた米帝を中心とする日欧等帝国主義諸列強は、相互に対立を激化させ、国際反革命支配体制を動揺させながらも、まき返しをつよめている。

しかし、帝国主義、社会帝国主義の策動も、全世界のプロレタリアート人民、被抑圧民族の反撃に直面して思うにまかせないでおり、それはそれで、その寄生性と腐朽をいっそうつよめ、諸矛盾を激化させ、帝国主義の没落をしめすものにほかならない。

こうした事情から、革命の要素がいぜん発展しているが、帝国主義世界大戦の危険性もまたつよまっている。

革命が戦争をおしとどめるか、戦争が革命をひきおこすか、いずれにせよ、個々の帝国主義国の内乱と自己を防衛する社会主義諸国、および被抑圧諸国の帝国主義、社会帝国主義にたいする革命闘争、革命戦争が結びつくことはさけられない。

㉖帝国主義と帝国主義戦争とがつくりだす袋小路から人類を脱出させることができるのは、世界プロレタリア共産主義革命だけである。

世界プロレタリア共産主義革命の前進のためには、全世界のプロレタリア階級と被抑圧民族の団結をうながし、社会主義諸国、被抑圧諸国と帝国主義諸国、社会帝国主義国におけるプロレタリアートのあいだの完全な信頼と、もっとも緊密な同盟と革命的行動のできるだけ大きな統一を闘いとることが必要である。このためには、現代修正主義、社会帝国主義潮流と仮借なく闘うことが不可欠である。

革命の困難がどんなであろうと、革命が一時失敗することがあろうと、また反革命の波がどんなであろうと、プロレタリアートの最後の勝利はさけられない。

四章

日本におけるプロレタリアートの当面する任務

㉗世界プロレタリア共産主義革命の時代にあって、国際プロレタリアートの共通の終極目標への途上で、さまざまな国の共産主義者がかかげる当面の任務は、その発展段階がど

こでも同一ではないため、また、それぞれの国がことなる社会的、政治的環境の中にあるため、それぞれことなったものとならざるをえない。

㉘第二次大戦後、アメリカ帝国主義の占領下で、その強圧手段とブルジョア民主主義的諸改革によって、また日本共産党の誤りにも助けられ、戦後革命は予防、鎮圧された。

日本帝国主義はアメリカ帝国主義にまもられ、延命、復活した。今日、わが国は金融資本がすでに専制支配を確立し、資本主義が高度に発達した帝国主義国である。

わが国の国家権力は、自衛隊、警察、官僚機構などの巨大な中央集権的国家機構をブルジョア階級が掌握し、プロレタリアートの自らの解放をめざすいっさいの志向を、強圧的におしつぶしているブルジョア階級独裁の権力である。

このブルジョア階級独裁国家は、日米安保条約によって米軍を駐留させ、自衛隊が米軍と不可分に結びついていることにもっともよくしめされているように、アメリカ帝国主義によって補完され、一定、統制、支配されている。

今日、日米安保体制のもとで、日本帝国主義は、アメリカ帝国主義を盟主とする国際反革命支配体制の重要な一環をにない、相互の対立と矛盾を深めながらも、アジアの社会主義国、民族解放闘争、自国のプロレタリア革命と対決し、他方でソ連社会帝国主義と対抗している。

日本帝国主義は、とりわけアジアへの侵略と他民族抑圧をいちじるしくつよめ、朝鮮南半部を新植民地支配の典型としている。朝鮮南半部では、朝鮮人民の反米反日反独裁と祖国統一の革命闘争が前進し、激動を深めている。

総じて日本帝国主義は米帝の指揮のもとに、帝国主義戦争の道を急いでいる。わが国におけるあらゆる方面での戦争準備と政治反動こそ、この現われにほかならない。

㉙わが国では、ブルジョア民主主義制度がブルジョア階級独裁をプロレタリアート人民の目からおおいかくすうえで大きな役割をはたしている。また、ブルジョア階級は天皇制を革命の防波堤としてのこし、階級支配の道具として利用している。また、ブルジョア階級はプロレタリアートの少数の上層を買収し、労働貴族を育成し、労働運動内部での帝国主義の手先としている。民社党はもとより、共産党、社会党などの改良主義、社会排外主義、社会帝国主義潮流はこれらの労働貴族を基礎に、ブルジョア民主主義制度を美化し、擁護し、ブルジョア階級独裁を補完している。

㉚今日、わが国では、プロレタリアートは増大しつづけ、最大の階級となっており、プロレタリアートの解放闘争の高まりは、農漁民、被抑圧民族、女性、部落大衆、「障害者」などの闘争と結びつき、発展している。

プロレタリアートを指導階級として、貧農と同盟し、都市、農村の小ブルジョアをひきつけ、ブルジョア国家権力を暴力革命で打倒し、米帝を一掃する闘いを勝利に導く条件が広範につくりだされている。

㉛これらすべてのことからして、プロレタリアートの社会革命をめざす党は、ブルジョア階級独裁国家を打倒し、アメリカ帝国主義をわが国から一掃し、プロレタリア階級独裁を樹立することを当面する社会主義革命の中心的任務とする。

㉜その具体的内容をなす以下の諸任務をかかげる。

(一) 一般的政治的分野で

一、ブルジョア国家機構を解体し、武装した労働者、勤労大衆の大衆組織に立脚した、立法権と執行権をあわせもつ国家機構を樹立する。

二、自衛隊の解体、および在日米軍の一掃。全人民の武装に立脚した赤軍の建設。

三、米軍の日本駐留に代表されているアメリカ帝国主義の対日支配、日本を基地とした米帝のアジアにおける侵略反革命、さらにアメリカ帝国主義とわが国の帝国主義的連携の

いっさいを完全に一掃すること。日米安保条約とそれに付随するすべての諸協定の破棄。いっさいの米軍基地の撤去。アメリカ帝国主義の対日資産の没収。

四、プロレタリアートを先頭とする被搾取勤労大衆の集会、結社、出版の自由、スト権などの政治的諸権利と自由を形式的に認めるだけでなく、物質的に保障すること。

五、すべての官吏は、プロレタリアート、勤労大衆によって選出および罷免でき、その賃金は労働者賃金の平均におさえられること。

六、プロレタリアート、勤労大衆の中からかれらの投票によって裁判官をえらぶこと。

七、性、肉体的、精神的「障害」、「身分」、民族、人種、宗教の別、有無にかかわりなく、全人民の完全な同権を実現すること。

八、天皇制の廃止、皇室財産の没収。

九、宗教と国家および学校とのあらゆる結びつきを完全にたちきること。

(二) 民族関係の分野で

基本となるのは、ブルジョア階級を打倒するための共同の革命闘争のために、さまざまな民族のプロレタリアおよび半プロレタリアの相互の接近と融合をはかる政策である。

党は、とくに、日本資本主義によって暴力的に併合、抑圧、同化を強制されてきた歴史的事情を考慮して、抑圧民族のプロレタリアが被抑圧民族の民族的感情にたいして、特別の注意をはらい、諸民族の平等と分離の自由を実際に実現する場合にだけ、相互のプロレタリアートの真に自発的な、真に恒久的な融合を実現できることを強調する、

一、被抑圧民族、国内少数民族にたいする民族自決権の承認、すべての国家機関、公共機関で共通語とともに、国内少数民族の母語を採用すること。

二、わが国の、他国、他民族にたいする侵略、干渉の完全な廃止。侵略的、抑圧的ないっさいの帝国主義的諸条約、取り決めの破棄。日本帝国主義の対外資産の放棄。

三、日本帝国主義の侵略、併合と強制連行の歴史によってもたらされている在日朝鮮人、在日中国人問題にたいして特別の注意をはらい、民族的権利を保障し、かれらにたいする政治的無権利、経済的不平等を一掃する諸策を実施すること。

四、抑圧民族である日本プロレタリアート、勤労大衆の中に広範に存在する被抑圧民族にたいする差別、べっ視と意識的に粘りづよく闘い、そのための思想闘争と教育活動を推進すること。

五、党は、被抑圧民族にたいする差別的諸法律、諸政策（外国人登録法、出入国管理法、外国人学校令、「日韓法的地位協定」、および国籍による職業差別等）の撤廃のために闘う。

(三) 経済の分野で

一、ブルジョアジーを収奪し、資本家と地主の所有する生産手段をプロレタリアート独裁国家の所有にかえること。

二、銀行をプロレタリアート独裁国家の所有にうつし、統一的な記帳と全般的会計の機構に転化すること。

三、プロレタリアート独裁国家のもとで、それぞれの生産部門の労働者の多数を組織した団体、たとえば労働組合のすべての工業管理機関への参加を実現すること。経済の運営の直接の仕事に勤労大衆をきわめて広範に参加させること。

四、プロレタリアート独裁国家のもとで、すべての国民にたいし、生産労働に従事する義務を課し、これを物質的に保障すること。労働者組織との協力によって、労働力を国民経済のさまざまな必要部門の間に正しく配分し、また再配分すること。

五、有産者にたいする高度の累進課税の実施。いっさいの間接税の廃止。

六、労働者団体が作成した賃金率による賃金の保障。

七、資本家的家主の所有の家屋の没収と

労大衆への、維持費の国家負担での解放。勤労大衆の住宅事情、生活環境の改善と家屋の大量の建設。

（四）労働保護と社会保障の分野で

労働者階級を、肉体的および精神的磨滅から防衛し、かれらの解放闘争の能力を発展させるために、党は一貫して闘う。

一、すべての者に働く権利を完全に保障すること。

二、週三十時間労働制、毎週連続二日の休日、年間五労働週の有給休暇、時間外労働の禁止を実現するため、可能な限りでの労働時間の短縮をはかること。

三、夜間作業を原則的に禁止すること。夜間労働、重筋労働、有害・危険労働に従事する労働者の労働時間を積極的に短縮すること

四、雇用や解雇をはじめとするあらゆる労働問題の決定に労働者組織を参加させること。労働者組織によって、労働監督機関と衛生監督機関をもうけること。

五、国家と雇主が負担し、労働者団体がその管理運営の中心をになう社会保障制度を確立すること。すべての医療行為の無料実施。疾病を予防することを目的とする広範な保健、体育、衛生措置を実行すること。

（五）農業の分野で

戦後のブルジョア民主主義的土地改革によって、ブルジョアジーは農民の多くを自らの側にひきよせた。しかし、その後の資本主義の急速な発展は、独占資本の農村支配をつよめ、農村の階級分化と階級闘争の激化をもたらした。資本主義のもとでは勤労農民の地位は絶望的であり、金融資本の圧制からかれらを解放するためには社会革命が必要である。

それゆえ、党は、貧農、農業労働者を中心とした農民による大資本、富農との階級闘争を発展させ、農村ブルジョアジーや小所有者的な利害の影響からこの層をひきはなすために闘う。

一、プロレタリアート独裁国家のもとで、大資本、富農の土地を没収し、その管理運営を農民の大衆組織にゆだね、社会主義的大農場、農業の集団化をおしすすめる。

二、プロレタリアート独裁国家のもとで、農業と工業を結合、そのつりあいのとれた発展をはかる。

（六）教育の分野で

党は、現存の教育と学校がブルジョア階級支配の道具であることを暴露し、これを共産主義建設の道具にかえる事業を最後までやりとげることを任務とする。

以下の政策をかかげて闘う。

一、十八歳未満のすべての児童にたいする無料の義務的な普通教育と総合技術教育の実施。授業と社会的、生産的労働の結合。すべての生徒に国家の負担で、食事、衣服、学用品を支給する。

二、労働者にたいして、上級学校の講議の公開とこれを物質的に保障すること。

三、保育所等就学前児童のための教育施設網の実施。

四、女性、部落、「障害者」、民族の解放のための教育を全人民に実施する。自民族の言語で教育をうける権利の保障。

五、教育にたいするブルジョア国家統制、反動的イデオロギー教育と闘う。

（七）女性解放の分野で

女性差別は、私的所有と階級の発生とともにはじまり、奴隷制を基礎に娼妾制を補完とする単婚制（一夫一婦制）が確立し、女性が男の情欲の奴隷、私有の富の相続人となる子を生む道具として家内奴隷の地位にしばられたことによっている。社会の諸階級への分裂、対立は、男性による女性の圧迫と一致し

ており、女性の家族、国家、社会における隷属、抑圧、不平等が固定化された。

今日のブルジョア社会においては、女性の公然あるいは隠然たる家内奴隷制の上に築かれた近代個別家族が社会の構成単位となっており、その労働力の生産、再生産を中心とする諸機能が、女性の直接の完全な私的労役（家内労働）にゆだねられている。ブルジョア国家は、これを私的所有と階級支配を維持、強化するための不可欠の条件として、ブルジョア家族制度をテコにおしすすめ、よって女性への差別と抑圧は拡大再生産されている。

同時に、資本主義の発展は、労働者階級の女性を賃労働へなげいれ、プロレタリア女性は、家内奴隷と賃金奴隷の二重のくびきにしばられることとなった。

こうした事情は、女性の、とりわけプロレタリア女性の肉体的、精神的苦痛と磨滅を耐えがたいものとしている。

にもかかわらず、資本主義の発展は、その内部から女性解放の主体的、物質的条件をつくりだす。

女性の解放は女性自らが闘いとるものであり、かつ、この解放事業を首尾一貫して遂行しうるのは、女性労働者だけである。女性の解放はプロレタリア階級独裁をカナメとするプロレタリア階級の社会革命の遂行と勝利によってのみ成しとげられる。この社会革命の遂行と勝利のためには、天の半分を支える広範な女性の参加と協力なくしては不可能である。それゆえ、広範な女性の決起により、着実にその歩を固めつつある女性解放闘争の前進を、女性の決起と団結を基礎にし、プロレタリアートの解放闘争の不可欠の一環へと発展させねばならない。

党は、こうした見地にたって、女性をプロレタリアートの旗のもとに組織し、その政治的自覚を高め、女性差別の廃止とこれから生じる経済的、社会的不平等をなくし、家内奴隷制のくびきからの解放をめざして闘う。

そのため、党は以下の政策をかかげる。

一、女性を家事、育児等のにない手から解放するため、家事、育児の社会化をはかり、男女の役割分業を廃止し、家政経済を社会的経済にかえる。そのため、必要な諸施設（保育所等）の建設をおこなう。

二、法制上の女性への差別、不平等（婚姻、「私生児」を含む戸籍制度、堕胎罪、親権等）を完全に撤廃する。

三、女性労働者を中心とする女性を肉体的、精神的磨滅からまもり、解放闘争の能力を保障、発展させる。

イ、女性の就労を完全に保障し、賃金、採用、定年（退職）制等の労働条件における差別を撤廃する。

ロ、女性の一生を通じた肉体的保護（生休、産休、妊娠時の母体保護、更年期における等）を保障する。

四、買娼制の廃止。そのための社会的、経済的諸策を実施する。

五、女性にたいする差別的なすべての慣習、道徳、イデオロギー、男性の主人意識の一掃。とりわけ、労働者階級内部において、男性の差別意識等を一掃するための思想闘争と教育活動をおしすすめる。

六、これらの諸策の実施にもよって、女性を広範に社会的生産活動へ復帰させ、国家統治の諸活動への参加をかちとる。

（八）部落解放の分野で

部落差別は、封建社会において領主階級が封建的身分制度を維持、強化するために、政治的、権力的につくりだした「身分外の身分」制度に起源がある。

日本資本主義と天皇制権力のもとで、部落大衆は被差別身分に緊縛、拘束され、職業、結婚、居住、教育など、あらゆる「社会生活」から排除され、窮乏とあらゆる社会的悲惨を集中されてきた。

第二次大戦後のブルジョア民主主義制度のもとでも、部落差別はいっそう巧妙に、いっそう鋭く苛酷なものとなっている。

ブルジョア階級は、部落差別を、プロレタリアートの階級闘争の発展をほりくずすために、階級闘争のシズメとして利用、強化して

きた。そして、部落大衆は社会の最底辺に、また、労働者階級の最下層にくぎづけされている。今日の部落差別は、封建遺制ではなく、資本主義とブルジョア階級独裁にそのもっとも深い基礎をおいている。部落差別の強力なテコの一つとなっている「社会意識としての差別観念」は、ほかならぬブルジョア・イデオロギーであり、ブルジョア階級支配の強化とブルジョア階級の搾取、収奪の強化に役だっている。

第二次大戦後の部落解放運動は、戦前の水平社の闘いを継承する部落解放同盟の指導のもとで前進し、同時に労働運動と結合し、全人民的闘争へと発展している。

部落大衆の身分的拘束からの完全解放は、プロレタリア階級の階級独裁とその社会革命によって、はじめてその条件がつくりだされる。だから、部落差別との闘いを徹底して組織することは、プロレタリア階級の不可欠の任務であり、プロレタリア階級の賃金奴隷制からの解放は、部落解放運動と固く結びつくことなくしてはありえない。

一、党は、部落大衆の糾弾権を承認し、糾弾闘争を支持し、援助する。

二、党は、プロレタリア階級と勤労人民の中に広範に存在する差別意識と粘りづよく闘い、そのための思想闘争と教育活動を推進し、かれらをいっさいの部落差別と闘うよう指導する。

三、党は、部落大衆の自主的解放組織を中心とし、プロレタリア階級と勤労人民の広範な部分の参加する組織による闘いを発展させるために闘う。

四、党は、プロレタリア独裁国家のもとで、部落大衆を肉体的、精神的磨滅からまもり、かれらの解放闘争の能力を発展させるための諸策を実施する。

(九)　「障害者」解放の分野で

「障害者」差別は、剰余生産物を生みだす農耕、牧畜の開始と一致する。人類の自然淘汰への部分的介入以降形成されはじめ、私的所有の発生、すなわち、階級社会の発生とともに社会的抑圧として固定化された。

今日のブルジョア社会においても、「障害者」は、資本主義の発展とともに、ますます大規模に生みだされ、過剰労働者軍の死重として社会的悲惨をおしつけられ、社会から隔離、抹殺されつづけている。

「障害者」の解放は「障害者」自身の闘いなしにはありえない。それはプロレタリア階級の社会革命によって、その条件がつくりだされ、私的所有の廃止、いっさいの階級差別の廃止の上に築かれる共産主義社会において真に実現される。かくして社会的な抑圧、差別として生みだされた「障害者」という呼称そのものも死滅する。

党は、「障害者」の解放を闘いとるためにつぎの政策をかかげる。

一、「障害者」の社会からの排除・隔離・抹殺を許さず、かれらの生活を物質的、社会的に保障すること。

二、すべての「障害者」の社会的生産への参加を完全に保障すること。

三、「障害者」解放を実現するための教育の完全実施。

四、党は「障害者」にたいする差別的偏見と差別意識を一掃するため、思想闘争と教育活動を推進する。

以上の政策を遂行するため、当面の任務としてつぎの方針をかかげる。

一、労働環境の改善、整備、職業技術訓練諸施策、および教員の養成、医療施設などを国家と雇主の負担で実施させる。

二、生活環境、交通、住居、その他社会的文化的諸施設を改造し、整備させる。

三、すべての差別的諸法律、諸政策（優生保護法、精神衛生法、保安処分攻撃等）の撤廃。

㉝党は、日本の現存する社会制度および政治制度に反対するいっさいの民主主義運動と革命運動を支持する。また党は、議会をはじめとしたブルジョア民主主義制度にたいし、プロレタリアートの階級闘争の発展にとって有効である限りにおいてこれを利用する。

党は、ブルジョア民主主義制度を擁護し、プロレタリアートの階級意識をくもらせ、堕落させるような日和見主義、改良主義、現代修正主義、社会帝国主義と断固として仮借なく闘い、同時に、プロレタリア階級独裁によってのみ真の民主主義が実現できることを主張する。

党は、以上の政治的、社会的諸任務の完全な首尾一貫した遂行は、わが国のブルジョア独裁権力を打倒し、アメリカ帝国主義を一掃し、プロレタリアートの独裁を樹立することによってのみなしとげることができると固く確信する。

規約

第一章　同盟員

一、同盟の綱領と規約を認め、同盟の一定の組織で活動するものは同盟員である。

二、同盟員は、機密を保持し、同盟費を納入し、組織の決定に従って中央委員会および同盟組織に全活動を報告する義務を負う。

三、同盟員は、その意見を原文のままで、中央委員会または大会に伝達するよう要求する権利がある。

四、同盟への加盟は、加盟を希望するものが二名の同盟員の推せんにもとづき、中央委員会の定める当該組織の過半数以上の決議と中央委員会の承認を得て、同盟員となれる。加盟許可の後、所定の期間は同盟員候補とする。

五、同盟員候補は、同盟員とともに活動し、責任をともにする。ただし、被選挙権、決議権をもたない。同盟員候補の期間は、原則として六ケ月とする。候補期間を過ぎたものについては、同盟員とすることの可否を中央委員会の定める当該組織において三分の二以上の決議をもって審査したうえで承認する。審査において適格と認められないものはさらに候補期間を延長するか、加盟を取り消す。

六、獄中における加盟も、第四条の精神にのっとり、一定の条件のもとでこれを承認する。

第二章　同盟の組織

七、同盟は大会、中央委員会、および細胞によって構成される。同盟の基礎は細胞である。

八、大会は同盟の最高議決機関である。

大会は中央委員会が招集し、原則として二年に一回開催しなければならない。ただし同盟員の三分の一以上の要求がある場合、中央委員会は大会を招集する義務を負う。大会は、中央委員会、中央委員候補、代議員によって構成される。代議員の選出方法と比率は中央委員会が決定する。綱領と規約の改正、中央委員および中央委員候補の選出は、大会による。

九、中央委員会は、大会から次の大会までのあいだ大会の決議を執行し、党の全活動を指導する。

十、中央委員会は、中央委員会議長を一名選出する。中央委員会に欠員ができた時、また特殊の事情のもとでは、中央委員会は、中央委員候補を中央委員にすることができる。

十一、中央委員会の任命を受けた当該組織は、一定の地方、もしくはその委任された一定の機能に関する業務をおこない、その任務の遂行において中央委員会の決定に従う。すべての同盟組織は、中央委員会に報告の義務を負う。

十二、同盟の会議は、全体の三分の二の出席をもって成立し、特に規定のある場合を除き、出席者の過半数の賛否で議決される。

第三章　財　政

十三、同盟の財政は同盟費、カンパおよび同盟が組織する特別の事業によってこれを行う。

第四章　同盟の規律

十四、綱領の諸原則から逸脱し、規約に違反するものは、権利停止をふくむ最高除名にいたる処分を受ける。

十五、処分の決定は、中央委員会が定める当該組織の三分の二以上の決議と中央委員会

の承認をもっておこなう。

十六、中央委員会に属する同盟員の処分は、大会で決定されなければならない。特殊な事情のもとでは、中央委員会の三分の二以上の多数決によって決定し、次の大会で承認をうけなければならない。

十七、同盟員にたいする処分をおこなう時には、処分を受けるものに十分弁明の機会をあたえる。処分を受けた同盟員は、処分に不服であるならば再審査を求めることができ、中央委員会および大会にいたるまでの上級機関に異議を申請できる。また除名された同盟員の再加盟は中央委員会がこれを決定する。

第五章　付　則

十八、この規約に定められていない問題は、中央委員会が綱領と規約の精神にもとづいて処理する。

統合大会特別報告

組織活動に関する準則

この「準則」は、統合大会で大会組織委員会によって提案された特別報告であり、統合後ただちに要請される組織活動の一定の方向性を示したものである。われわれはこれにもとずく組織活動を蓄積し、「組織テーゼ」へと高めあげる決意である。

はじめに

われわれは、綱領・規約の精神にもとづいて、情勢の基本認識とわが同盟の当面する任務を定めてきた。

さらに、われわれは党建設を実際に行うにあたって、組織活動に関する若干の準則を確認する。

この必要と意義は、次の諸点によっている。すなわち、第一には、ブンドの思想と政治を根本から総括するということは、とりもなおさず、その小ブル共産主義思想と政治上の急進民主主義政治の克服を組織上のそれらの克服にまでに至らねばならないということである。そして第二には、闘い取られた綱領の見地、路線は、組織に貫かれねばならないし、かつまた、そうでないならば路線は、労働者大衆の革命闘争の物質力に転化しえないということである。以上の理由によって、われわれが、こうした準則を打ち固めることは、今後の、単一の革命党建設の途上において、全ての共産主義者、労働者の間での思想的統合が、組織思想をも貫くものとして、ひとつの典型をしめすうえで、その意義ははかりしれない。

われわれが直面している八十年代は、苛烈な革命的激動の時代である。今までより一層、労働者階級は厳重な組織を要する。今こそ、貴重な一刻を失うことなく、不屈に党建設のため、活動しなければならない。われわれ故、同盟は、われわれの諸注意を以下の諸項におき、われわれの準則とする。

1　革命党の基本的性格と任務についての一般的原則

① 共産党は労働者階級の一部であり、最も進歩し、最も階級意識と献身性に富み、ゆえにまた、最も革命的な部分である。党は労働者階級全体の利害より他の利害を持たない。

党は、労働者階級の最も革命的な部分が、正しい路線にそって、プロレ

タリアート、半プロレタリアの全大衆を指導するに用いる、組織的及び政治的槓杆（こうかん）なのである。

② プロレタリアートはブルジョア政党に対立する独自の政党をもたないで、その革命を成就することはできない。あらゆる階級闘争は政治闘争である。不可避に内乱に転化するこの闘争目標は、国家権力の獲得である。国家権力は、政党を通じるほか、掌握し、組織し、運営することはできない。

同じく階級闘争は、またプロレタリア運動の種々異った形態の中央集権的組織と統一的指導を要求する。党だけが、かかる調整と指導の中心たりうる。かかる党を建設、強化し、そして自己をそれに従属させることを拒むのは、さまざまな戦場で行動するプロレタリアートのさまざまな戦力の統一的な指揮を否定する意味に他ならない。また労働者階級は、ゼネストだけではブルジョアジーに対する勝利を得ることはできない。プロレタリアートは武装蜂起に訴えなければならない。それを理解したものは、だれでも、また組織的な政党が必要であり、無定形な労働者連合では不充分であることを理解しなければならない。

③ 党の任務は労働者の利益を守り、労働者階級全体の利益を代表することである。党の任務は、プロレタリアートの最も広範な大衆と常に最も緊密な接触を保つことである。共産主義者は、広い労働者組織内に体系的な仕方で、組織と教育との活動を行うことを最も重要な任務と考える。共産主義者は、非政治的性質を有する大衆的な労働者組織を、これが明白な反動的性質であるときですら、決して忌避しない。これらの組織内に党はたえず、その宣伝を行なう。

④ 党は民主的中央集権にもとづいて建設されねばならない。民主的中央集権の基礎的原則は、党の中央部が全党によって選出され、党の上級の指令一切が下級を拘束し、大会と大会との間、一切の党員が一般的かつ無条件にその権威を認める強い党の中心が存在すべきことである。今日では、党の地方組織に対する広範な「自治制」の主張は、党の隊列を弱め、その行動力を崩し、そして小ブルジョア的無政府主義的傾向を強め、しまりのない構造に近づく傾向を助長する。

⑤ 党は合法的及び非合法的活動をいかに組織的な方法で結合すべきかを学び、習熟しなければならない。合法的運動は常に非合法党の実際の監督の下におかれねばならない。党の中央及び地方政治における議会分派は、党が一定の瞬間に、合法的であると非合法的であるとにかかわりなく、完全に党の統制下におかれねばならない。

⑥ 党はブルジョア階級独裁国家—政治警察と闘争し、プロレタリア階級の階級闘争を系統的にプロレタリア階級独裁に導くために、大衆闘争のなかから生まれ、すぐれた試練をへた幹部のなかから職業革命家をつくりだす。職業革命家を組織の中核としなければならない。

⑦ 党の全組織的活動の基礎は、あらゆる場合に党の細胞の建設でなければならない。あらゆる労働組合、あらゆる工場など、どこにでも党の細胞が建設されなければならない。

⑧ プロレタリアートの勝利を容易ならしめ、かつ促進するために、党は都市のみでなく、農村の農業労働者、貧農に対する活動を強め、ここにおける党建設にも特別の注意を払わねばならない。

2 当面する一時期の党建設に関する準則

（1） 綱領の一致にもとづく組織活動

わが党綱領の当面する任務を完全に首尾一貫して遂行するために、党は強固な中央集権党として建設されなければならない。

それ故、わが党は、第一になによりも綱領にもとづく統一と団結を強固に打ちたてねばならない。党の統一は、綱領上の諸原則の統一を基礎としたときのみ確固として安定したものになるのであり、綱領上の見解の分裂や不統一のうえに組織原則は打ちたてられず、中央集権主義もまたありえない。われわれは、今後も、まずこの点を重視し、党綱領を深め、しっかりとしたものにしていくことの基礎の上に、わが党組織の強化・発展を置く。

第二に、われわれは党の総意によって選出された強固にして厳格な中央委員会を建設しなければならない。党中央指導部を創設し、支持し、強化するために積極的に活動することは、全党の任務である。

第三に、形式上中央委を設定するのみならず、実際に指導の中央集権を確立するために、次のことを推進しなければならない。

その一つは、中央委の執行受任者網を地方委—地区グループ—細胞（工場委など）として建設することである。

その二つは、中央指導部の専門諸機関を設置し、中央の構成員が未分化のあいまいな仕事でなく、訓練された個々の専門員として打ち鍛えられることである。機関紙を編集・製作するための機関、通信、伝達、輸送、印刷のための機関、スパイを摘発する機関、軍人を組織する機関、宣伝・煽動のため、財政のため等々の革命的活動のいろいろの専門的能力を組織すること。

その三つは、中央に対する（したがって、また全党に対する）あらゆる、できるだけ完全な報告の義務である。党員がこのような義務を果すことによって、中央は運動の全体をつかみ、綱領上、戦術上、組織上の諸問題を正しく解決することができる。責任の分散化は、革命的な中央集権化の必須条件であり、その欠くことのできない補正手段である。党中央部に規則的に状態を報告することの他には、党内公開性の手段と武器はありえない。

さらに四つには、これらの中央集権制から導きだされる組織の運営原則は民主集中制である。党の中央指導部は、大会にのみ、その任免権が存す

全国政治新聞　毎月10日、25日発行

赫 せっき 旗 の購読を！

共産主義者同盟中央機関紙

《定期購読料》
1部・22回
手渡し — 3000円
開封郵送 — 3500円
密封郵送 — 4000円

取扱い書店一覧

東京　模索舎
ウニタ書舗
吉祥寺ウニタ
文鳥堂四谷店
コマバ書店
明大生協（本校）
〃〃（和泉）

川崎　ルビコン書房
大阪　大阪ウニタ
曽根崎書店
京都　セイレイ社
福岡　九大生協（教養）
沖縄　沖縄舎
高良書店

札幌　アテネ書房
ひらひら
札幌大生協
小樽　小樽商大生協
仙台　萩書房
浦和　荒井書店
名古屋　名古屋ウニタ

ること。党員は、少数意見が圧殺されず、綱領上、組織上の諸原則を逸脱しない限りで全ゆる批判の権利を有すること。論争が民主的に保障されること。党員は、処分について大会で弁明しうること。また中央は全党に、地方は中央に、下級は上級に従わねばならないこと。決定の執行過程において中央は絶対的権限を有すること等々がそれである。

(2) 全国政治新聞を党活動の武器に

① 政治新聞の定期的な発行、配布を武器にして、強力な宣伝、煽動、組織化の党を建設し、大胆に大規模に、かつ強力に労働者大衆に働きかけねばならない。党は、したがって「全面的政治暴露、煽動」を通して、労働者階級の前衛の役割をはたし、労働者階級を支配階級に高めあげ、革命運動を発展させ、指導することができる。

すなわち、全国政治新聞だけが地方政治や地方主義を克服して、国政を扱い、権力問題を扱い、全面的政治暴露を組織することができる。と同時に、全国政治新聞は、集団的宣伝者および集団的煽動者であるばかりでなく、また集団的組織者でもある。この新聞の協力者たちの組織こそ、まさに革命の最大の「沈滞」の時期に、党の名誉と威信と継承性を救うことにはじまって、全人民的武装蜂起を準備し、指導し、実行することに至るまでのあらゆる事態に対して用意をもった組織である。

こうした見地と革命党の基本任務を放棄してきた経済主義とテロリズムの共通した誤りに対して、われわれは仮借なく闘うことを通して結成されている。さらにこれらを強固に打ち固めていかなければならない。

② 公然たる革命的反乱に先だつ時期におけるわれわれの一般的任務は、革命的宣伝と煽動である。党の宣伝、煽動は、プロレタリアートのまさに中心に根をおろさなければならない。それは、労働者の現実の生活から彼らの共通の利害と熱望から、また特に彼らの共通の闘争から生みだされなければならない。

労動者大衆の中でのわれわれの煽動は、わが党が闘うプロレタリアートによって、彼ら自身の運動の勇敢で、先見の明があり、忠実かつ精力的な指導者として認められるようなやり方で行われねばならない。われわれが真に発展して、多くの労働者大衆の党になるためには、闘いへの不断の献身的参加なくしてはありえない。プロレタリアートをいかにして指導するかを実践において学び、ブルジョア社会の廃絶のために慎重な準備を行う能力を獲得して、われわれがプロレタリアートの前衛になることを可能にするものは、資本とブルジョア国家との終わることのない、小規模の戦争における労働者大衆の指導だけである。党の綱領や最終的な武装闘争を一般的に訴えることによって、現実の労働者のささやかな闘争に受け身であったり、尊大であったり、さらに敵対的であったりすることは、最大の誤りである。共産主義の一般原則を説教するのでなく、われわれはあらわれてくる問題の客観的内容にしたがって、自らの革命的態度を決定し、そのなかで一般原則の正しさを一歩一歩浸透させていかねばならない。

③ われわれは全国政治新聞を中心にして、さらに集会の組織化、大衆集会への介入、街頭演説、映画会、ポスター、ステッカー等、さらに労働者のあらゆる団体の中で活動することによって、党の宣伝・煽動活動を強め、党の影響力を拡大する。

こうして党は、党の宣伝、煽動活動をプロレタリアートの中に、細胞を大規模に、かつ広範に建設していくことと結びつけてゆかねばならない。

党が大工場および中位の工場、そしてあらゆる職場のプロレタリア大衆と最も緊密な関係を保ち、強め、拡大していくことに最大の努力をはらわないなら、われわれは、大規模な革命的大衆行動や真の革命運動をいつまでたってもやりとげることはできない。

(3) 工場細胞建設

党建設の基礎を細胞建設におき、とりわけ、工場細胞を建設して、工場、職場、地域を革命の砦にかえる活動こそ、プロレタリア階級独裁のため、全人民武装蜂起をめざす重要な、欠くことのできない準備活動である。

わが同盟の「正規の攻囲」軍の組織化の環は、全国の津々浦々の工場に革命党の細胞を建設することによって、社共から圧倒的多数の労働者をひきはなし、ひきよせて、産業予備軍の闘争と組織化と結びつけて、工場を革命の要塞にかえることとである。と同時に、この砦を農民の闘いの砦、あらゆる勤労被搾取大衆の闘争拠点と結合し、巨大な単一の革命闘争の戦列を整えるものである。それゆえ同盟は、主要な工場、職場を革命の砦とするため、特別の注意をはらい、力をここにそそぐことをうながす、いくつかの組織政策をとる。

(4) 労働者幹部政策

革命は正しい路線と政策をもつ必要があるばかりでなく、たくさんのすぐれた、試練をへた革命の幹部を必要とする。こうした幹部は大衆闘争のなかから生まれ、革命のはげしい風波のなかで鍛えられ、成長する。マルクス・レーニン主義を身につけ、大衆の信頼をうけ、政治的見通しをもち、献身性と自己犠牲にとみ、独自で問題を解決し、どのように困難にあっても動揺せず、労働者階級の解放のために誠実に活動するたくさんの幹部を育てあげねばならない。

とりわけ、われわれの歴史的事業の目的からして、労働者階級のなかからこうした幹部を大量に生みだし、党の構成を整えることに力をそそがねばならない。こうした幹部の育成は、大衆闘争と結びついた不断の目的意識的な、計画的な活動として実現されねばならない。

(5) 地下党体制の準備

① われわれは政治警察およびブルジョア階級独裁権力のあらゆる暴力装置の弾圧と闘いぬき、最後の勝利を勝ちとるために、地下党体制を準備し、強化していかなければならない。

党はいつでも闘争の条件の変化にただちに適応できる立場にあるやり方で組織されるべきである。われわれは、もっぱら暴動や市街戦のみを、あるいはまた極度な弾圧の条件のみをあらかじめ考慮するのは、党組織建設において最大の誤ちである。その革命的活動において党は、全ゆる状況に備え、「ふい撃ち」に合わないよう常に、闘いの用意がなければならない。

② われわれは今日の状況を利用し、非公然活動の領域を一歩一歩拡大し、その経験を蓄積していかなければならない。それは合法主義の誘惑と、大衆と結びつかない召換主義との不断の闘争が必要である。

③ 合法的および非合法的活動の指導は、常に同一かつ単一の中央委員会が掌握していなければならない。

われわれは、あらゆる党員および革命的労働者を将来の歴史的役割において、革命時におけるわれわれの闘う組織の一兵卒としてみる。したがってまた、今日の活動は、同時に、明日の最終的な闘争の重要な要求に備えての訓練である。

④ 以上の見地を踏えてわれわれは、特に次の点に注意をむける。まず中央委員会とその執行受任者網の諸会議は非公然に開き、公然活動には極めて慎重でなければならない。地区グループの構成員、上級党組織と連絡をとる細胞の成員も最高の秘密をもって活動しなければならない。特に機関紙については、非合法化される危険性を常に考慮し、配布ルートの整備等の備えを強めなければならない。

秘密活動は、権力奪取まで、日本帝国主義の弾圧、破壊工作から革命運動の確固さと継承性と統一性を守り、決定的な時に備えるため、絶対欠くことができないものである。われわれは、情勢の急展開にも見合って、われわれの秘密の機能を集中し、専門化し、これの活動のより完全に習熟に力を注がなければならない。

統合報告

内容

第一部　われわれはどのように統合を戦取したか
Ⅰ　分派から統合へ
Ⅱ　総括の一致、綱領、組織、戦術の一致
第二部　ブンドを止揚しうる単一党の大道へ
Ⅰ　ブンド総括の核心とは何か
Ⅱ　大胆に潮流こえ進撃しよう
第三部　情勢の基本認識と同盟の当面する任務
Ⅰ　疾風怒濤の国際情勢
Ⅱ　国内情勢の特徴
Ⅲ　当面する同盟の任務

第一部　われわれはどのように統合を戦取したか

Ⅰ　分派から統合の時代へ

すべての同志、友人諸君！

われわれ共産主義者同盟（紅旗）と共産主義者同盟（革命の旗）は、数年におよぶ粘りづよい論争をおしすすめ、さまざまな対立点を止揚し、今ここに綱領と規約の一致をかちとり、組織を統一し、統合をかちとった。

両組織の統合は「日本社会党、日本共産党にかわる単一の革的労働者党を創建する」（綱領）ための中核体をかちとるものであり、共産主義者が自らの歴史に責任をもち、労働者階級の歴史的利益と熱望に応えきる主体的条件を現実にたぐりよせ、しっかりとにぎりしめたのであり、分散と混迷の局面を究破したのである。われわれ両派の前進は、党建設の現実的な一方法を定着させることに成功した。つまり、さまざまにことなった道すじを通ってきた組織が、綱領の一致を基礎にすえ、戦術・組織の一致へと進むならば、大きな前進をわがものにできるということを実践的にしめし

てきた。われわれの綱領、路線にもとづく党建設は、われわれ相互をより高いところへと押しあげ、ブンドから出発し、ブンドをさらに一歩ふみだして前進する可能性を獲得させたのである。それは、ブンドの正しい総括をなしきることによって、自らの弱点である急進民主主義をえぐりだし、マルクス・レーニン主義を獲得することを基礎にすえきっていくことこそ、党建設を一歩一歩着実に前進させてきた根拠なのである。

統合への軌跡

共産主義者同盟（革命の旗）は、游撃派とマルクス・レーニン主義派との統合によって闘いとられたブンドのマルクス・レーニン主義の分派である。第二次ブンドの急進民主主義を清算し、マルクス・レーニン主義にとってかえるというブンドの総括のもとに、日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命の政治路線の一致のもとに綱領草案をかちとり、一九七九年七月に統合した。そして単一の全国党創建の中核体として自らを位置づけ、マルクス・レーニン主義分派に統合を呼びかけていった。統合の成果を二回大会でいっそう打ち固め、ひきつづき労働者党として自らをうち固める党建設をすすめ、第三回大会を獲得した。

共産主義者同盟（紅旗）は、一九七六年三月に闘う党の旗印として綱領を戦取し、綱領・戦術・組織路線の一致の下で二つのブンドの分派の統合をもって結成された。この意義は、マルクス・レーニン主義の諸原則の復権のもとに、日共現代修正主義とブンドの小ブル急進主義との総括と分界線、日帝打倒・米帝一掃・プロ独樹立の当面する日本社会主義革命の政治総路線等を綱領にうち固め、第二次ブンドの止揚と新たな党建設にむかって、分裂から統合の時代をブンド史上初めてきり拓いたところにある。これ以降、紅旗派は、二度目の統合を一九七九年十二月に闘い取り、三つの分派が一つの組織に互いの歴史的経緯のちがいをこえて溶けあい、革命の大義のため奮闘してきた。

両派は、二年余にわたる綱領をめぐる討議のためのテーブルにつき、さまざまな曲折を経つつも、一致点をさらに深めうち固めることと、他方で不一致点を解消するために粘りづよく討議をつづけてきた。そして両派は、各派二回づつ四回にわたる文書による討議をすすめることによって、一致点、不一致点の分界線をはっきりさせ、政治新聞上の統合論争とは異なった方法によってすすめてきた。この方法は、不一致点の解消のための討議を工業化させることに成功し、時間を飛躍的に短縮させ、統合をわがものとすることができた。

それは両派がブンドから出発し、ブンドを一歩ふみだして前進することを共通の問題としてとらえきり、ブンド総括の基本点で一致しているのみならず、日本革命の政治路線、情勢の基本特徴ならびに党建設の基本方向での一致を獲得していることを基本的な条件としていることによってのみ可能なものであった。われわれは相互に統合のための六条件を掲げており、全国の共産主義者、マルクス・レーニン主義分派に統合を呼びかけており、またこの六条件の一致のもとに、綱領の一致、戦術・組織の一致へとすすむことも一致していた。それ故、われわれは六条件の一致を獲得するための討議から開始していった。そこで統合の六条件をもちより、検討を加え、一致点の確認を第一にし、六条件の準則をかちとった。そのうえで統合の六条件の不一致点の解決をおこない、統一の綱領獲得のための準備をすすめていったのである。

II　総括の一致と綱領、組織、戦術の一致

われわれが掲げていた統合のための六条件は、第二次ブンドの急進民主主義・小ブル共産主義を清算し、マルクス・レーニン主義にとってかえることを党の政治・思想・組織路線の全領域にわたって定式化したものである。

それは、ブンドの総括を基礎にすえたものである。われわれは、ブンド

が日本階級闘争のなかで発揮した革命性については、断固として継承し、発展させるという態度は堅持しつつも、その歴史を通じて政治・思想・組織路線のなかでの急進民主主義・小ブル共産主義の弱点を正面からとらえきり、党的敗北に導いた致命的欠陥を克服することが、ブンド総括の基本である。（詳細は二章）

われわれは、ブンド総括の基本線をもとに統合の六条件にそって具体的な問題にはいっていくことにする。

(1)　ブンドの思想政治路線上の総括を一致させたうえで、マルクス・レーニン主義の単一党創建にむけての方法（段階性）の問題で意見の不一致があった。革命の旗派は「第三次ブンド」を、紅旗派は「単一の革命党」をそれぞれ主張していた。問題の核心は、第二次ブンド諸派が共産同の党的破産を根底的に総括せず、急進民主主義を温存したまま主張する「第三次ブンドの建設」と厳格な一線を画することの重要性を、まず第一にはっきりさせることであり、内容上においては、単一党建設の事業はおいて第二次ブンドの党的破産を正しく総括して、マルクス・レーニン主義の分派による第二次ブンドの党内党派闘争に組織的な結着をつけて、その成功を基礎に潮流を越えた団結をも射程に入れるべきであるということであった。両派はこの点で完全に一致し、同時に今後「第三次ブンドの創建」を掲げないことで一致し、「社共にかわる単一の革命的労働者党を創建するために奮闘する」と簡潔に定式化された。

思想路線の一致

(2)　マルクス・レーニン主義の思想路線の完全な一致を獲得した。これは、かっての共産同がおち入った小ブル共産主義・急進民主主義を清算し、マルクス・レーニン主義の革命的な思想路線を獲得し、更に深化していくことを意味している。第一は原則的資本主義批判の確立についてである。現代修正主義、急進民主主義の資本主義批判を批判しきり、労働者階級の経済的隷属を暴露し、賃金奴隷制を明らかにするとともに、所有と労働の分離の問題を軸として、これの再確立をめざすことについては、討論が開始された段階で完全に一致しており、両者のあいだにはこの点に関して何の問題も存在していなかった。しいていえば、綱領に原則的資本主義批判を刻みこむ方法で若干の相違点があったが、だが、それも今回の綱領の作成時に両派の綱領を前進させるなかで解決された。そしてこの資本主義批判の確立は、社会主義と労働運動の結合のために、労働運動を主戦場とする闘いのなかで生かしていかなければならないと確認された。第二は、ソ連論についてである。われわれはソ連論の領域で常に先進的な位置を占めていた。それは紅旗創刊号ならびに長征二号で論文として打ち固められた。今日、ソ連論のなかで特に重要なのは、ソ連の国家と社会の階級的性格をその政治的経済的基礎を解明してどのように規定するかという問題である。両派は、今日のソ連は口先で社会主義を唱えているが、実際は現代修正主義党の支配をテコとした官僚ブルジョア階級が支配する新しい形態での国家独占資本主義社会であり、米帝を中心として日・西欧帝と世界支配を争う帝国主義国家であるという見地で完全に一致した。だがソ連がプロレタリア独裁からブルジョア階級独裁へと転化した時期については、今日の段階では一致しえてはいない。だがこの不一致点は、前者の問題が一致していることによって、ソ連論の更なる理論的深化を共同の課題として担い、党内討議を深めるならば解決しうるという副軸であると確認した。第三は、毛沢東思想の支持についてである。毛沢東思想を掲げることについて

紅旗派は、毛沢東の思想と理論がマルクス・レーニン主義の、中国の現実への創造的適用であり、かつ同時に継続革命など、いくつかの点でこれらを発展させたことへの高い尊敬をはらい、これを支持し、学んでいく姿勢を堅持する。しかし日本の革命党の指導思想はマルクス・レーニン主義で充分であること、かつまた今日の日本の中国派が一部を除いて毛沢東思想を指導思想とし、これを日本革命に適用するうえで追従主義となって日本革命の総路線を掘りくずし、民族主義・社会愛国主義に転落している原因の一半は、うたがいもなく今日の中国共産党の理論に存在している、こうした日本共産主義運動の現状を認識し、これと一線を画する必要があると主張した。すでに毛沢東思想を指導思想としないことでは、準則をと

りかわす段階で一致していた。

そのうえで毛沢東思想の評価すべき点とは、第一に中国において新民主主義の路線をうちたて、人民民主主義からひきつづき社会主義革命へ転化、発展する道をしめしたこと、第二にプロレタリア階級独裁のもとでの社会革命の継続の理論と実践をうちたてたこと、第三に中ソ論争にみられるように、現代修正主義と闘い、国際共産主義運動上の重要な位置を占めたことの以上三点にまとめられる。

情勢認識と日本革命路線の一致

(3) 今日の情勢の基本特徴に関して、ますます戦争の要素が増大しており、また他方、革命の要素が増大していることについては、認識が完全に一致している。（詳細は第三部の情勢分析を参照）

こうした情勢の基本特徴をふまえて次に問題になったのは、革命の旗派が統合の六条件第三項にかかげた「反ソ反米反覇権の国際人民闘争と日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命の政治路線を結合して推進すること」についてであった。もちろん両派は、今日の民族解放闘争が「世界革命の主力軍」（革命の旗）「世界プロレタリア共産主義革命の推進翼」（紅旗）であることで、国際階級闘争のなかでのその位置については一致している。だが、両派の間の議論は、革命の旗派が今日の史上三度目の、「戦争と革命の時代」のなかで被抑圧民族のもつ政治的役割と帝国主義本国プロレタリア階級の国際主義的連帯の意義をつきだすうえで主眼においた。これにたいし、紅旗派は、わが国の政治路線を実行するうえで「反ソ反米反覇権の国際人民闘争」という規定が、わが国の革命路線をあいまいにし、日本の毛派潮流の社会愛国主義との厳格な一線を画することができなくなるという主張であった。そこで両派はまず論争点の整理のため国際路線の問題と、わが国のプロレタリア階級が当面する世界大戦の危険性の増大にたいしてとる態度の問題、そしてわが国の革命闘争を前進させるうえでの当面する任務の問題へと分けて論議を行った。その結果、世界プロレタリア共産主義革命の前進にむけ、国際プロレタリア階級が反帝反社帝の路線を堅持することでまず一致した。そして今日の米ソの世界支配をめぐる争奪戦の激化、世界大戦の危険性の増大のなかで被抑圧民族の解放闘争がこれと真正面から対決しているという認識も一致した。そして帝国主義本国プロレタリア階級がこの世界大戦に備え、帝国主義戦争を革命でもってうちやぶるためにも被抑圧民族の闘いを支持し、これと固く団結し、革命を準備する必要があるということで一致した。さらには、こうしたわが国の革命を準備するうえで、今日、中国の「三つの世界論」を世界革命戦略とし、日ソ間の対立・争闘を帝国主義間対立と認めず、社会愛国主義的態度をもってブルジョア階級と協調する部分との闘争が不可欠であることについても一致した。以上の一致をもとに両派は、この表記を六条件から削除し、また綱領に表記しないという判断に至った。この一致点は、今日多くの戦闘的左翼が被抑圧民族との団結・連帯を口にはするが、しかしながら民族解放闘争のもつその世界史的位置を正しく評価することができず、そしてもっとも重要なことは、それらの問題の内実をわが国の国家権力の打倒の問題として正しく結びつけて実践できないでいるなかで、われわれの見地のみが、真のプロレタリア国際主義の内実を闘いとるものとして、先の三点の一致をさらに豊富化していくことが同時に確認された。

(4) 日本革命の政治路線の基本的見地については、当初から完全に一致していた。とりわけブンド総括で明らかなように、米帝一掃であれ、追放であれ、これがわが国のプロレタリア階級人民にとって「民族解放」や「民族独立」の課題でなく疑いなく社会主義革命の不可欠の任務の一環であるとの一致として確認されている。これは綱領の第四章に次のように刻みこまれた。それは、日本の国家と社会の性格、とりわけ米帝問題と日米安保体制の階級的性格を明らかにし、以上のことから導きだされる日本革命の性質が社会主義革命として定式化された。更にはわれわれの任務をしめすために、社会主義統一戦線の内容を明らかにしている。ここに両派のあいだにあった若干の相違は、まったく解消されたのである。

正規の攻囲と党建設の一致

(5) 今日の情勢、とりわけ国内情勢の問題で帝国主義戦争の準備と政治反動が強まると同時にプロレタリア階級と勤労人民の反抗戦もまた強まっていることを基本特徴としておさえることができる。そのうえでわれわれはいかなる戦術思想を確定するのかが問われている。

かつて第二次ブンドがそうであったように政策阻止闘争の戦闘化の延長線上に「突撃戦」を展望するという急進民主主義ではなくして、こうした痛苦な敗北を教訓化し、敵の要塞を攻囲する「正規の攻囲」戦術を採用すべきであると一致した。そして今日、社会主義革命の実現にむけての物質的条件がますます成熟している現在、われわれの側の主体的条件のより一層の整備を急がねばならない。そのためには、今日の共産主義者の分裂に終止符をうち、分裂の時代から統合の時代へと、われわれの統合をテコとして進めていくことが要請されている。それは、マルクス・レーニン主義の全国単一党創建という単一の戦闘司令部をつくりだし、そのもとに社会主義統一戦線の結成の現実性をつくりだす活動を強化していかなければならない。われわれは労働者階級のなかでの影響力をつくりだすためにねばり強く活動し、労働運動を主戦場とした闘いに充分に習熟していかなければならない。われわれは、統合による党建設の実践を深め、その経験を総括し、一つの党建設上の定式とすることに成功してきたが、また今回の統合も更にわれわれの経験を豊かなものにするであろう。今までの統合によって培ってきたそれぞれの組織路線を更に鍛えあげていくことが必要である。われわれの党建設の基本は、職業革命家を中核とし、工場細胞を基礎とした中央集権党である。このもとに、全国政治新聞を軸とした活動を定着させ、党の宣伝・煽動戦を飛躍的に発展させ、労働者大衆との接近を実現し、と同時にこの活動を通じ、思想統合と階級闘争に対する政治指導を鍛え、真に全国政治新聞を「集団的組織者」にしうる条件を形成してきた。この主体的条件が路線を組織にまで貫くという党活動のスタイルを生みだしてきた。この側面を更に発展させていかなければならない。さらにわれわれは、幹部政策の基本に、プロレタリア幹部の隊列をつくりだしていかなければならない。これは革命的労働者党の一つの大きな要件であることも確認された。

綱領・戦術・組織の一致とは、それはとりもなおさず思想・政治・組織路線の一致であり、それは綱領・規約の一致としてにつめあげられなければならず、脩けつに刻みこまれる必要がある。そして更には、その具体的内容と党活動の基本方向を定式化させるためには、テーゼをつくりだし、それに基づく活動をつくりだしていくことが党活動を工業化していくことができるのである。今大会で「労働運動の戦術テーゼ」（案）を採択し、更には女性解放・「障害者」解放のテーゼをかちとっていくことをひきつづき進めていくことが確認されている。

最後に次のことを明らかにしよう。先の統合の六条件のなかの相違点を具体的に解決することが可能となった基礎は、確認するまでもなく基本的なところで両派が一致を獲得していたことによる。

それは革命の旗が、二回大会とその六中委によって、他方、紅旗派が、三回大会とその三中総によって、ともに自らを飛躍的に前進させる内在的契機を作りだした努力が、数年前に開始された論争をより高次な内容で一致させるベースを作りえたこともまた銘記されねばならない。

第二部 ブンドを止揚しうる単一党の大道へ

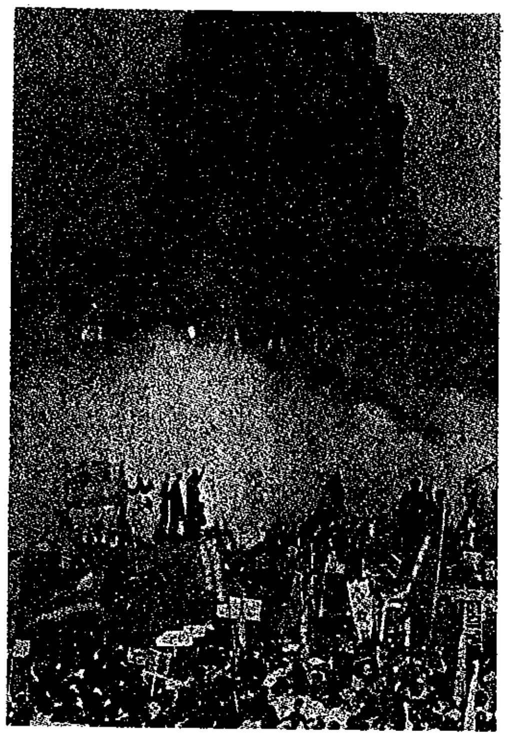
I ブンド総括の核心とは何か

われわれが相互にかかげていた統合のための六条件や今回戦取した綱領

・規約もまた、その基礎にブンド総括をすえている。その総括上の基本は、わが国の階級闘争の歴史のなかでブンドの革命的意義を継承し、しかしながら、この優位性を歴史性ぬきに継承し、無総括派のような沼地に陥るのではなく、この意義をふまえたうえで、ブンドが歴史的に克服しきれなかった、ブンド史に貫いている思想政治路線上の弱点の真の切開をなしきることが必要である。この観点がブンドを出発点として、更にブンドを一歩踏みだし、革命的左翼総体をも対象化しうる地点を形成するためには、不可欠の条件である。

このブンド総括については、両者はすでに様々な方面から諸論文に発表しているので、今回はその骨格を確認すれば十分である。

ブンドを評価し継承すべき点は、第一に議会主義、ブルジョア民族主義の現代修正主義に転落した日共から決別し、暴力革命でブルジョア国家権力を打倒して、プロレタリア階級独裁を樹立する観点をうちだし、第二に日共の日帝の復活、対外侵略をみとめない反独占人民民主主義革命から社会主義革命へという三段階戦略を批判し、日帝打倒・社会主義革命の政治



路線をうちだし、第三に絶えず大衆闘争の最前線にたって国家権力と断固たたかってきたことである。つまり革共同の「人間解放の論理」ではなく、階級闘争の実践のなかで自らの革命的世界観をうちたてようとしたことである。第四に、プロレタリア国際主義の旗を高く掲げようとしてきた。

このように、旧左翼の現代修正主義を批判し、新左翼の出発点をつくりだしたブンドも、第一次、第二次を通じて党建設に勝利しえず、痛苦な党的敗北をきっしたことも明確にされなければならない。その敗北を導いたものは、第一にマルクス・レーニン主義の原則を貫きえず、小ブルジョアの憤激に依拠し、テロリズムに陥り、他方、経済闘争、民主主義闘争の戦闘化を自己目的化し、経済主義を生みだすという急進民主主義に陥ってきた。この急進民主主義は、社会主義革命の実現を民主主義の実現へと、おきかえる権力問題にたいする日和見主義である。第二に、トロツキズムに影響され、先進国革命主義に陥り、民族解放闘争の軽視におちいり、プロレタリア階級独裁国家と現代修正主義国家の根本的分岐を見ぬけず、「労働者国家」と規定してきた。他方では、「ベトナム革命戦争勝利」を掲げたように、民族解放闘争との連帯を帝国主義本国のプロレタリアートの国際主義的任務をしめすことと、民族解放闘争の今日的意義をつかみとる契機をもちつつも、根本的に切開しえず、世界プロレタリア階級独裁を当面する任務とする傾向を持っていた。第三には、日帝の単純自立論の立場にたち、米帝問題を日本革命の権力問題として把握することができなかった。それは米帝にたいする闘争を軽視することにつながった。

第四に、運動およびこれを導く戦術が全てであり、組織は無ともいうべき大衆運動主義に陥っていた。つまり戦術を組織の全体に貫いていく観点が欠如し、「計画としての戦術」ではなく「過程としての戦術」が基軸となっていたのである。それが宣伝・煽動の方法・観点にもあらわれ、全国政治新聞を軸とした党活動が軽視され、民主主義闘争の集会・デモへ党派部隊を登場させることにきり縮めており、労働運動を中心にすえきれず、

労働者階級との結びつきを弱めていた。第五に、党活動の中心を反帝闘争のヘゲモニーとしての組織活動においていたので、大衆組織の左派フラク連合に組織建設がとどまっていた。それは、職業革命家を中核とする中央集権の非合法党を彼岸化するものとなっていた。これらのことは、各々別々なものでなく、それぞれ関連しあっていたが、ブンドの思想・政治路線の根本的な弱点をしめすものであり、総じて急進民主主義政治とそれにもとづく組織建設から脱脚しなかったという致命的な欠陥をもっていたのである。

われわれは先にのべたように、ブンドの根本的な弱点の切開なくして、継承すべき点を正しく発展させることはできない。今日のブンド系分派のなかで無総括を路線化したり、清算主義におちいった部分が今日の情勢の激変に応えきれないことは歴史が証明することになるだろう。われわれは痛苦な党的敗北を真正面で受けとめ、克服すべき道を綱領・戦術・組織のその全体性の転換をなしきったことを宣言することができる。今後のわれわれの党建設・党活動の実践がこれらの諸点の克服の経験をより豊富化するであろうし、またしなければならない。このブンド総括を正しくなしきることは、われわれをして新左翼全体を止揚しうる地歩を築きあげ、プロレタリア単一党創建のための潮流をこえた統合・団結を真に獲得しうるということもまた銘記されねばならない。

II 大胆に潮流こえ進撃しよう

すでに、これまでの統合報告であきらかにしたごとく旧両派は、ブンドの革命的伝統を継承し、ブンド史総体の根底に貫く急進民主主義と小ブル共産主義思想を清算し、マルクス・レーニン主義を闘いとるため、全力で闘ってきた。

資本主義批判。唯物史観。階級闘争の理論の獲得。「労働者階級の解放は、労働者階級自身の事業でしかありえない」との原則。そして革命の根本問題は権力問題であり、プロレタリア階級独裁の見地は綱領、戦術、組織全体を貫く核心であること。これらを実践的には共産主義と労働運動の結合として首尾一貫して押し進めねばならないこと。ここに両派が闘いとったマルクス・レーニン主義の原則的見地があり、今日の思想的統一の核心があり、かつ、これを日本社会の現実に正しく適用し、当面する日本革命の総路線として具体化されている。

こうして、われわれは、ブンド総括を単なる弱点の指摘や総括一般にとめず、まさにいかなる綱領・路線におきかえ、闘うかに体現してきた。

と同時に、総括はそこにとどまるものではない。それは、いかなる党を創るかに具体し、実践化されねばならない。

革命をやるからには、革命政党が必要である。革命の政党がなければ、マルクス・レーニン主義の革命理論と革命的風格にもとずいてうちたてられた革命政党がなければ、労働者階級と広範な人民大衆を指導して帝国主義とその手先にうち勝つことはできない。

そうであればこそ、われわれはこの綱領をかかげ、マルクス・レーニン主義の旗の下での全国の共産主義者、労働者の団結をよびかけるのである。

われわれは、同盟の戦取をもって、単なるブンドの統一や再建をめざすものではない。

われわれは、綱領の冒頭に宣言したごとく日本共産党・日本社会党にかわる単一の革命的労働者党建設をめざすものである。社共にかわれる革命党建設のためには、わが国の多数の共産主義者が、思想・政治の一致の下で、団結することが不可欠である。それは、ブンドにとどまらず、全ての潮流の諸党派、諸サークル、個人を対象とし、社共から離反する部分をも当然対象としなければならない。

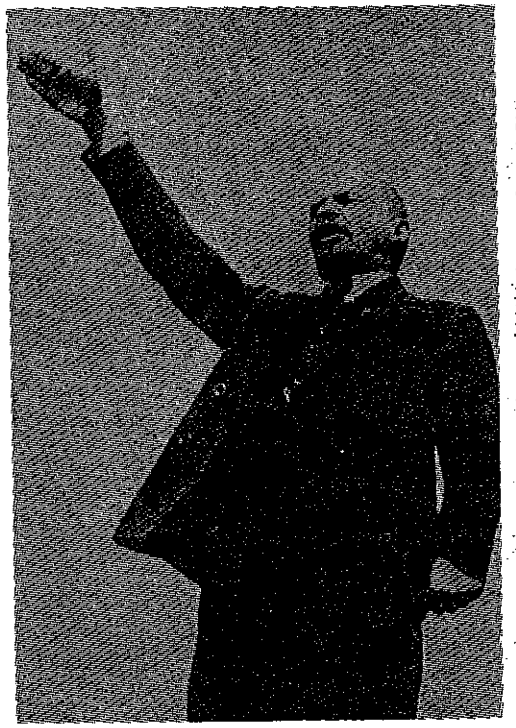
しかし、われわれは、団結一般や当面する戦術や運動の利害によって団結する党派の横断的連合であったり、無定形な党派の統一戦線体であってはならないと考える。われわれは、これまで共産主義者の統合を綱領、戦術、組織問題における原則的見地での一致をもとにはかる態度をとり実践してきた。その各々の骨格を、前史では、〃六つの条件〃として掲げてきた。わが同盟はこの基本的態度について変るものではない。しかしなが

ら、今日、全ての潮流を貫いて、流動する大きな再編の気運を見すえ、われわれはこれまでのブンド内部の統合の数回の歴史的経験をふまえて、共産主義者の思想的統合を大きく発展させるため、その規準と方法を大きく構えて検討をせねばならない。

綱領論争と綱領作成の組織化の方法、副軸における矛盾な態度、意見の不一致を原則的論争の保証と行動の統一で解決すること等、単一の革命的労働者党創設を積極的に推進するため、いくつかの諸問題に解決できる道をしめさねばならない。

わが同盟がめざす単一党建設の道、とりわけ、統合の道は平胆ではない。われわれは、種々の偏向にたいして厳しい批判を展開する。しかし、他党派・他グループによるわれわれへの厳しい批判を歓迎し、誤りや不充分さがあれば卒直に改める。

こうした原則と路線をめぐる論争と相互批判を、われわれは口先だけのものとしないで、これを実践に、すなわち労働運動に固く結びつけた共同の闘いの中につらぬくことを要求する。



こうした理論と実践の両面での一致こそ、党建設のカナメであり、この中でわれわれは、革命の思想・政治のうえでの確固とした統合をはかることをめざすものである。

今日、革命的激動にむかう八十年代初頭の情勢は、社共をはじめ旧来の既成の左翼はいうにおよばず、新左翼を含む左翼総体を問わず、ふるいにかけ、内部分裂・対立・互解と流動・再編を余儀なくしている。労働者階級人民の危機感と闘いの発展は、好むと好まざるとにかかわらず、全国的な党、広大な統一戦線の問題を避けては何ひとつ解決しえないところに逢着している。

労働者階級は、大衆の先頭で闘い、革命の水路を開き、革命を勝利に導く新しい党を熱望している。

共産主義者は、この情勢に応え、八十年代階級闘争の最初の会戦に間にあうように、単一の革命的労働者党を創りださねばならない。

「闘争に成功するには、明白な目標と方法がなければならない。民衆の憤怒だけに頼る非組織闘争は結局一時的なものにならざるをえない……民衆の支持基盤を獲得し、獲得された大衆に高い政治意識を与えることが蜂起を成功に導く第一歩である」（光州白書）

かかる指導と役割を果しうるものは、労働者階級に深く依拠した、工場細胞を基礎とする革命党だけである。

われわれは、日帝打倒・米帝一掃・プロ独樹立の社会主義革命を、数十万、数百万の全人民的武装蜂起をもって実現することで、朝鮮南半部人民をはじめ全世界の兄弟・姉妹たちと国際主義的連帯をはたそうとしている。

われわれは、われわれの革命が血の海に沈んだ時に、この光州蜂起の教訓を想いだすであろうか、否！否！否！である。

労働者階級の解放のため、蜂起を指令し、組織し、革命を勝利に導く革命党の準備を急ごう！

われわれは、このために全国の誠実な共産主義者と心の底から団結を願う。

われわれは、大胆に潮流をこえてすすみ出すであろう。

第三部　情勢の基本認識と同盟の当面する任務

I　疾風怒濤の国際情勢

今日の時代は、帝国主義と世界プロレタリア共産主義革命の時代である。

現在、情勢は、一方では、被抑圧民族の解放闘争、プロレタリアートの革命闘争が全世界で力強く前進し、他方では、米帝を中心とした西側帝国主義とソ連社会帝国主義との世界支配をめぐる抗争が激しくなり、帝国主義世界大戦の危険がつよまっている。

こうして、情勢の基本は、戦後の相対的安定期がおわり、史上三度目の「戦争と革命の時代」のはじまりと特徴づけることができる。

この時代にあって、われわれは、プロレタリア階級の世界軍の一部隊として、社会主義国、被抑圧民族としっかり結びつき、戦争に備え、わが国の革命闘争を前進させ、戦争を革命によってうちやぶるべく闘うことである。

この時代、あらゆる不意うちにもゆるがず、革命の爆発にも遅れることのない備えをもった革命党の早急なる建設こそ、情勢が要請する最大のものである。

今、われわれは、情勢に応えて共産主義者同盟を戦取した、われわれは、この時代が思いもかけない速さで、かつ全世界的規模ですすんでいることを自覚せねばならない。そうであればこそ、われわれは、この戦取した同盟を綱領・戦術・組織をつらぬくプロ独をかなめとするマルクス・レーニン主義で武装された確固とした組織としてうち固め、日本革命を勝利に導く全国単一の社共にかわる革命的労働者党の中核隊へ、自らを育てあげることをめざす。

同盟は、当面、わが国のブルジョア独裁国家を打倒し、米帝をわが国から一掃し、プロレタリア独裁を樹立することを日本プロレタリアート人民の中心的任務であると訴え、全力をあげて闘う。

また、同盟は、この任務を達成するため、情勢の特徴からして、全人民的武装蜂起をめざす敵の要塞にたいする正規軍を組織することを、当面する戦術の基本とする。

われわれは、八十年代初頭情勢の急展開する現局面の特徴を簡潔に分析して、これら中心任務と基本戦術の種々の構成部分、力点について、われわれの基本指針を定める。

（1）　全世界を覆う革命の波

八十年初頭以降、情勢の現局面は、世界資本主義の恐慌——不況の長期化と未曾有の危機を基礎に、米ソを両軸とする第三次帝国主義世界大戦の危険性と、世界革命の現実性の深まりをつげていることをはっきりとしめした。

第一次世界大戦後、とりわけ三十年代後半以降今日まで、世界プロレタリア共産主義革命の最大の推進翼であった民族解放闘争は、今なお、全世界的規模で前進している。

イラン革命、ニカラグア革命にはじまり、中南米、アフリカ、中東で闘いは噴出、発展した。アジアでは朝鮮南半部の光州蜂起をはじめ、フイリッピン、タイ等、解放闘争は発展している。

また、民族解放闘争の発展は、西側帝国主義足下にとどまらず、七十年代以降、アフリカ、東南アジア、中東へのソ連社会帝国主義の侵攻と支配・圧迫に抗して、民主カンボジア、アフガニスタン、ソマリア、南イエメン等での解放闘争がつよまっている。

こうして、世界のあらゆる被圧迫従属諸国で、被抑圧民族、プロレタリアート人民の憤怒は爆発寸前であり、これらの反帝国主義、反植民地主義、反支配主義の気運は高まっている。

とりわけ、米日帝のアジアにおける民族解放とプロレタリア革命の防波堤であり、新植民地支配の典型である朝鮮南半部の激動する情勢を重視せねばならない。光州蜂起は、朝鮮南半部の革命情勢の前夜をしめし、朝鮮南半部の人民の反米反日反独裁、南北自主的平和統一の闘いの新局面をしめした。

今日、全斗煥は、米日韓反革命軍事同盟の強化と米日帝のテコ入れ・後盾によって、革命を圧殺し、危機をのりきらんとしている。しかし、朝鮮南半部人民が再び武器をとり、全斗煥の背後の敵・米日帝の一掃にむけて進撃し、これがアジア諸国の民族解放闘争と連動することは不可避である。

帝国主義国階級闘争の高揚

帝国主義諸国の経済的、政治的危機の深まりの中で、帝国主義本国におけるプロレタリアートの階級闘争の新しい高揚がはじまっている。

英、伊、米などでの労働者のストの長期化、英でのアジア、黒人失業者の都市暴動、米、西独、仏での反原発、反核、反戦闘争の戦後史上最大の規模の闘いの爆発。これら一連の事態は、仏のミッテラン社民政権をおしあげたような労働者階級人民の新たな変革の熱望をしめし、その爆発の可能性をしめしている。

他方、ソ連社会帝国主義足下でのプロレタリア階級人民の闘いもまた大きな発展をとげている。ポーランド労働者階級は、ソ社帝とその召使いであるポーランド国家官僚ブルジョアジーと対じし、全世界に、ソ社帝の帝国主義的本質を暴露した。この闘いは、ルーマニア等々からソ連国内にいたる広範な労働者の反抗を生みだし、これと結びつき、ソ連・東欧諸国の新たなプロレタリア社会主義革命の胎動と爆発の可能性をしめしている。

しかし、世界プロレタリア共産主義革命の発展途上では、革命の反動への、前進の後退への、解放の抑圧への一時的反転もさけられない。そうした事態は、七十年代末、ベトナムのカンボジアへの侵略と併合であり、これは、ベトナム共産党の変質をしめすものであった。今日、中国共産党が継続革命を事実上なげすて、変質をはじめている。こうした事態は革命に一時的困難をもたらしているが、革命の歴史的発展をおしとどめることはできない。

こうして、国際プロレタリア階級の闘いは新たな胎動を開始し、被抑圧民族の解放闘争と結びつくことはさけられない。

(2) 高まる世界大戦の危険

帝国主義、社会帝国主義による他民族抑圧、新植民地支配がこの間強化され、世界支配をめぐる争奪戦がこれまでになく激化している。

ソ連社会帝国主義は、七十年代前半から、米帝の後退につけ入りながら、後発の帝国主義として世界各地で、世界支配にむけた再分割大攻勢を激化させてきた。今日では、ヨーロッパはもとより、アフリカ、東南アジアへの侵攻、アフガンの軍事占領、さらに、米帝、西側帝国主義の軍事的、経済的命脈である中東・ペルシャ湾への包囲を固め、世界支配の戦略的優位をきづき、軍事増強、戦争準備に拍車をかけ、八十年代半ばには、ソ社帝の米帝にたいする軍事的優位を確立せんとしている。この間、ポーランド革命の胎動を機に、ワルシャワ条約機構軍の大軍事演習、アフガン侵略での東独、ベトナム、キューバ、南イエメン等の軍事的連携をつよめ、米帝との戦略、戦術核兵器開発など軍拡競争に力をそそぎ、欧州、極東——北方の軍事的強化など、とみにその危機をつよめている。

対ソ社帝世界大戦急ぐ米帝

米帝を中心とする西側帝国主義は、経済的破綻、民族解放とプロレタリア革命の爆発的発展、ソ社帝の市場再分割大攻勢の中で、もはや軍事力によってしか、世界支配の手づまりを打破し、自己の権益と延命をはかる以外に出口がなくなっている。

とりわけ、この間後退をよぎなくされてきた米帝は、レーガン政権を誕生させ、「強いアメリカ」「世界の憲兵」の復活を宣言してまき返しをつよめ、対ソ第三次世界大戦の即応準備に文字通り、死活をかけ、全世界で新たな戦争の危険をふりまいている。米帝の八十年代戦略は、すでに「カーター・ドクトリン」によってしめされている。それは、七十年代の米帝通常戦略1½戦略——「一つの大規模戦争と一つの地域紛争」に同時に対処しえる——の破綻と八十年代ソ社帝の軍事的優位を、米帝の指揮と統制のもとで、NATO、日米安保体制等を再編し、米日欧州列強帝による「対ソ合同防衛」で補完し、対ソ世界大戦の即応準備を急ぐ世界戦争戦略である。そしてまた、米帝は、日帝とともに中国に接近し、中国を対ソ軍事対決とアジアの民族解放闘争の圧殺の道具とし、かつ自らの広大な市場とするべくとりこみを強化してきた。レーガンは文字通り、この戦争政策を実施するため、巨大な軍事費念出の経済政策、日・欧州帝への軍事力強化と防衛分担増要求、さらに、中性子爆弾の製造再開と欧州配備計画の決定、最新戦略核の先制使用の対ソ「相殺的攻撃」をとり入れた新核戦略から「多発報復」戦略を採用して、世界大戦——核戦争の危険を一挙につよめている。

西側諸国も、こうしたレーガン政権の強硬なまき返しに、互いの矛盾と対立を深めつつも、ソ社帝との分割戦において、基本的には米帝の世界戦略に組みこまれ、また依存し、各々の権益の確保と延命をはからんと、総じて対ソ世界大戦の道を急いでいる。

以上、八十年代初頭の世界情勢の現局面は、世界的規模での戦争の危険が高まっていることをしめした。その策源地は、米・ソを頂点とする軍事ブロックにある。と同時に、情勢は、世界的規模での大革命の爆発の可能性の高まりをしめした。

帝国主義が存在する限り、戦争はさけられない。しかしながら、帝国主義、社会帝国主義の策動も、全世界のプロレタリア階級人民の反撃に直面して思うにまかせないでおり、それはそれで寄生性と腐朽をいっそうつよめ、諸矛盾を激化させ、帝国主義の没落を早めるものである。革命が戦争をおしとどめるにせよ、戦争が革命をひきおこすにせよ、プロレタリアートの勝利はさけられない。

II 国内情勢の特徴

わが国の情勢も激動する世界情勢の例外ではない。

わが国経済は、七三年石油ショックと世界恐慌の中で、他西側帝国主義に比べ、相対的つよさをしめしつつも、今また、米帝の不況を鋭く反映して、長期の過剰生産恐慌——不況にみまわれている。七三年過剰生産恐慌以降、日本帝国主義は、アジアを中心に、アフリカ、米、欧州、あるいは一部中国も含む世界市場への商品輸出、資本輸出に拍車をかけてきた。これはこれで、この間、朝鮮南半部の光州蜂起、イラン革命等民族解放闘争の反撃、イラン・イラク戦争等の打撃をうけ、他方、日米間、日EC間の経済戦争を激化させてきた。とりわけ、最近の中東情勢の激化は、石油の九九%を輸入するわが国のエネルギー資源構造のぜい弱さを直撃し、恐慌——不況にいっそうの追い打ちをかけることは必至である。また国内では、相つぐ冷害、政府の減反、農産物輸入政策にもよって農業生産の深刻な危機をおこしている。また、国家財政の破綻がいちじるしくすすみ、他方での軍事費の増大の必要にも迫られ、政府をして、大増税と大収奪に走らせている。

こうしたわが国の経済の低迷は、労働者階級人民の状態の相対的・絶対的悪化を導いてきた。それは、特に、完全失業者百数十万人の常態化、実質賃金の減少とその長期化、高物価の常態化等々、賃金、労働時間、労働環境等の生活・労働諸条件を耐えがたいまで悪化させている。

こうした中で、労働者、農民、被搾取勤労大衆の不満と反抗は増大し、

ブルジョア階級独裁のほころびが一定生みだされつつある。

(1) 帝国主義の戦争準備と政治反動

過剰資本を世界市場への進出で克服する道のゆきづまり、米帝の強硬な役割の増大——軍備増強要求、米・欧帝との経済的対立の激化、ソ社帝との東南アジア、北方における直接の利益と他民族支配をめぐる争奪、中東の石油資源確保のため、他方での朝鮮南半部、アジアでの民族解放闘争の嵐、国内階級闘争の激化に対応し、延命するためには、日本帝国主義は米帝の要請に応え、米帝の世界戦略とその指揮のもとで、対ソ世界大戦——朝鮮侵略戦争の準備に拍車をかけざるをえないのである。とくに、朝鮮南半部は米帝以上の日帝の生命線である。光州蜂起に爆発した朝鮮南半部の労働者階級人民の革命の炎は、日本帝国主義を焼きつくす炎である。だから日帝は、米帝の指揮棒で動くとはいえ、米帝にかわって、朝鮮侵略反革命戦争の主力としての役割をにない、アジア全域を支配するため、八十年代の早い時期に戦争準備を完成することは、かれらの死活問題である。

日本金融独占ブルジョアジーの政治代理人、鈴木政権の国内における全社会的規模での戦争準備、政治反動の大攻勢こそ、このあらわれに他ならない。

それは、次の諸点を環にしている。

第一に、日米安保体制の再編・強化、対ソ世界大戦——朝鮮侵略戦争のための臨戦体制の完成である。すなわち、八十年代日米安保体制とは、米帝の指揮のもとで、米世界戦略のほころびを補い、とくに朝鮮半島に照準を合わせ、ここで主力をにない、かつ、アジア、中東全域を包みこんで帝国主義戦争をになう日帝の戦争即応体制の完成をたくらむものに他ならない。ここでは、沖縄基地をかなめに、米帝急速展開部隊と結んで中東をにらみ、他方で朝鮮半島への沖縄米軍、自衛隊の出兵が準備され、かつ、北東アジア、西太平洋周返での対ソ局地戦をすでに既定方針としている。これは「81防衛白書」の「専守防衛戦略」から「前方防衛戦略」への日帝軍事戦略の転換がすでに、実態化しつつあることをしめしている。

こうした米戦略と結ぶ日帝軍事戦略にもとずく軍事上の完成は、①「中期業務見積もり」の早期達成と自衛隊増強、②八二年中央指揮所の完成とハワイ米太平洋司令部との一体化、③日米韓軍事同盟の一体的強化、有事立法制定、憲法改「正」等を中心としている。これらは、防衛予算の大増強、日米共同演習の強化、自国防衛産業の育成、米兵器の大量購入、核兵器導入、核武装策動、成田侵略空港の完成等々と、もはや枚挙にいとまがない。

第二に、政治反動と抑圧の強化——高まる革命の嵐を封じ、ブルジョア階級独裁の防衛である。それは、刑法改悪—保安処分新設、徴兵制策動、小選挙区制、政党法の導入、労働争議への弾圧強化、靖国神社の国家護持等をはじめ、在日朝鮮人や国内少数民族、女性、部落大衆、「障害者」への差別、抑圧、分断政策などに集中的にあらわれている。これらは、「北方領土の日」新設による反ソ排外主義や天皇制イデオロギー、差別意識などの鼓吹と結びつけて攻撃が強められている。

第三には、賃金抑制、首切り大合理化、大増税、大衆収奪、福祉のきりすてを促進して、国家財政の破綻をつくろい、戦争のための軍事費を念出し、金融資本を肥やすことである。今日の大規模な「行革」攻撃はこのあらわれであり、かつそれにとどまらず、戦争遂行の国家体制を確立するための一環に他ならない。

右翼労戦統一—産報化

第四に、これら帝国主義戦争の臨戦体制の完成を急ぐ一方で、当然この過程で爆発する可能性のある革命闘争の予防、弾圧のみならず、これを議会制民主主義の枠内に包摂し、解体し、戦争へ動員するための階級政策を急ピッチですすめている。これこそ、労働貴族層をつかった、各種連合政権構想であり、このブルジョア政治と結びついてすすんでいる労戦の右翼的統一——産報化攻撃である。各種連合政権構想は、自民の大勝——「安

定」多数政権の確立でひとまず後退しており、今日、労戦の右翼的再編が前面におしだされている。現下の労戦の右翼的再編攻撃は、すでに「統一推進会」が組織され、八一年十二月統一準備会発足、八三年民間統一、八五年全的統一の方向が確定され、急ピッチに強行されんとしている。とりわけ、攻撃は、総評—官公労解体、民間に照準があてられている。

(2) 社共の敗走と階級闘争の発展

こうした中で、民社党の国連軍への自衛隊派遣の提唱や、光州蜂起弾圧支持等、戦争と政治反動への全面支持はいうまでもなく、社公も安保、自衛隊、原発是認等、帝国主義への屈服と反動化をきわめている。他方、プロ独をなげすて、自由と民主主義の旗をかかげて、労働者階級に敵対してきた日共も、社会党と決別し、一定の「左」のポーズをとっているが、小ブル平和・中立、独占資本の規制と改良で、ブルジョア独裁とブルジョア民主主義を左から補完している。しかし、情勢の急展開の中で、社共は、内部対立と低迷をよぎなくされ、とりわけ社会党は崩壊のふちにたっている。

八十年代初頭以降、国際的な民族解放闘争とプロレタリア革命の発展にもうながされ、日本労働者階級人民の闘争——八十年代階級闘争の輝かしい端緒がきり開かれた。

それは、第一には、日本労働者階級人民の帝国主義戦争に反対し、八十年代日米安保体制打破を求める反戦・反安保闘争が徐々にではあれ、拡がりと深まりをしめしている。これらの闘争は、昨年光州蜂起を烽火に、朝鮮人民の反米反日反独裁、南北自主的平和統一支持の全国的な高まりの中から形成された。今日では、反原発、反核、三里塚闘争等々がこれらと結びついて、大規模な発展をしめしはじめていることである。

第二には、労働者階級の労戦の右翼的統一にたいする反撃が高まっている。特に、労戦の右翼的統一反対は、先進的労働者の次々の決起の中で、労働貴族の動揺、亀裂、一部のきりくずしを生みだして、闘う労働組合の全国結集の準備をもつくりだしている。また、「行政改革」反対等々の闘いと結びついて、反原発、反安保等々、労働者の政治闘争の主体としての登場が、広範に拡大している。

第三には、農民、漁民、学生、国内少数民族、部落大衆、「障害者」、女性等々の反抗と闘争もまたつよまっている。これまで、三里塚闘争を管制高地として、労働者と農民、被搾取勤労大衆の結合が深まっていたが、今日では、日韓連帯のみならず、狭山、赤堀、反原発、刑法—保安処分攻撃との闘い等々、大規模な結びつきとそこにしめる労働者階級の主導勢力としての役割の増大をしめしている。

こうした階級闘争の発展とともに、日本労働者階級人民は、労働貴族ども、社共をはじめ現代修正主義、日和見主義、改良主義への幻想をなげすて、これらかちの大規模な離反を開始しはじめている。と同時に、新たな革命党、統一戦線建設の要求が高まっている。

これらの事情は、帝国主義の危機の深まる中で、社会主義革命の主体的条件を整えるという条件が、いま、大きく開かれているといえる。

III 当面する同盟の任務

(1) 革命の中心的政治任務

労働者階級の歴史的任務は、資本家への経済的隷従、すなわち賃金奴隷の状態から自己を解放し、社会の諸階級への分裂をなくすことにある。そのためには、プロレタリアートは既存の国家権力を打倒し、自らの国家権力をうちたてねばならない。この革命は、ブルジョア国家が、ブルジョアジーの階級独裁を維持する道具であり、労働者階級はこれをそのまま利用

できないことから、必然的に暴力革命とならざるをえない。
　わが同盟は、プロレタリアートの社会革命と国家についてのマルクス主義の根本思想をうむことなく確認し、宣伝し、これをなげすてている日共現代修正主義党を仮借なく暴露し、これと闘う。同時に、こうしたマルクス主義の根本思想にたって、これを日本社会の現実に正しく適用し、日本革命の当面する政治総路線を正しく導き、深めることは、いぜん第一級の課題である。
　当面する日本革命の政治総路線を導くにあたって、わが国の今日の社会的発展段階、国家権力をめぐる階級、政治勢力総体の相互関係の分析とその骨格を、われわれは、綱領第四章、㉘項から㉚項にしめし、かつこれにもとづいて、現状の動態を、情勢の基本認識によって深めてきた。
　こうした分析にたって、政治総路線を導くにあたって、第一に重要な問題は次のことである。すなわち革命の根本問題は国家権力の問題であり、だれが国家権力をにぎっているのか、当面、打倒すべき対象は何かを明らかにすることである。今日、わが国におけるプロレタリアート人民の打倒対象は、疑いなく日本帝国主義国家であり、これを掌握する金融独占ブルジョアジーである。同時に、わが国の国家と金融資本が一定直接、統制・支配されている米帝である。この米帝にたいする闘いは主に、わが国に基地をかまえ、軍事展開している米軍と闘い、これを一掃する闘いとならざるをえない。
　第二に重要な問題は、日本革命の原動力と革命の性質についてである。すなわち、結論的にいえば、日本革命の指導階級はプロレタリア階級であり、その主力軍もまたプロレタリア階級である。またプロレタリア階級は、当面する革命において、金融独占資本とブルジョア国家と革命的に闘うことによって、貧農と同盟し、その他の被搾取勤労大衆をひきいてすすみ、たんに日本革命の主力軍のみならず、革命の先導者の役割をはたさなければならない。
　これらの事情は、当面する革命の性格をも規定する。すなわち、当面する革命の性格は社会主義革命であり、樹立される権力の性格は、プロレタリア階級独裁の権力である。
　こうしたすべてのことからして、わが国におけるプロレタリアート人民の当面する中心的政治的任務が、ブルジョア独裁国家を打倒し、米帝を一掃し、プロレタリア階級独裁の樹立にあることをしめしている。これが、わが同盟の当面する日本社会主義革命の政治総路線のカナメである。
　この政治総路線をわれわれがかかげるにあたって、革命路線をめぐる誤った傾向との闘争は不可避である。
　その誤りの第一歩は、日本共産党に代表される修正主義潮流である。この傾向は、日本帝国主義の復活を認めず、美化し、米帝従属論にもとづき、革命の主要な対象をそらせ、プロ独の放棄にもよって、革命の方向をねじまげている。口先の社会主義、実際の反米愛国主義である。
　その誤りの第二は、構改派、一部のブンド系をはじめとする新左翼の日帝自立論にもとづく日帝打倒一元路線である。これは、米帝問題をわが国における国家権力の問題とみず、これを無視し、米帝にたいする闘いを過小評価する。これは、経済主義、急進主義と不断に結びつき、革命闘争をほりくずすものである。
　誤りの第三は、中国派を中心とする新手の日和見主義潮流である。これらは、ソ社帝が千島列島（「北方領土」）を占領している事情等をあげて、ソ連社会帝国主義を主敵とするか、米帝・日帝に加えて、ソ社帝を日本プロレタリアート人民の当面の「打倒対象」とする。この誤りは、革命の根本問題を無視し、米帝と結託した日帝と争奪しているソ社帝との基本関係が、帝国主義間の矛盾であることを正しくつかまず、実際には反ソ愛国主義となっている。

(2) 当面する主な闘争任務

　日帝を打倒し、米帝を一掃し、プロレタリア独裁を樹立する中心的政治任務を実現するために、また、八十年代半ばにいたる過程で、二大階級の一

大会戦の緒戦が不可避であるという情勢の現局面をふまえて、われわれは次の闘争課題を重視し、中心的政治任務と結びつけて闘わねばならない。
　第一に重要な闘争課題は、米・日帝とソ社帝との間の争奪、新植民地支配、軍事力強化の本質を暴露し、帝国主義戦争に反対して断固闘うことである。
　今日、米帝の指揮のもとで日帝がすすめている帝国主義戦争は、販売市場、資本の投下地域、原料、安価な労働力の獲保、被抑圧国における支配、民族解放闘争の鎮圧のためであり、同時に、帝国主義の危機から労働者階級人民の目をそらせ、革命闘争を圧殺するためであり、三重の奴隷制を維持、強化するために他ならない。もし、戦争がぼっ発したなら、われわれは、民族革命戦争、社会主義祖国防衛戦争を断固支持し、自国帝国主義と米帝にたいし、敗北主義的態度をつらぬき、帝国主義戦争を内乱へ転化しなければならない。今日の戦争準備にたいして、「戦争の惨禍をまぬがれるただ一つの道は、社会主義のための革命的闘争である」（レーニン）を堅持し、帝国主義戦争に反対し、戦争を革命でうちくだくための革命的大衆闘争の準備を急がねばならない。具体的には、八十年代日米安保体制打破の闘いをこの反戦闘争と結合させ、これを環に、あらゆる闘いの水路から、労働者を中心とする幅の広い革命的大衆闘争と「全国的大衆闘争機関の創設」をめざして闘う。
　第二に重要な闘争課題は、全世界の被抑圧民族の解放闘争を支持し、社会主義国をはじめ国際プロレタリアートの革命闘争と結びつき、日米帝国主義の他民族抑圧と新植民地支配と徹底して闘うことである。われわれは、とりわけ、朝鮮情勢を重視し、朝鮮人民の不屈の反米反日反独裁、南北自主的平和統一、社会主義の闘争を断固支持し、自らの根深い排外主義と闘い、日朝プロレタリアート人民の国際主義的団結を前進させることは急務である。
　また、われわれは、ソ連社会帝国主義のアフガン侵略、ベトナムのカンボジア併合の尻おし等を糾弾し、これら解放闘争を支持する。同時に、ポーランド労働者階級人民のソ連社帝、ポーランド国家官僚ブルジョアジーとの闘い、新たプロレタリア革命の胎動を断固支持して闘う。
　第三に重要な闘争課題は、戦争準備と結びついて全国家的規模でふき荒れている一連の政治反動攻勢に対決し、全人民的政治闘争、諸民主主義闘争を発展させることである。
　われわれは、日米安保の再編・強化、憲法改「正」有事立法制定等の策動にたいする闘い、三里塚侵略空港粉砕――二期工事阻止、狭山、赤堀など部落差別、「障害者」差別、女性差別の強化、刑法改「正」――保安処分攻撃等にたいする闘い、反原発、反核、反基地等の闘いを結びつけて、日帝打倒・米帝一掃の革命闘争の発展をうながして闘う。
　第四に重要な課題は、増大する失業、つよまる搾取と収奪、「行政改革」など大規模な合理化攻撃等々、労働者階級の生活、労働諸条件の悪化の中で、労働者の不満、反抗がつよまっており、われわれは、これらの闘いを断固として支持し、思いきって闘い、労戦の右翼的統一、諸政治反動攻勢との闘いと結びつけて闘うことである。
　情勢からして、われわれはこの闘いを軽視せず、この闘いにおいて労働者階級の解放の力を高めることに、特に力をそそがねばならない。
　第五に重要な闘争課題は、今日、急速にすすんでいる労働戦線の右翼的再編――「産業報国会」化に反対し、これを阻止するため断固闘うことである。労戦の右翼的統一は、日帝の戦争準備のための階級政策であり、日本労働者階級を「自」国のブルジョアジーに従属させ、他民族抑圧のため、市場分割戦のために、帝国主義と同盟することを意味している。このことを暴露して、帝国主義の尖兵となってこれをおしすすめる労働貴族どもと闘わねばならない。と同時に、われわれはこの闘いを反対一般にとどめず、社会主義にむけた労働者階級の階級的統一をめざして、『労働情報』等に結集する先進的労働者の志向を支持して、全国的レベルでの労働組合を基礎とした全国労組連合の実現、発展のために闘う。
　以上、わが同盟は、これら重要闘争課題の闘いのすべてを、ブルジョア独裁権力打倒、米帝一掃、プロ独樹立の中心的、政治的任務と固く結びつけて闘う。そのさい、われわれは、資本と国家による愛国主義、排外主

義、差別思想等の反動思想の鼓吹と闘い、これにたいする社共の追従、とりわけ、改良主義、ブルジョア議会主義の美化と闘う。他方で、この闘争の中で、一部革命的左翼の社会愛国主義、小ブル急進主義とも一線を画して闘う。

同盟は、当面、労働運動を主戦場に、労働者階級のプロレタリア的下層に依拠し、社共等の影響からかれらをひきはなし、その爆発的闘争の力を組織して、圧倒的多数を革命の側へ獲得しなければならない。これらすべての局面を通じて、同盟は、労働者階級の本格的な政治的進出を拡大、深め、全人民的政治闘争の主導部隊へと高め、全人民的武装蜂起をめざす、数十万、数百万の攻囲軍の革命的大衆行動の準備に全力をあげて闘う。

(3) 党建設の基本方向と重心

今日、わが国において、社会主義革命の物質的条件は成熟している。にもかかわらず、革命を勝利に導く主体的条件はいまだ欠けている。これが日本革命運動の致命的欠陥である。わが同盟は、〝革命の主体的条件を全力で準備せよ！〟を全党の合言葉として、この第一級の任務を遂行せねばならない。それは、全国単一の社共にかわる革命的労働者党を創建し、この党をテコに、広大な社会主義統一戦線を建設することである。

(1) 単一の革命的労働者党の創建にむけ、共産主義者の統合を推進せよ。（この項、二章、ブンド総括と単一党創建に準ずるので、略する。）

(2) 統合をうち固め、自力で局面を開く先鋒隊に同盟を高めよ。

同盟の戦取は、八十年代階級闘争の領導者となり、全国単一の党建設の先鋒隊となる、われわれ自らの決意の物質化に他ならない。しかし、われわれはささやかであり、大海の一滴にすぎない。革命の大道にむかうその出発点にたった同盟は、大言壮語をはかず、いっそう謙虚に、かつこの情勢を開く闘いにおいて勇猛、果敢な党風をうちたて、自らを不断に階級闘争の中で改造し、うちきたえて、確固とした党へ育てあげねばならない。

そのため、当面、次の目標をかかげる。

① 綱領、路線をさらに深め、階級闘争に応えるわが同盟の政策の具体化に力をそそぐ。

② 闘いの中で、労働者大衆をはじめ被搾取勤労大衆との結びつきをつよめ、ここに地盤をきづき、大衆から信頼される組織となる。

③ 同盟建設の四つの柱を推進しする。

1、全国政治新聞『赫旗』の月二回刊を堅持し、宣伝、煽動、組織化の武器として強化する。

2、同盟理論誌の定期発刊を戦取し、単一党へむけた路線闘争の武器とする。

3、主要な地方の主要な工場、職場、あるいは地域に工場細胞を建設し、革命の砦とする。

4、青年同盟、学生同盟、あるいは、女性解放組織の建設に着手する。

④ 党員、とりわけ、工場労働者党員の政治理論、実践上の力を向上させ、プロレタリア幹部を養成する。

⑤ 情勢に応え、備えある、非合法下でも活動しえる組織の強化をおこなう。

⑥ 全党指導のカナメたる中央指導部の強化と各地方の指導能力の全面的強化をはかる。

(3) 工場、職場、地域を革命の砦とせよ。

わが同盟は、党建設の基礎を細胞建設におき、とりわけ、工場細胞の建設を重視する。工場細胞を建設して、工場、職場、地域を革命の砦にかえる活動こそ、プロレタリア独裁のため、全人民的武装蜂起をめざす重要な、欠くことのできない準備活動である。わが同盟の正規軍の組織化の環は、全国の津々浦々の工場に革命党の細胞を建設することによって、社共から、圧倒的多数の労働者をひきはなし、ひきよせて、産業予備軍の闘争と組織化と結びつけ、工場を革命の要塞にかえることである。と同時に、この砦を、農民の闘いの砦、あらゆる被搾取勤労大衆の闘争拠点と結合し、

巨大な単一の革命闘争の戦列を整えるものである。それゆえ、同盟は、主要な工場、職場を革命の砦とするため、特別の注意をはらい、力をここへそそぐことをうながし、いくつかの組織政策に留意する。（以下略、「労働運動のテーゼ」発表にゆだねる。）。

(4) 広大な社会主義統一戦線を建設せよ。

ブルジョア独裁権力を打倒し、米帝を一掃し、プロ独を樹立するためには、まず労働者の圧倒的多数を革命の側へひきよせねばならない。しかし、いまだ、それだけでは十分ではない。革命の勝利のためには、プロレタリアートを指導階級として、貧農と同盟し、都市、農村の被搾取勤労大衆、小ブルジョアをひきつけて、広大な社会主義統一戦線の建設が不可避である。今日、この条件が広々と形成されつつある。同盟は、この統一戦線形成めざして、現在の情勢の特徴を考慮し、労働者大衆の要求に応え、新たなる政治局面を攻勢的に導くため、さまざまな迂回戦術をも拒否するものではない。

同盟の統一戦線政策の基礎となる諸点を定める。

① 現に存在する党派間共闘に関して、次の政治基準が合致すれば、共闘し、この再編めざして闘う。帝国主義戦争にたいする態度、被抑圧民族との団結、帝国主義、社会排外主義との一線、日米安保にたいする態度、日本革命の主要な敵、右翼的労戦統一にたいする態度、労働運動を主戦場にプロレタリアートを中心として闘うことでの一致。こうした統一戦線形成の中で、わが同盟は「全国的大衆共闘機関」の創設を具体化して、この実現にむかって闘う。

② 種々の課題別共闘に関して、わが同盟は前記の規準にこだわらず、課題ごとに規準を定め、より広く、より大衆的に闘う。（以下略）

③ セクト主義、サークル主義を克服せよ！

同盟は、統一戦線政策の推進にあたって、自らの歴史的任務からして、大衆闘争に責任をもち、これを領導する意識性のゆえに、以下の諸点に留意して闘う。

1、セクト主義、サークル主義の克服。

2、同盟の宣伝、煽動の大衆化。

3、党派、路線闘争の原則的展開・強化。

同志諸君！　以上すべてを確認し、小さな誤り、試行錯誤を恐れることなく、大胆に闘い、大胆に組織し、日本革命を勝利に導きうる単一党をかならずや創建しよう。

当面する闘争と党建設

八十年代中期にむかう情勢の特徴と
わが同盟のさしせまる任務

情勢に応え統一協議会をつくろう

八十年代情勢の特徴と
わが同盟のさしせまる任務

共産主義者同盟中央委員会

一、迫りくる戦争と革命の時代と先進国中枢おおう労働者階級の闘いのあらたな波
(1) 全世界的な革命の波
(2) 国際帝国主義の危機
(3) ソ社帝の腐朽化の深まり
(4) 米ソの第三次世界大戦の危険性の増大と国際プロレタリアートの闘いの前進
二、八十年代半ばへむかうわが国の情勢の特徴
(1) 日帝の危機に結びついた戦争準備と政治反動
(2) 八三年決戦の政治性格
(3) 五五年体制の崩壊と政党再編（略）
(4) 階級闘争の歴史的転換の開始
三、わが同盟の任務
(1) 戦争に備え革命を根本的に準備しよう
(2) 三つの環の闘争戦術
(3) 情勢きり拓く党建設を
(4) 八二年を歴史的飛躍の年に

はじめに

「八十年代初頭の世界情勢の現局面は、世界的規模での戦争の危険が高まっていることをしめした。その策源地は米・ソを頂点とする軍事ブロックにある。と同時に、情勢は世界的規模での大革命の高まりをしめした。帝国主義が存在する限り、戦争はさけられない。しかしながら、帝国主義・社会帝国主義の策動も全世界のプロレタリア階級人民の反撃に直面して思うにまかせないでおり、それはそれで寄生性と腐朽をいっそうつよめ、諸矛盾を激化させ、帝国主義の没落を早めるものである」（同盟統合報告・「情勢と任務」）

今日の情勢の諸特徴は、この分析の正しさを日を追って示し、いっそう米ソを両軸とする第三次帝国主義世界大戦の危険性と世界革命の現実性の深まりを告げている。

八一年から八二年への諸特徴は、八十年代初頭から中期への情勢の推移が、これまでの質と深さ、拡がりを大きく越えるところに至りつつあることを示している。

われわれは、この点を鋭く見据えておかねばならない、その具体的様相

は分析のごとくであるが、総括的にいうならばこうである。
第一に世界資本主義の恐慌―不況の長期化と未曽有の危機が、帝国主義の様々な諸政策の転換のび縫策の破産に示されるごとく、もはやどのような方法によっても解決しえない死の苦悶に至りつつあること。これを基礎に米ソの世界支配の手詰まり、相対的後退、NATO・ワルシャワ機構軍の動揺・分解すらあらわれ、帝国主義はますます戦争へその延命を求めつつ、その困難性との相克のなかで、いっそうの兇暴さと危険を増している。
第二に、光州蜂起に象徴された八十年代初頭の、全世界的規模でのひきつづく民族解放闘争の発展とあわせて、ヨーロッパ・米国など先進帝国主義本国における戦後最大の反戦・反核闘争の大高揚、およびポーランドにおけるプロレタリア革命の前進と東欧・ソ連圏への波及等々、いま、はっきりと世界資本主義の危機が、その外延部から中枢部に火がつきはじめたということである。
すなわち、わが同盟がいみじくも指摘してきたように、今日の世界資本主義の根本的破産と未曽有の危機は、より高度の型の社会経済への移行にとってかえる――世界プロレタリア共産主義革命によってしか解決しえないところに逢着しているのであって、その主体たる国際プロレタリアートが、戦後史上最大の規模で登場し始め、世界プロレタリア共産主義革命の現実性を大きく成熟させつつあることである。
文字通り、この国際プロレタリアートの階級闘争の成否こそが、第三次帝国主義世界大戦か、世界プロレタリア共産主義革命かをめぐる、戦争と革命の八十年代において、その初頭から中期への移行のドラスティックな鍵を握るものになってきたことである。ここにこそ、世界史的意味で、八二～八三年の階級闘争が、八三～八五年にかけてもつ歴史的位置があるといわねばならない。
それ故にこそ、われわれは、国際プロレタリアートの一部隊として、日本プロレタリアートがその国際主義的責務を首尾よく果すために、こうした世界情勢と歴史的時代に規定されてすすむわが国の情勢の、八十年代初頭から中期への結節環をおさえてすすむ以外に、革命運動を発展させることはできない。
こうした見地から、わが国の情勢をみれば――日帝は米帝の世界戦略の下で、対ソ社帝第三次世界大戦の準備の総仕上げを急ぐとともに、その照準を今、朝鮮侵略反革命戦争におき、これを要としたアジア全域の支配のため、戦争遂行体制の完成を急いでいる。日本金融独占ブルジョアジーの政治的代理人・鈴木第二次政権の確立と全国家・社会的規模での戦争準備と反動攻勢こそ、このあらわれである。
今日、八二年の新年にあたって、わが同盟がより一歩深化し、鋭くつかまねばならないのは、日帝の戦争準備と反動攻勢のテンポが、先の世界情勢に規定されて、どのようにすすみつつあり、その一つ一つの節目がどの時期に何をめぐって存在するのか、次の大きな局面をみすえて、八二年以降、われわれはどのように闘わねばならないのか、その環を確認し、握りしめることである。
戦争と革命の時代にあって、われわれは、国際プロレタリアートの一部隊として、全世界のプロレタリアート・被抑圧民族と団結し、戦争に備え、日帝打倒・米帝一掃・プロ独樹立のわが国の社会主義革命を前進させ、戦争を革命でうちやぶるべく闘わねばならない。
この革命の戦略・展望の下で、八十年代初頭から中期へ向う情勢移行の彼我の攻防の環を握りしめ、革命の準備のための、移行の鍵となる階級闘争の戦術を具体化、力あるものとすることに全力を注がねばならない。
このことによって、わが同盟の同志達が、どのような部署にいようとも、その部分性にかかわらず、綱領の下での団結を基礎に、自らの活動の全体性をつかみ、「計画としての戦術」を実行できるであろう。
第二回中央委員会総会は、かかる局面を重視して、統合大会の掲げた諸任務を達成するため、統合の全成果をしっかりと打ち固め、わが同盟のさしせまる政治・組織的課題の重心と当面する進撃方向を決議した。
わが同盟は、七十年代の一時代をかけて、ブンドの破産を総括し、新左翼をも止揚して、戦闘的マルクス・レーニン主義の復権と綱領を掲げて、

社共に代る革命的労働者党を創建し、ささやかではあるが確固として進んできた同盟である。
今こそ、われわれの全ての真価が問い直されると同時に、その力を発揮しえる大いなる時代が開けつつある。われわれは、この同盟創建に誇りと自信をもち、大胆不敵に、かつ謙虚に、八二～八三年を日本共産主義運動の歴史的転換の試金石とし、この革命の大道を進撃しよう。八十年代は、われわれの時代である。

一、迫りくる戦争と革命の時代と先進国中枢をおおう労働者階級の闘いのあらたな波

(1) 全世界的な革命の波

今日の国際情勢の重要な特徴は、まず次のことである。
帝国主義、社会帝国主義のもとで抑圧され、支配されてきた労働者階級人民の闘いが、七十年代になって強まってきた米ソの世界的支配・権益をめざす争奪戦の激化―戦争の危険性の増大に対決して、広範に形成され、世界革命の主力軍として成熟をつくりだしつつあることである。
それは、ひき続く全世界的規模での民族解放闘争の前進と、先進帝国主義中枢部における階級闘争の爆発の開始へと燃えうつり、その両者の結合の可能性の深まりである。
この間のイラン革命、ニカラグア革命の勝利をはじめとして、朝鮮南半部の光州蜂起、中東、アフリカ、中南米の全域で民族解放闘争が前進しており、世の共産主義運動の推進翼を形成してきた。それは、米帝・西欧帝の支配下にある被抑圧諸国だけではなく、ソ連社会帝国主義の足元でも、アフガニスタン、ソマリア、南イエメン等でも、前進している。
他方で、ポーランドの労働者階級人民の闘いが、ソ連社会帝国主義の支配とそれに追随する国家官僚ブルジョアジーに対して、すすんでいる。こうしたポーランドの労働者階級人民の闘いに恐怖したソ社帝は、東欧圏全体に広がることを阻止せんとして、ヤルゼルスキーによる「救国軍事評議会」をもって血の弾圧を強行させたのである。だが「連帯」を軸とした闘いは、戒厳令を喰い破って着実にプロレタリア革命に向ってすすみつつある。
また、これまでの英・伊・米などでの労働者のストの長期化、黒人・失業者の都市暴動などに加えて、八一年、米帝レーガンの「欧州限定核戦争論」に対する、西独を中心とする欧州全域と米帝本国に、数十万単位の戦後史上空前、最大規模の反戦・反核の闘いが爆発した。こうした国際プロレタリアートの闘争は、仏のミッテラン政権、ギリシャのパパンドレウ政権、そしてベルギーと、社民政権登場の新たな変革の熱望をしめしている。かつ、これらの中心勢力が「六八年五月革命」を担い、今日、端的に「緑の党」に代表されるように、「既成の社会主義」を超えようとする主体として、登場しつつあることである。
このことは、その運動の自然発生的な性格及び指導路線的内実はともかくとして、八十年代、先進国中枢部におけるプロレタリアートの本格的胎動がその深部から、大規模に開始されたことをしめしている。と同時に、ヨーロッパにおけるポーランドのプロレタリア革命支持のデモにも象徴されるように、被抑圧・従属諸国と先進帝国主義国足下の反帝・反社帝の国際プロレタリアートの革命の波が、ますます大規模に拡大し、爆発する可能性をはっきりとしめしている。

(2) 国際帝国主義の危機

(一) 国際プロレタリアート、被抑圧民族の闘いの前進の中で、顕著と

なってきた情勢の特徴は、米ソ両超大国の世界支配の手づまり・相対的後退、その瓦解の深化である。

それは、八十年代に入って、ますます顕在化した帝国主義諸国の過剰生産恐慌と、とめどないインフレの昂進―スタグフレーションはこれら諸国がますます、解決しえない出口なき坂道を死の苦悶に向ってころがり落ちていることによっている。

いわゆる高度成長の神話は、相対的安定期の一時期のものであり、石油危機を契機としながら、ソ社帝の軍事的伸長と植民地・従属国の民族解放闘争の前進によって、更には帝国主義諸国相互の矛盾の拡大によって、終りをつげた。

瓦解する米帝の世界支配

その終えんは、まず帝国主義の弱い環―英帝であらわれたが、米帝も例外ではなかった。すなわち、ニクソンやカーターがとってきた経済政策は軍事産業―航空宇宙産業を中心として、巨額の軍事財政支出によって、高度成長を保持せんとするものであったが、長期化する不況ととどまることのないインフレによる失業者の増大によって、それぞれ短期間に姿を消したのである。これは、三十年代よりとり続けてきたニューディール政策の根本的破綻をしめしている。

こうして〝弱い環〟―英帝で、七九年からサッチャー政権がとり入れたように、レーガン政権がケインズ主義を投げすて、マネタリズムの政策に転換した。その特徴を一言でいえば、「経済への国家の過度の介入」批判と、古典的自由放任政策を基礎に、金融政策を重視し、政府支出の大幅な削減、特にいわゆる福祉国家の縮少＝行革・「小さな政府」であり、その本質は、相対的安定期のように「弱者救済」の福祉政策で階級対立を緩和することができず、これを切りすて、金融独占ブルジョアジーの集中といっそうの寡頭支配を促進し、彼らに奉仕するものに他ならない。

こうして打ち出されたものが、レーガンのバラ色の「経済再建計画」であった。しかしこれが色々な装いを持ちつつも、その基本は従来どうり、産軍複合体を中心とし、軍事財政を主体とする以上、その行きつく先は明らかである。

米帝の予算は、福祉予算を切りすて、黒人・少数民族・労働者階級を切りすてることで、軍事予算の大幅な拡大を図るものである。それは、八一年から五年間にわたって一兆五千億ドル（約三百兆円）を分割して軍事費にあてようとするものである。

こうした政策は、政府主導で軍需産業への投資を促し、先端技術部門―電子機器で他の帝国主義国との格差をつくりだすと同時に、国内の景気を刺激して、あわよくば兵役志願制のなかで民間より高い俸給を実現して、失業人口の若年層を軍隊に吸収しようとしているのである。

こうしたバラ色の夢は、金融独占ブルジョアジーにだけであり、労働者階級人民は、実質賃金の低下・失業率の増大（九％）とスタグフレーションの影響を最も直接に受けるのである。

レーガン政権発足後、一年たった今、すでにその経済政策の破綻が明らかになりつつある。それは、スタグフレーションが深刻化するだけではなく、連邦予算の赤字が拡大し、八三年には千五百億ドルになりそうだし、成長率はＯＥＣＤの推定でマイナス〇・五％になるという。だが、今年度の軍事予算が、二一五八億ドル（前年比十％増）を計上している以上、その矛盾はますます拡大せざるを得ないだろう。米帝の不況が他の諸帝国主義国の不況を生み出し、米市場に向って輸出ドライブがかかってくる。こうしたＥＣ・日本との貿易摩擦が、米帝の経済的困難をますます強めざるを得ないのである。こうした中で、すでに反レーガン集会が三十万人も結集したように、労働者階級人民の不満は高まり、闘いが開始されている。

こうした矛盾を「強いアメリカ」の国民的合意づくりでおおい隠し、経済的困難を突破するために帝国主義戦争に向っており、全世界的規模でのソ社帝との角逐を強めざるをえない。

それは、この間のレーガン政権の軍事増強と核戦争をも肯定した戦争準備と、戦争挑発行動となって集中的にあらわれている。

米帝レーガンの戦略は、「カーター・ドクトリン」による八十年代戦略

を基本的に継承している。それは、1 1／2戦略―「一つの大規模戦争と一つの地域戦争」に代って、ヨーロッパを対ソ戦の主戦場とし、同時に中東における大規模戦争もという二戦略に転換し、このもとで、ＮＡＴＯ・日米安保体制等を連動させ、米日欧州列強帝による「合同防衛」で補完するという世界戦争戦略である。レーガンは、この遂行のために、中性子爆弾製造の再開、欧州におけるパーシングⅡ型戦域核増強等と「欧州限定核戦争論」あるいは、八四年アジアへの戦域核の配備など、米本土と海上百カ所に三十六種類の戦略戦術核三万発を所有し、公然と「核戦争に勝ちぬくための」核軍事力の対ソ優位を図っている。

更に、中米のニカラグア革命への介入、エルサルバドルの政府軍への軍事援助、「反ソ・反共の拠点」としてのイスラエル、韓国への軍事・経済援助のテコ入れ等にとどまらず、サウジアラビアへの武器の売却、シリアのゴラン高原併合の後押し、エジプト軍と米軍の合同演習「ブライトスター82」、その他、ペルシャ湾岸諸国などへテコ入れし、イスラエル、エジプト、サウジアラビアを枢軸とした米帝の中東への支配権を確立し、それはそれで、ソ社帝との対決をつよめ、これら地域での戦争挑発策動をつよめている。

そして朝鮮半島では、戦略偵察機ＳＲ71による領空侵犯を行ない、八月八十カ国非同盟諸国円卓会議の際、挑発行動を強め、ミサイル攻撃を受けるや第七艦隊を出動させたのである。このことからして、米帝レーガン戦略は、かっての常とう手段であった〝戦争瀬戸際政策〟による強いアメリカの実現である。それは、開発途上国や紛争当事国への積極的な武器援助にあらわれている。

西欧諸帝の体制的危機の梁化

米帝が陥った政治的・経済的危機は、帝国主義列強の弱い環――英・仏帝で噴出した。こうした危機を回避せんとして帝国主義国間の矛盾の激化をとどめる「危機管理」としての「サミット」に結集してきたのである。

世界的な高度成長がかげりをみせ、英帝がスタグフレーションに陥って、経済的危機を招いたとき、社民勢力――労働党政権が、所得政策によって乗り切らんとしたが、労働者階級へあらゆる犠牲の転化を図る「耐乏生活」キャンペーンが、実質賃金の低下を強要するものになっていった。イタリア共産党の「歴史的大妥協」など、相対的安定期にとっていた経済政策では、また「危機管理」に社民勢力をとりこんでも、こうした事態はますますはっきりしてきた。それはまた、労働者階級の抵抗と反撃が生みだされ、争議が多発したことによってより促進されたのである。

これが七九年英国で、保守党が「小さな政府」を掲げて選挙に勝利し、「所得政策」――「経済への政府の介入」反対を打ち出し、福祉政策を切りすて、国営部門の大部分を民間に移管する「行政改革」を行なって、金融政策を重視するマネタリズムで国家財政の赤字を克服するというものである。

それは、従来の階級対立の緩和策を打ちすて、金融引きしめ策と高金利政策で、企業倒産が増大しても政府の支援を行なわず、「自由経済」の名のもとに大資本への集中を促し、こうした政策で必然化する失業者の増大を放置し、こうした失業者の増大の圧力を資本が利用し、労働者階級への攻撃を強めることを奨励するというものである。これは逆にいうならば、その危機の深さは、相対的安定期における階級対立の緩和策がとれず、階級対立の激化に国家暴力で対決するというものである。

こうした英帝の政策は、都市での青年労働者、ならびに黒人を始めとした移民労働者の暴動を生み出しているのである。英帝の階級対立政策をもってしても、経済的困難を突破しえない今、保守党の内部対立が広がっている。

仏帝においては、ミッテラン社民党政権が登場したのであるが、何の新味も出さず、従来の方法を踏襲することしかない「危機」故に、労働者階級人民の支持を急速に失ないつつある。そして、欧州の「優等生」であった西独帝において、おお歌していた経済成長が低下してきており、ソ社帝、ポーランドなどへの債務が、それら諸国の「危機」によって返還の可能性が失なわれ、金融上の信用不安を生み出し、それが西独経済を圧迫せ

ざるを得ず、また反戦・反核運動の一大高揚は、ますますその困難を深化させざるをえない。

しかし、それぞれの諸国は、高度成長の終えんによって「危機」が生み出されたのであるが、その階級矛盾がそれぞれ異なることによって、「サミット」に結集しつつも、対ソ戦略一つをとっても、米帝との間に一定の距離を生みだしている。

たとえば西独帝は、米帝の反対を押し切ってソ社帝と独自に天然ガスの供給を受け入れ、ポーランド問題でのソ連への制裁に参加せず、独ソ首脳会談も開いたのである。またカナダもソ連への穀物禁輸に参加せず、独自の道をすすんでいる。こうして米帝と西独帝の間の矛盾も次第に強まってきている。

(3) ソ社帝の腐朽化の深まり

(三) ソ連の経済は、六十年代に国民総生産を大幅に伸した。それは、「経済改革」のもとでの企業自主権の拡大・物的刺激政策によっていた。だが、その経済成長も一時的なものにすぎなかった。こうした状態を生み出した原因は、高度成長を可能にするかにみえた重化学工業、とりわけ軍需産業を中心とした大規模投資が、実は、軽工業や農業部門との不均衡を拡大したことによっていた。こうした状態を突破せんとして、新たに物的刺激策を複雑化したり、格差をつけて労働者と農民の意欲を引き出そうとした。こうした試みが成功しないのは、現在のソ連が国家独占資本主義であり、それがますます停滞と腐朽性を深めているからである。ソ連は次第に低成長・マイナス成長の傾向が長期化してきたのである。

それが、国家予算のうち軍事費が四十%を占めるという矛盾をかかえ、インフレの昂進によって、労働者階級の生活はますます疲へいしており、他方では、農業生産が三年つづきで不作―壊滅的打撃を受けることによって、農産物輸入の国家財政に占める位置が飛躍的に増大し、今年は百二十億ドルに達し、それによって軽工業部門への投資が行えないという悪循環をくり返している。

こうした経済的な脆弱性を突破するために東欧圏を自らの支配下におき、工業原材料を収奪し、農産物を輸入し、農業生産の失敗をおぎない、また商品市場としていくことにおいていた。つまり東欧諸国を従属国へつなぎとめていくことで、ソ連の軍事第一の経済は可能となっていたのである。

こうしたソ社帝の支配が、東欧の諸国の経済上の不均衡を生みだし、ポーランドのように収奪のために自国の食糧さえも供給できない状態につき落している。ポーランドやルーマニアなどが、西欧帝からの借款によって経済危機を乗りきろうとしているように、もはやソ社帝は、東欧圏を安定的に支配していくような余力はなくなってきている。

ソ社帝は、こうした経済的・政治的危機の突破を、米帝との戦略・戦術兵器開発など、核軍拡競争を強め、自らの資本投下地域・商品市場を求めて対外軍事膨張を強めることにかけ、欧州・極東アジア・中東などで米帝との世界支配をめぐって角逐を強めている。

しかし、アフガン侵攻は、かってての米帝にとってのベトナムのような様相を帯び始め、かつ何よりも致命的なことは、ポーランドへの軍事弾圧にもかかわらず、ポーランドのプロレタリア革命の不屈の抵抗と闘いは、文字通り、ソ社帝の足もとからそののどもとに火がついたことを示しており、その崩壊の不可避性をしめしている。

(4) 米ソの第三次世界大戦の危険性の増大と国際プロレタリアートの闘いの前進

(四) 米帝とソ社帝がともに、その程度の差はありつつも、帝国主義の腐朽性を強め、経済的危機はもとより政治的ないきづまりをますます強めており、それを突破するための唯一の方策を、軍需産業のテコ入れを重心とした財政で軍事スペンディングを強め、「軍事国家」へと進み、労働者階級人民への強権的支配を強め、戦争準備体制づくりを加速化して、それぞれに世界支配をめざしている。

こうした米ソの帝国主義的支配―戦争の危険性と対じし、世界の共産主義運動の推進翼を形成してきたのが、民族解放闘争の前進であった。こうした闘いの前進に対して、経済援助などでつなぎとめ、支配するという新植民地主義は、ソ社帝はもとより、米帝をはじめとした諸帝国主義の非産油途上国の対外債務残高が四千億ドルを突破している以上、経済援助をつづけることができずに破産している。それ故、米帝も、他方、ソ社帝も民族解放闘争に軍事的対決をせざるをえず、総じて米ソは、世界支配の手詰りと瓦解をもたらし、今まで通りやっていけなくなりつつある。

他方で、帝国主義諸国のスタグフレーションの契機をつくりだした、産油国の、急速な値上げで外貨をかせぎ、自国の工業化をすすめんとしてきた方式も、諸帝国主義国の不況で石油消費が停滞し、そのうえ工業化のための資材の輸入が拡大し、次々と赤字国へと転落している。

黒字国であるサウジアラビアでも、産油量を大幅削減することで、他の産油国と足並みをそろえることができないのは、そうすれば工業化政策が破産し、そのことによって国内の階級闘争が激化するのが明らかだからだ。いわば、産油諸国は「第二のイラン」へ突き進んでいるといえる。

そしてアジアでの「中進国」といわれるフィリピン、インドネシア、韓国の政治・経済的危機もますます強まっている。これらの諸国は、米帝および日帝の過剰資本のはけ口として、その軍事・経済援助をうけて「奇跡の経済成長」をとげてきたのであったが、それ自身、農村を破壊し、またインフレの昂進によって労働者階級の生活を困窮化させていくと同時に、買弁ブルジョアジーと国家官僚層のみに奉仕するものであった。こうした経済成長さえ、二度にわたる石油危機によって完全に頓座したのであった。こうした軍事・経済援助を軸とした借款経済のぜい弱性・根本的破産は、ますます労働者階級の生活に重くのしかからざるをえない。

これら諸国の軍事独裁政権に対して、労働者階級人民の広範な決起が生みだされている。そして支配層内部での分裂が生みだされている。韓国での朴暗殺も、労働者階級人民の闘いの高揚に恐怖した支配階級内部での分裂である。そうであるが故に、朴にとって代った全政権も、基本的には従来の路線を踏襲し、「ソウルの春」―光州蜂起に戒厳令で軍隊による血の弾圧を行ない、「反ソ・反共の防波堤」として「北からの脅威」を宣伝し、日米帝から軍事・経済援助を引きだすことに腐心せざるをえない。

事実、レーガン政権発足と同時に全は渡米し、米地上軍の存在とともに経済援助を引きだし、今日では日帝に対して六十億ドルの借款を日帝の「安全保障」を名目として要求している。こうした韓国経済の破綻は、すでに明らかであり、ますます労働者階級人民の闘いを広く、かつ深部から生みださずにはおかない。

日帝の〃全斗煥体制安定〃キャンペーンにかかわらず、韓国民衆の闘いは、光州民衆の闘いは、光州蜂起の血の弾圧を教訓化し、粘り強く闘い抜かれており、更に新たな段階へと進みでている。

休校令の解除された昨年九月以降、ソウル大をはじめとして、全の大学で反政府ビラがまかれ、デモが組織されてきた。一二月には、「反フッッショ学友宣言」が出され、「学生運動は、全体闘争を進めて行くべき主導勢力として自己変革をしなければならない」と闘いの宣言が発せられた。こうした学生の闘いとともに、インフレ、失業、苛酷な労働に苦しめられている労働者階級の闘いも進んでいる。全政権は、労働組合法を改悪し、労使協議会法制定によって、御用化を図るとともに、多くの労組を解散させた。これに対して清渓被服労組がろう城闘争を闘った。こうした「反米反日全打倒」の労働者学生の闘いは、更に大きな高揚をむかえようとしている。

全てこうした事情は、植民地・従属諸国の労働者階級の闘いと、帝国主義国での労働者階級の闘いが、これまで以上に爆発し、結合し、国際プロレタリアートの攻勢的局面が、米ソの帝国主義戦争の危険性に対じし、八十年代半ばに向ってつくりだされていく様相をしめしている。つまり、米ソを両軸とする第三次帝国主義世界大戦の危険性と、世界革命の現実性がこれまでよりいっそう成熟しつつ、深まっていることをしめている。

二、八十年代半ばへむかう わが国の情勢の特徴

(1) 日帝の危機と結びついた戦争準備と政治反動

わが国の情勢もまた激動する世界情勢と離れて存在しえない。ケインズ主義の神話が破産し、マネタリズムへの転換も行きづまり、未曾有の危機に向いつつある世界資本主義の中で、ひとり日帝だけが、他西側帝国主義に比べ、相対的つよさを示してきた。例えば、米帝がOECD推定で成長率がマイナスになるといわれている時、五・二%目標を打ち出している。もちろん、この日帝の〃強さ〃の根拠が、朝鮮・アジアへの侵略と、国内の下層労働者の切りすてと犠牲の上に、年功序列・終身雇用制、あるいは、労働組合をテコとした労務管理等の徹底など、労働者階級への搾取・収奪、抑圧の上にあったことはいうまでもない。

これは、長期に続く〃強さ〃であろうか。

今日、声高に内需喚起が叫ばれているが、単なる希望的観測にすぎず、基幹産業において新日鉄など六〇%の操業率しかなく、牽引車であった自動車も対外輸出規制で生産が落ちている。それ故、日帝は、過剰資本のハケロを、「海外投資国」として、これまでを上回る資本輸出に打って出ざるをえず、米市場へ向って洪水的輸出を行えば、日米経済戦争の激化とその保護貿易主義に直面し、他方で、イラン革命や朝鮮南半部の光州蜂起に打撃をうけたように、もっと大規模な民族解放闘争の反撃にさらされるは必至である。また、中東情勢の激動は石油資源構造の致命的弱さを直撃するものとならざるをえない。

とりわけ、レーガンの経済政策の破綻が宣告されたいま、軍事費負担のひきつづきの強要に加えて、八二年秋、米中間選挙で保護貿易主義の台頭―金本位制への転換すら予想され、日帝の相対的強さは一気に吹き飛ばされるものとならざるをえず、世界資本主義の未曽有の危機の進行は、この傾向を強めこそすれ、弱めることはない。

しかも、日帝は、若干の時間差があるものの、他帝国主義が陥った財政赤字に同様に苦しんでいる。その国家財政の破綻は、赤字国債に集中されている。すなわち、今日では、国債発行残高が八三兆円となり、八二年予算では国債の利子払いと六兆六千億円(前年座比二五・三%)で、一般会計に占める割合は十四・二%になる。国債の利払い、償還に赤字国債を発行するという悪循環、八五年には、七五年発行分の一兆円余の一括償還がまっており、これ以降、この償還が引き続き、いまだその財源の見当がつ

いていないという、雪ダルマ式の経済的危機がぬきさしならぬ段階に至りつつある。

これに加えた、米帝からの軍事分担・軍備増強要求による膨大な軍事費が、これに追い打ちをかけるは必至である。

それ故、日帝は、一方で、一般消費税の導入、福祉の切りすて、行革、低賃金・強搾取・収奪によって労働者階級人民へ矛盾を転化している。他方で、日帝は、産業構造を再編成し、重化学工業の過剰設備を軍需産業へおきかえ、産軍複合体をつくり、航空宇宙産業、電子機器、船舶、車両等、軍事先端技術を民間部門へ拡大し、軍事スペンディングの強行によって「軍事強国化」することで突破せんとしている。

これはこれで、労働者階級の状態の相対的・絶対的悪化をもたらし、その反抗と闘争を激化せざるをえない。

これら反抗と闘争の新しい台動は、昨秋の右翼的労戦統一反対闘争に至る過程でかいまみたように、労働者階級の深部からの本格的爆発の可能性をみせている。この爆発の可能性は、世界資本主義の危機、とりわけ、米帝のそれと連動した日帝の加速的経済的危機の進行と共に、八十年代半ばに向っていっそう成熟するは必至である。

(2) 八三年決戦の政治性格

わが国の金融独占ブルジョアジーは、わが同盟がすでに分析したように、帝国主義戦争の道を急いでいる。

「過剰資本を世界市場への進出で克服する道のゆきづまり、米帝の強硬な役割の増大―軍備増強要求、米・欧帝との経済的対立の激化、ソ社帝との東南アジア・北方における直接の利益と他民族支配をめぐる争奪、中東の石油資源獲保のため、他方での朝鮮南半部・アジアでの民族解放闘争の嵐、国内階級闘争の激化に対応し、延命するためには、日本帝国主義は、米帝の要請に応え、米帝の世界戦略とその指揮のもとで、対ソ世界大戦―朝鮮侵略戦争の準備に拍車をかけざるをえないのである。

とくに、朝鮮南半部は、米帝以上の日帝の生命線である。光州蜂起に爆発した朝鮮南半部の労働者階級人民の革命の炎は、日本帝国主義を焼きつくす炎である。だから日帝は、米帝の指揮棒で動くとはいえ、米帝に代って、朝鮮侵略戦争の主力としての役割を担い、アジア全域を支配するため、八十年代の早い時期に戦争準備を完成することは、彼らの死活問題である」(同盟統合大会)

今日、この骨格にいささかの変化もないが、世界情勢でのべたごとく、帝国主義世界大戦の危険がいよいよ深まる中で、これを先導している米帝レーガン政権の破綻と危機にもよって、いっそうわが国の支配階級は、米帝から、戦争準備の立ち遅れを批判され、どうかつされ、牽引されて、その後を追いつつ、戦争準備を急ピッチにすすめている。

日本金融独占ブルジョアジーの政治代理人＝第二次鈴木政権の全国家・社会的規模での戦争準備・政治反動のとみに露骨さをました攻勢こそ、その証左である。

国内におけるこの情勢は、どのよなテンポで、どこへ向ってすすんでいるのか。

結論的にいえば、日本帝国主義の挙国一致の戦争遂行体制の完成をもくろんで進行しつつある全国家的再編は、崩壊した帝国主義の相対的安定期の「五五年体制」に代る、最近の自民党の主張する「八五体制」確立へ向って急速にすすんでいる。

すなわち、八五年をメルクマールとしてすすんでいる事態の本質は、くり返しのべてきたように、帝国主義戦争を実行する臨戦体制と同時に、当然その過程で爆発する可能性のある革命闘争の予防反革命をも意図する国家権力を要とした、ブルジョア階級からする先制的な「戦争遂行国家」と体制の完成をめざす、労働貴族供をフル動員した大再編なのである。

その環は、第一に安保・自衛隊・行革問題に象徴される軍事・官僚機構を頂点としたブルジョア独裁国家の機構そのものの再編であり、第二には、第一の問題を踏み絵とした、いわゆる「五五年体制」の社会的・政治的支

柱となってきた政党再編であり、第三に、第一、第二と連動しつつ、ブルジョア独裁の階級的基礎における労働者階級の帝国主義的解体攻撃、すなわち労戦の産報化である。

これらは、相互に連動しつつ、「静かなる上からのクーデター」ともいえる攻撃性をもってすすんでいる。

これは、すでに開始されており、その政治過程における重大な節目を「八三年」においている。

ではなぜ、「八三年」が重要な節目なのか。

それを鮮明とするために、現在進行している、大がかりな戦争と反動攻勢の構造の、重要な環のテンポをみていかねばならない。

第一に、日米安保体制再編・強化を要とした、自衛隊増強等、軍事機構を頂点とする国際機構の再編でる。

日帝の軍事戦略が、米戦略のもとで「専守防衛」から「前方防衛」へ転換し、沖縄基地を要に、米帝急速展開部隊と結んで中東をにらみ、他方で朝鮮半島への沖縄米軍・自衛隊の出兵が準備され、かつ、北東アジア・西太平洋での対ソ局地戦を想定して、すでに実態化されつつある。このための軍事上の完成は、八二年度防衛予算の七・五％増、「防衛計画の大綱見直し」「中業見積り」の一年前倒し実施（八三年）、八二年中央指揮所の完成と米太平洋司令部との一体化、六十億ドルの対韓援助の大型化と日米韓軍事同盟の一体化―その第一歩として八二年韓国艦隊と自衛隊の相互「訪問」、チームスピリット82とも連動する二月リムパック82、成田侵略空港完成をかけた八二年二期着工攻撃、米核艦船の寄港と沖縄基地を中心とする全土核基地化、兵器国産化等々としてあらわれている。

とりわけ、八二年一月に三年三カ月ぶりに開催された十八回めの日米安保協議会議での「極東有事研究」は、朝鮮侵略反革命戦争のため、これらの軍事上の準備・共同作戦の総仕上げ、自衛隊の朝鮮出兵はいうまでもなく、基地の共同使用、米軍の輸送、港湾使用、食糧、エネルギーなど後方支援の便宜供与についての一切を、すなわち、日帝の「総合安保体制」づくりを急ぐものに他ならない。

この軍事上の完成は、八二年六月―八三年本格化する財政危機突破・福祉切り捨ての行革断行―「小さな政府」づくりと官僚機構の整備、八二年刑法改悪の国会上程、有事立法研究、原発推進、八二年金武ＣＴＳの二期着工攻撃、八二年自民党大会の改憲宣言、及び各地方自治体の決議による全国的改憲運動の推進、小選挙区制の導入、あるいは、狭山異議申し立ての棄却策動、「特措法」打ち切り攻撃、教科書の国家統制、在日朝鮮人への支配・抑圧・差別・同化攻撃、労基法改悪・「家庭基盤充実整備」構想などや、自民党の自主憲法制定議員連盟の「天皇元首」規定など天皇制イデオロギー、あるいは差別意識・「愛国心」「国防意識」の流布など諸政治反動攻勢と結びつき、連動して、八二―八三年と、より具体的にすすまんとしている。

第二には、政党再編と自民党単独政権の危機に備えた、新たな「自社公民」連合政権構想の動向である。

日帝は、八二年ロッキード判決をみこんで、「二階堂幹事長」の第二次鈴木政権を発足させ、他方で、自民党単独政権の動揺と危機をも想定して、「安保・自衛隊のようご」等を踏み絵としつつ、相対的安定期に養育てきた労働貴族供をつかって、民社党・公明党・社会党の右派の取り込みと連合の準備を急いでいる。

これによって、「八三年総選挙」に、八十年同時選挙で獲得した浮動的「安定」過半数を防衛し、打ち固め、改憲をはじめ諸政治反動を実行する勢力の確保をなさんと、着々と布陣をひいている（以下、略。第一新年号「第二中総決議」の〃五五年体制の崩壊と激動する党派再編〃参照）。

第三は、労戦の産報化に象徴される労働者階級に対する帝国主義的解体攻撃である。

このテンポは、最も鮮明に打ち出されている。すなわち、八一年十二月民間先行「統一準備会」の発足、八二年民間「統一協議会」の発足、八二―八三年に行革と結びついた官公労に対する集中した分裂・解体攻撃、これと併行して八三年民間統一、八五全的統一―産報化の完成がもくろまれている。

こうして、日帝は、労働貴族供を帝国主義の手先として、革命闘争の主力軍を打ち砕きつつ、賃金抑制・首切り・大合理化等攻勢をかけて、改良の果実すら許さない、侵略と他民族抑圧のための帝国主義労働運動の育成を急いでいる。

このようにみると、これら全ての問題の進行に関連して、次の点を重視しなければならない。すなわち、八三年地方選と参院選、そして同時（あるいは八四年夏までを期限としているが）総選挙がもつ位置と階級的役割である。わが国の金融独占ブルジョアジーは、「五五年体制」の全構造の根本的崩壊にしめされるブルジョア独裁のほころびをつくろい、「平和と民主主義」を「戦争と反動」にとってかえる体制の確立に向って、と同時に、激化しつつある労働者階級人民の反抗と闘争を、この「選挙戦」、議会主義の枠内のあれこれの政権構想に吸引・抑えこみ、総じて、「八五年体制」の政治基盤を整えんとしている。

それこそ、自民党の「八五年体制論」がいう「新しい政治システム」を「労働組合勢力の支持基盤」とし、「ひと握りの野党があって、あとは全部与党」という形での「国政の安定」をさす政治支配のことをしめしている。このため日帝は、この「八三年総選挙」で獲得した安定勢力でもって、戦争準備と諸政治反動を一挙に推進し、その打ち固めとして日米安保体制の改訂とも連動する改憲に打って出ることは、八二年自民党大会の宣言に暴露されている。

（3）五五年体制の崩壊と政党再編（略）

（4）階級闘争の歴史的転換の開始

八十年代階級闘争の歴史的転換の開始、国際帝国主義の一翼としての日帝の戦争準備と反動の大攻勢は、急速に階級対立を先鋭化し、労働者階級人民のおさえがたい憤激をもたらし、闘いの隊伍をおしひろげ、整える物質的基礎を整えている。

八十年代初頭の日本階級闘争は、八一年、ポーランドをはじめ、国際プロレタリアート人民の国際階級闘争の発展にも促がされ、歴史的転換を迎えんとしていることである。

それは、第一に、八一年秋に爆発した労戦の右翼的統一をめぐる全国的・大規模な闘いにしめされるように、戦争と反動の手先となった労階貴族と対決する労働者階級の本隊の深部での大きな胎動が、目に見える形をとって噴出し始めたことである。すなわち、社共―総評労働運動の歴史的解体・崩壊を舞台に、労働運動に主戦場がうつり、旧い議会主義・改良主義の日和見主義者の後衛と交代して、革命的・階級的な、真の前衛部隊が進出する歴史的幕あけをしめしつつあることである。

先進的労働者の決起は、労働貴族・組合官僚の動揺と亀裂、その瓦解さえつくり出し、闘う労働組合の全国結集の準備をも整えつつある。またそうした労働者の闘いが反戦・反安保、反行革、反原発等と結びつき、全人民的政治闘争の主導部隊の形成へと進んでいる。

第二には、ヨーロッパ、アメリカの反戦・反核闘争の史上最大の高揚、ポーランドのプロレタリア革命にも促がされて、日本における反戦・反安保、反原発・反核、刑法、三里塚闘争等が、労働者のみならず、諸階層人民の中に拡大・深まり、数万・数十万単位の闘いの可能性をみせていることである。

第三に、農民、学生、在日朝鮮人、国内少数民族、部落大衆、「障害者」、女性等の反抗と闘争もつよまり、労戦統一反対、反戦・反安保、反核などの闘いを通じて、労働者階級との大規模な結びつきが開始されつつある。

第四に、社共―総評の歴史的崩壊過程に規定されて、労働者階級が、社共や労働貴族から、これまでになく大規模・本格的に離反を開始している。と同時に重要なことは、社共の反対者であった新左翼の歴史的終えんもが刻印され、これらに代る、新たな、革命党と階級的労働運動の綱領・路線と組織の問題が全国の共産主義者のみならず、先進的労働者の間で

の、最大の関心事、要求となってきたことである。

これらの事情は、次のことをしめしている。日本労働者階級が長きにわたった賃金奴隷制からの解放をめざして、ブルジョア国家権力を打倒し、プロ独を樹立し、銀行の没収をはじめ生産手段の私的所有を社会的所有にかえ、自らが社会の主人公となって、生産と分配の労働者統制等を実現する、社会主義革命の客観的条件がすでに成熟しつつあり、その革命によってしか、日本帝国主義の根本矛盾は解決しえないところにまで至っている。

と同時に、これまでの日本革命運助の致命的弱点ともなってきた、その主体的条件の未形成を根本から転換する諸条件が、これまでになく広々と開けているということである。

☆　☆　☆

以上からして、すでに明らかなごとく、わが国情勢は、八十年代半ばには、帝国主義の戦争と反動、すなわち、日米安保をめぐって、自衛隊の朝鮮への出兵をめぐって、諸政治反動攻勢の集約的表現としての改憲をめぐって、戦争か革命かの歴史的選択をめぐって、二大階級の八十年代最初の会戦が不可避となる情勢へ向っている。

それ故にこそ、八二年から続く「八三年総選挙」を焦点とした一つ一つの戦争準備と反動の環をめぐる攻防の成否が、この八五年に予想される二大階級の、国家権力をめぐる最初の会戦の鍵を握るものとなるは必至である。

こうした見地から、結論的にいえば、「八三年政治決戦」の性格は、八十年代半ばに向けた帝国主義の側からする経済・政治・軍事の（とりわけ、経済・政治の集中的表現である軍事問題をめぐって）全分野で、戦争と反動の重大な節目を形成する政治・組織戦なのである。

この性格ゆえに、八二年を戦端とする八三年は、わが国の八十年初頭情勢から八十年代中期情勢への移行の深さ、拡がり、等を大きく規定する決定的ターニングポイントとなるであろう。

その鍵は、すでに蜂火をあげた先進国をはじめ、ポーランドや朝鮮・アジア等の国際プロレタリアート・被抑圧民族の革命闘争と連動した、わが国のプロレタリア人民の、階級闘争の飛躍的前進にかかっている。

三、わが同盟の任務

(1) 戦争に備え、革命を根本的に準備しよう

今日、情勢は、全世界的規模で戦後史を画する新たな戦争と革命の激動の時代に、歩一歩と向っている。

わが国においても、例外ではなく、二大階級の八十年代最初の会戦が不可避となって迫りつつある。

わが日本のプロレタリアートは、国際プロレタリアートの一部隊として、世界プロレタリア共産主義革命の前進のために、全世界のプロレタリア階級と被抑圧民族の団結をうながし、国際プロレタリアートの革命的行動の大きな連帯と統一を大胆に闘い取らねばならない。とりわけ、ここ日本の地において、日本プロレタリアートは、八十年代半ばの最初の会戦に対して、反帝・反社帝の旗を高く掲げ、朝鮮・アジアの革命闘争と連動・団結し、帝国主義戦争に反対して、日帝打倒・米帝一掃・プロ独樹立の社会主義革命の実現に向けた、労働者階級を主力軍とし、全人民をひきいた巨大な革命的大衆行動として闘い抜かねばならない。

しかし、われわれは、この八十年代の最初の会戦を、あらかじめ、その規模と闘争形態において、例えば武装蜂起として闘われるか等々を想定することはできないし、また、想定することは誤りであろう。ただ、重要なことは、同盟統合大会で確認したように、もし戦争がぼっ発したならば、民族解放革命戦争、社会主義祖国防衛戦争は、断固支持し、自国帝国主義

と米帝に対して敗北主義的態度をつらぬき、帝国主義戦争を内乱へ転化しなければならないということである。

こうした見地の上で、八三―八五年に至るわが同盟の基本戦術は、戦争に備え、革命を根本的に準備する、すなわち、全人民の武装蜂起をめざす敵の要塞に対する正規の攻囲軍の組織化に、全力を挙げることである。それは、とりもなおさず、労働者階級内部の社会主義と帝国主義との分裂を組織し、社共に代る革命的労働者党創建をテコに、社会主義にその多数を獲得し、もってプロレタリアートを指導階級として、貧農と同盟し、都市・農村の小ブルジョアをひきつけて、広大な社会主義統一戦線の大胆な建設に勝利しなければならない。

今日、問われているのは次のことでえる。八十年代半ばを見据えて、これに至る決定的節目となる「八三年政治決戦」の具体的攻防の環をしっかりと握りしめ、八二年以降、この「正規の攻囲」戦術のいっそうの具体化として、われわれの闘争戦術を定めて闘うことである。

わが同盟は、すでに統合―同盟創建大会で決定した任務の全てを実現することをめざして闘うが、特に「八三年政治決戦」から八五年を見据えて、当面、三つの環の闘争方向と、四つの柱の自力の党建設方針として大胆に闘うことを提案する。

(2) 三つの環の闘争戦術

第一に、帝国主義の戦争と反動に反対する「安保粉砕・朝鮮連帯・改憲阻止」を一大頂点とし、三里塚、刑法、狭山、反核、反基地等々あらゆる政治課題の水路から導かれる、全人民的闘争の数十万単位の大闘争の爆発を組織しよう。

われわれは、憲法問題を、五十年代半ば以降、わが国の巨大な国家機構をブルジョア階級が掌握し、ブルジョア独裁を実行しているその法的総括の問題として、また、日米安保問題を、日米安保の条約による米軍の駐留と自衛隊との結びつきに示される、このブルジョア独裁国家への米帝の一定の統制・支配とみる。文字通り国家権力の問題と考える。それ故に、われわれは、これら問題を闘うにあたって、一方での日共等の議会主義・改良主義からする「平和と民主主義」の維持と防衛として闘う見地、他方での第四インター等の急進民主主義から政府に対する政策反対闘争として闘う見地と一線を画し、両傾向が共に、このブルジョア独裁をあいまいにしている点を暴露し、文字通り「国家権力の問題」として、わが国のブルジョア独裁国家を打倒し、米帝を一掃し、プロ独国家を樹立する闘いをうながす見地から闘わねばならない。これこそが「抑圧民族プロレタリアート」である日本労働者階級の、朝鮮人民の反米・反日・民主統一革命との国際主義的連帯の真の内実である。

また「安保粉砕・朝鮮連帯・改憲阻止」の闘いを、刑法、狭山、反核、反基地、反CTS、有事立法等々あらゆる課題の闘争の取り組みの集約環として闘う。特に七十年代日本階級闘争のブルジョア国家権力との対決の管制高地であり、労農同盟、全人民武装、統一戦線の萌芽形態を育て、新しい闘う農業の萌芽さえ創り出してきた三里塚闘争が重大な局面を迎えている。これを維持し、防衛し、発展させる上で、敵の三里塚侵略空港二期着工攻撃との闘いを重視し、先の集約環と結びつけて闘わねばならない。

また、わが同盟は、諸政治課題別共闘を大胆に推進しつつ闘う。そうした闘争の中で、帝国主義の戦争と反動に反対し、「安保粉砕・朝鮮連帯・改憲阻止」に一致しうるあらゆる政治勢力と連けいし、これを闘う、「六十年安保共闘」をこえる、労働者階級を中心とする被搾取・被差別人民大衆の結集する「全国大衆共闘機関」の創設に全力を挙げねばならない。

第二に、帝国主義の戦争と反動に統合される労戦の産報化に抗し、「平和と民主主義」路線に代る、社会主義革命路線と結合した階級的労働組合運動の再生を急ぎ、全国の工場を革命の根拠地・砦と変えねばならない。

労働者階級の圧倒的多数を社共、及び反動的組合官僚の影響力から引き離し、共産主義の側へ獲得するため、われわれは、労働組合を戦場として、重視する。われわれは、ここに巣食う反動的組合官僚が戦争と反動の

手先であることを暴露して、彼らを放逐し、指導権を奪取し、社会主義に向けて下層末組織労働者と組織労働者下層の階級的統一のため闘う。

とりわけ、今日、これまで一定の戦闘性を保持してきた、相対的安定期における議会主義・改良主義の総評労働運動が崩壊し、戦争と反動へ統合されつつあることを見据え、これにかわる、この戦闘性を真の意味で継承する、新たな階級的労働組合運動の再生に全力を挙げ、「われわれの基本構想」をつくり、「闘う労組連」の結成をかちとる。

それは、次の点を要として考える。すなわち、工場・地域で階級闘争を堅持し、この闘いを単なる個々の雇主に対する闘いにとどめず、資本家階級全体とこの階級の利害のため働くブルジョア政府に対して闘争することである。また、その再生のためには、朝鮮・アジア人民との真の階級的団結をつくり出し、日米帝の戦争と反動と闘うことは不可欠の課題である。と同時に、労働者階級が単一の階級として、階級闘争として闘うために、労働者階級の現実と未来の全利害を代表し、共産主義的理想のために闘う単一の革命的労働者党形成とそれとの緊密な、正しい関係と結合を大胆につくりださねばならない。(以下略)

第三に、二つの環と連動し、かつその形成を促進・援助し、指導する労働者階級の単一の戦闘司令部―社共に代る革命的労働者党者創建のために、共産主義者の統一協議会を巨大な建党運動として推進しよう。

すでに分析したごとく「八三年政治決戦」は、この政治・組織戦の攻防の環をにぎりしめ、労働者階級の歴史的未来をかけて、迫りくる八十年代の大会戦の前しょう戦を闘い、領導する社共にかわる革命的労働者党創建をそのカギとしている。

わが同盟は、この歴史的事業の情勢に応えた、よりいっそう大胆な、大衆的発展を促し、かつこれまでの二者間の統合を否定せず、「新六条件」を掲げつつ、統合を推進する方法として、「統一協議会」を提案して闘う。わが同盟は、この提案による新しい質の建党運動の意義を、先きの第一・第二の環ともなる闘争の遂行と結びつけて、大胆に労働者大衆の中に持ちこみ、八十年代が労働者大衆自らによる党建設の時代であることを呼びかけ、組織せねばならない。(以下、詳細は、第一新年号「全国の共産主義者に訴える―情勢に応え、統一協議会をつくろう―第二中総決議」を参照して下さい。)

わが同盟は、この三つの環の闘争方針を、労働運動を主戦場として、八二〜八三年の「政治決戦」に、日帝打倒・米帝一掃・プロ独樹立の政治総路線をいっそう鮮明に押し立て、これと対決するおれわれの革命的政治・組織戦として、八三年選挙をも利用する方策を準備しつつ闘う。こうして、われわれは、来るべき社会主義革命の前しょう戦ともなる二大階級の最初の会戦に向けた、革命の準備の橋頭堡を築かねばならない。

(3) 情勢きり拓く党建設を

わが同盟が、三つの環ともいうべき当面の闘争方針を、押しあげ実現するためには、その推進翼として、自力で担い抜く闘いの決意と物質力を必要とする。すなわち、わが同盟の綱領・路線・政策を大衆闘争の力に転化するため、統合によって打ち固めた成果を出撃拠点に、一まわり、二まわり、わが同盟を大きく飛躍させ、育て上げねばならないということである。

このために、われわれは、統合―同盟創建大会で定めた党建設の基本方向と重心のうちで、特に、同盟建設の四本柱の政策を具体化し、強力に推進することによってこの課題に応えることとする。この四本柱の自力の党建設こそ、三つの環の闘争方針の実現のテコであり、また闘争の組織的集約ともなる。

それは以下の四本柱の党活動の強化である。

(1) **全国政治新聞『赫旗』を武器とした党の政治宣伝・煽動を強化しよう。**

われわれは、全国政治新聞の発行・配布を武器とした党の政治宣伝・煽動を基本とし、革命的激動に備え、その活動の質と量をよりいっそう強化させねばならない。とりわけ、今日から八三年以降を見据え、社共からの労働者の離反、よりプロレタリア的下層労働者の革命的胎動のうねり、眠りからさめつつある新兵の次々の立ち上り、その規模が数万・数十万のどとうのように進む時代の始まりに対応して、わが同盟が、どのようにこれと結びつき、社会主義の側へ引きよせるのか。

いついかなる時も、共産主義者は、民衆の自然発生的な爆発でなくて常備軍の攻撃の準備をしなければならない。この常備軍は「ひたすら、全面的な包括的な政治的煽動にしたがう」ことを肝に銘じなければならない。われわれは、宣伝一般から、より平易な、大衆的な、もっと具体的な生きた煽動と、革命的大衆行動に向ってよびかけ、準備されてすすむような活動をつくり出さねばならない。

とくにこれら党の宣伝・煽動活動が、プロレタリアートの中心に根をおろし、工場の細胞建設の活動を促進し、援助するものとなるよう、その点を重視する。(以下、略)

(2) **理論誌『赫旗』の季刊発行を戦取し、社共に代る革命的労働者党創建にむけた路線の深化と路線闘争の武器に育て上げよう。**

「革命理論なくして、革命運動はありえない」ということが、八十年代ほど鋭く問われている時代はない。

わが同盟が、三つの環の闘争方針を大胆に闘い抜くためには、わが同盟の綱領・路線と政策をより深化し、いっそう具体化することが重要であるばかりでなく、いまだわが同盟においても未解決となってきた様な新しい領域への理論的着手を不可欠とする。と同時に「統一協議会」問題をはじめ、共産主義者の団結のためには、原則的な路線闘争の大規模な展開が不可避である。われわれは、理論活動を強化し、これを同盟理論誌『赫旗』に打ち固めて、全党でこれを強力な武器に育て上げる。(以下、略)

(3) **全党活動の基礎を工場工作におき、主要な地方の主要な工場・職場、あるいは地域に本格的な工場細胞の拠点を建設し、工場を革命の砦にかえよう。**

日本における社会主義革命をめざして、八三〜八五年を見据えて闘う方針は、この工場における細胞建設をテコとした、労働組合政策の推進とあわせて、工場を革命の砦とする活動にかかっており、同時に、逆にこれに集約することの重要さを強調せねばならない。

わが同盟の正規軍の組織化の環は、全国の津々浦々の工場に、社会主義の宣伝・煽動を大胆に組織し、革命党の細胞を建設することで、社共から、圧倒的多数の労働者をひきはなし、ひきよせて、産業予備軍の闘争と組織化と結びつけ、工場を革命の要塞にかえることを命綱とする。わが同盟は、最も計画的に、集中的拠点を設定し、創意性と自主活動に富んだ細胞活動の典型をつくり出し、党と労働組合の緊密な関係性をつくり出し、共産主義と労働運動を結合する組織的基礎を何としてもつくり上げよう。

とりわけ、今日、どのような小さい地方の工場・地域も、全国の政治と闘争と離れて存在しえない。だからこそ、わが同盟の一人一人の同志達が、自らの部署で、絶えず、全国の情勢、全階級闘争の見地、全労働者階級の利害の見地、全党的見地から、綱領的団結を要に、工場細胞の根本任務、自己の任務を理解し、定めることが重要である(以下、略)

(4) ① **天の半分を支える広範な女性、とりわけ労働者階級の半分を占める女性労働者への同盟の働きかけ、組織化を強化するために、その武器『女性解放通信』の創刊・定期発行を戦取しよう。**

(以下、略)

② **学生同盟『〇〇〇〇』の結成を戦取し「安保粉砕・朝鮮連帯・改憲阻止」を頂点とする全人民的政治闘争を労働者階級の指導のもとで担い、全学連を再建し、社会主義をめざした学生の隊伍を整えよう。**(以下、略)

(以上、四本柱の計画的政策は党内政策に、また、三つの環の闘争方針の個別の政治的内実については、二中総下で順次『赫旗』紙上で発表・展開する。)

(4) 八二年を歴史的飛躍の年に

最後に、こうした、わが同盟の闘争方針を組織する上で、革命的な翼の

内部にある急進民主主義のいぜんとした根強い傾向との一線を画して、すすまねばならない。

今日の多くの新左翼の諸派が、すでに確固とした政治勢力としては解体と分散状況にあり、情勢に応えて、八十年代半ばを見据えた党の闘争方針を出しえていない。そうした中で、「八三年―八五年方針」をそれなりに鮮明にして、それなりに組織力をもって闘わんとしているのは、革共同二派―革共同中核派と第四インターの諸君である。それ故に、われわれは、この二派の八十年代前半を臨む闘争戦術上の誤りを鮮明にしておかねばならない。

一方では、まず、革共同中核派の反帝・反スタ戦略の下での、日帝打倒の「八五年蜂起内戦、その先制的突入としての三里塚二期工阻止蜂起的闘争論」である。彼らは、反帝・反スタ戦略から導かれる八十年代の戦争が日米争闘戦であるという全くお粗末な誤りもさることながら、その八十年代半ばへ向った「武装蜂起論」は、かって、わがブンド・赤軍派の「前段階武装蜂起論」の再版ともいうべき、三里塚農民に依拠した突撃戦・革命戦争の闘争戦術である。

これは、典型的な小ブル急進主義であって、かっての七十年の全共闘―学生に依拠した突撃戦が農民のそれへ変っただけである。中核派は、結局、労働者階級に深く依拠し、これを主力軍とした階級闘争を基礎に、この下への全人民の組織化と武装の準備によって、日帝打倒・米帝一掃・プロ独樹立の革命の準備を放棄している。この路線・闘争戦術の破綻は火をみるより明らかである。

他方で、第四インターの「八三年政治対決」としての「自民党政府打倒・労農政府樹立」をめざした「反安保・改憲阻止」の闘争戦術がある。この間、主流派としてのそれなりの役割を担ってきた彼らは、八十年代に入っていち早く、その主戦場を三里塚から労戦問題へ移行させてきた。

しかし、その闘争方針は、彼らのトロツキズムと過渡的綱領主義を根に―情勢把握において帝国主義戦争をつかめず、「労働者国家論」のポーランド・アフガン問題における破綻等々、かつ、生産手段の所有制と国家権力問題を正しつかめず、国有化一般に固定する誤った国有化社会主義論、あるいは「労農政府論」にみられるごとく、ブルジョア国家権力を打倒してプロ独を樹立する権力問題を政府問題に切り縮める誤り等々、総じて、国家権力の問題の日和見主義を核心とするその根深い急進民主主義にたって、どのように改良主義・議会主義を批判しようと民主主義闘争の戦闘化に至らざるをえない。

両派は、かって、ブンドがそうであったように、新左翼の急進民主主義・小ブル急進主義をいぜん体現しており、一方でのテロリズムと他方での経済主義の傾向といえる。

ブンドの党的破産が典型的に示したように、その小ブル急進主義を真に総括し、マルクス・レーニン主義の革命的発展を武器に、日本革命を勝利に導く総路線と戦術こそが、八十年代の労働者階級の未来をかけた闘争の指針に他ならない。（党派の綱領的立脚点からする批判は別途提案する）

わが同盟は、両派に代表され、ブンドの一部分派を含む新左翼の急進民主主義政治とは、政治的には一線を画し、しかし、「連合もするが、闘争もする」見地で、より大胆な共闘をもめざして闘わねばならない。その中で、わが同盟のブンド―新左翼総括を強化し、政治総路線を鮮明にして、わが同盟の方針を実行しなければならない。

八十年代半ばを見据えて、われわれは、あらゆる可能性を追求し、労働者階級の階級的統一とその政治的進出を拡大し、貧農と同盟し、都市と農村の小ブルジョア大衆をひきいて全人民の武装蜂起をめざす数十万・数百十万単位の日帝打倒・米帝一掃の革命的大衆闘争の大高揚をつくり出そう。

それは、労働者階級の工場における政治スト・占拠・管理等々の闘いを根拠地・砦とし、農民・漁民・被差別大衆・被搾取勤労人民の闘争と結合させ、労働者の実力闘争、自衛武装をも闘い、これと学生運動が結合し、六十年・七十年代安保闘争をその質と量において上回る、帝国主義の戦争と反動に対決する「安保粉砕・朝鮮連帯・改憲阻止」の巨大な爆発を闘い取り、革命の準備をかけた前しょう戦とならざるをえない。

今日、ヨーロッパで、アメリカで、ポーランドで、そして朝鮮、アジアで国際プロレタリアートの叫びは、わが日本のプロレタリアート人民にこのことを促し、かつ求めている。

今、歴史は再び、三度、人類の運命の鍵をプロレタリアートが握っていることをしめしている。

そうであればこそ、今八二年をその戦端を開く歴史的飛躍の年としよう。

全党の同志諸君！

大胆に闘い、大胆に組織しよう。

旧共産主義者同盟（革命の旗）理論機関誌

『長　征』

創刊号

二号（ソ連論特集）

旧共産主義者同盟（紅旗）理論機関誌

『紅　旗』

創刊号（ソ連論特集）

二　号

いずれも残部あります。赤路社で取り扱います。

全国の共産主義者に訴える

情勢に応え統一協議会をつくろう

社共にかわる革命的労働者党創建にむけたわが同盟の提案

―第二回中央委員会総会決議

は じ め に

八十年代初頭以降、全世界的規模での戦争と革命の激動の始まりの情勢は、日をおって深まっている。

すぐる、八一年、日本階級闘争は、帝国主義か社会主義か、国家をめぐる諸階級・諸政治勢力の二大分裂・大再編が、その階級的基礎の深部から目にみえる形をとって始ったことをしめした。

八一年秋に爆発した労戦の右翼的統一をめぐる全国的大規模な闘いから十二月十三日、十四日の統一準備会発足をめぐる攻防こそ、その証左に他ならない。

日本の労働者階級は、まさに自己の未来を制する決定的局面に際会しており、ひとつの歴史的転換点に立っているといって過言ではない。それは、社共－総評労働運動の歴史的解体・崩壊を舞台に、われわれ、新左翼すべてもが、荒々しく、ふるいにかけられ、一体だれが残り、一体だれが転落したのかを一層鮮明にした。と同時に、旧い腐って落ちた日和見主義者の後衛と交代して、真に革命的な真実の前衛部隊が進出する歴史的時代の幕あけでもあった。

そうであればこそ、われわれは、日本労働運動史の歴史的転回点に攻勢的に転化するために、八一年十二月がさらけ出した致命的弱点を冷厳な事実として受けとめねばならない。

それは、日本の金融独占ブルジョアジーとその手先・労働貴族どもが、自らの路線を固めた「基本構想」で武装し、その統一準備会発足－総評解体の組織戦にいどんだのに対して、闘う労働者は総じてこれと対決する闘う総路線と組織を持たないで、素手で立ち向っているという現実に、集中的にあらわれている。

この点をわれわれは見落してはならない。情勢が要請する全体的な前衛の役割において、革命的左翼は無力であったことを肝に銘じなければなら

ない。
八一年秋、先進的労働者の仲間の中から、ふつふつとわき立ち、いまに続いている「われわれは何をめざすのか」「路線は」「われわれの闘う基本構想を」「闘う組織は」の声は、階級深部からの要求に他ならない。

こうして八一年階級闘争は、われわれ左翼―すなわち社共を批判し、その反対派としてあった―共産主義者の危機をあぶり出し、待ったなしの課題をつき出したのである。

それは、第一に、社会主義の路線と核心に導かれた階級的労働組合運動の「闘う基本構想」と、統一準備会と対決しうる「闘う労組連」を突出部隊とする組織戦術の実現である。第二に、反戦反安保・日韓・三里塚等を闘う労働者を中心とする全国的な大衆闘争機関の創設である。第三に、この前二者と有機的に結びつきつつも、一切のカギともなる全国単一の戦闘司令部―革命党と統一戦線の建設である。

今日、この課題を実現する気運と可能性は熟している。多くの共産主義者、先進的労働者の仲間達が、情勢の大波に打ちよせられる様に、闘いの中で「労働情報」を中心として、一つの隊伍に集められてきた。

これらの人々は、七十年代の分裂と混迷の一時代の中で、鍛えられ、互いにいまだ日本階級闘争の一部分性をしか体現しえないにせよ、その最も誠実な、闘う先進的部分である。いま、この隊伍自らが、再び八十年代のふるいにかかり、分解・再編は不可避となっており、この中から革命的飛躍を求めて、先の課題に関する多方面からの模索が続けられている。と同時に、社共―総評の崩壊にともなうこれら下部の離反と流動とこれが結びつき始めている。

われわれは、なんとしても互いの意見のちがいを共に止揚し、団結する道を探し出し、この歴史的局面を攻勢的に突破し、いまだ、その勇姿をあらわしていない圧倒的多数の労働者階級の階級的統一のため、これら課題を形あるもの、目にみえるものに実現せねばならない。

八二年の新年に、まず最初にすべてのカギとなるであろう社共にかわる革命的労働者党創建を具体的に推しすすめ、実現する方法について、われわれの見解を提案する。

Ⅰ　83年政治決戦の激動の中で新旧左翼止揚する革命党を

八十年代の階級闘争は、いま「八三年政治決戦」に向って進んでおり、この節目における攻防の成否が、それ以降予想される、ブルジョア国家権力との会戦のカギをにぎるものとなることは必至である。

それは、八三年、衆参・地方をめぐる総選挙を、政治焦点として、議会主義政党はこれに向けた「八十年代綱領」づくりと組織体制準備に奔走している。

われわれは、この政治焦点で競われるものは、もはや、これまでの相対的安定期のような時期とは異る重大な節目であると考える。

戦争と革命の激動する情勢に対応して、現在進んでいる事態の本質は、国家権力をめぐる諸階級・諸階層・諸政治勢力の大再編なのである。

その環は、ブルジョア独裁の階級的基礎における労働者階級内部の労働貴族を手先とした帝国主義的解体攻撃―労戦の産報化であり、この社会的・政治的支柱となってきた社共をはじめとする政党再編であり、かつまた、安保・自衛隊・行革問題に象徴される軍事・官僚機構などのブルジョア国家機構そのものの大再編である。

これは何を意味するのか。

帝国主義は出口のない死の苦悶ともいえる危機に際会している。よって、この延命のために、総じて帝国主義戦争の道を急いでいる。

わが国の金融独占ブルジョアジーは米帝の指揮の下で、対ソ社帝第三次世界大戦＝朝鮮侵略反革命戦争のための挙国一致の戦争遂行体制を完成させんとしている。

すなわち、戦後革命の敗北を前提条件に、米帝を後だてとして朝鮮人民の生血を吸って復興した独占資本の「高度成長」を基礎に、労働運動における日和見主義・改良主義の開花、社共の議会主義路線による自民党単独政権の補完、自衛隊・在日米軍の再編等々――わが国のブルジョア独裁国家が米帝に深く依存しつつも、確立し、日帝の相対的安定期への基礎をかためたいわゆる「五五年体制」の全構造が、帝国主義の危機に対応して、その根底から崩壊し、大再編として進んでいるのである。ブルジョアジーは、そのブルジョア階級独裁のほころびと危機を乗り切るためには、激化する労働者階級人民の闘いを、この「戦挙戦」＝議会主義の枠内に吸引し、抑えこみ、大再編を完成させる政治的基礎を整え、一挙に帝国主義戦争の道へ乗り出さんということに他ならない。

それ故に「八三年政治決戦」はすでに始っており、まさに帝国主義の側からする経済、政治、軍事の全分野で（とりわけ経済、政治の集中的表現である安保・自衛隊をめぐって）戦争準備の重大な節目を形成する「政治決戦」なのである。

われわれは、この「八三年総選挙」を利用する力を持たねばならない。しかし、議会主義に対する反対派ではなく、戦争準備・政治反動と真向から対決する社会主義革命の準備をかけた、革命政治をもって正面戦をいどまねばならない。（第二新年号参照）。

55年体制の崩壊と激動する党派再編

日本の金融独占ブルジョアジーは、この八三年に向けて、自らの政治的代理人、鈴木政府と自民党を使って攻勢的に布陣をしき、かつ八十年同時選挙で獲得した「安定」過半数を防衛し、自民党単独政権の動揺を補完するため、民社党、公明党、社会党右派の取りこみと連合の準備を急いでいる。

これこそ、保守合同と左右社会党の統一によって〃二大政党制〃ともいわれたいわゆる「五五年体制」の崩壊と再編をめぐって、ブルジョア独裁の防衛と維持をかけた新たな「保守合同」ともいうべき政党再編のドラスティックな展開の背景である。

それは、主に「八個師団」ともいわれる「派閥連合体」である自民党の日米安保、改憲をめぐる派閥抗争と依然としてその内にはらむ分裂の可能性に連動した、野党の帝国主義的再編として進んでいる。

それらは、社共か社公民かをめぐる路線的対峙と社共の分裂とともに、民社党の自民党をしのぐ超タカ派的純化、公明党の「安保・自衛隊の容認」「全斗煥政権への支持と擁護」と「自民党との連合をもめざす新しい選択」等、「戦争と反動」の道の尖兵の役割を買って出んとしているのである。他方、議会のなかのおしゃべりで「左」からブルジョア階級独裁の補完物となってきた社共も一層その右傾化と帝国主義への投降の道を急いでいる。

社会党の「道」見直しは、結局、資本主義との運命共同体への明確な路線転換をしめしており、もはや「左」の補完物ですらなくなりつつある。日共は、公明党・社会党が次々とルビコン河を渡って、帝国主義へ投降していく中で、これと一線をかまえて何がしかの「左」を堅持しているかにみえる。しかし、日共の「平和と民主主義」「人民的議会主義」は、崩壊した「五五年体制を守れ」というに等しく、議会内で大臣のイスをめぐって社公民と先を競い、労働者階級人民の階級闘争を懐柔・圧殺し、ブルジョア独裁を防衛し、日帝の戦争準備をおおいかくしている。

こうして、歴史の転換期、危機の時代にはすべての政治勢力がその綱領・路線と実際の行動の中に、自らの本性を鋭く暴露せざるをえない。

それは、また他方、革命的左翼の登場と成長を促し、その内部での同様の「ふるい」となって貫徹せざるをえない。すなわち「五五年体制」の崩壊とドラスティックな再編は、この「左」からの補完物となってきた社共―総評ブロックの歴史的崩壊と同時に、これと一線を画し、革命的に闘いながら、結局この「反対物」に甘んじてきた新左翼運動の歴史的一時代の終りをも鮮明にしたのである。

言いかえれば、この「五五年体制」の「左」からの補完物となった改良主義潮流が公然たる帝国主義潮流へ（資本主義の防衛、階級闘争の抑圧、

戦争と反動の手先）ずるりと右旋回し、他方で、広範な労働者階級が改良主義から離反を開始したことを示している。しかし、この改良主義と一線を画してきた新左翼総体が、この改良主義にとって代る新たな革命党として登場するその綱領・戦術・組織にわたる内実とその現実の指導力においてまったく微力であり、その全面的登場をなしえないということにおいて、新左翼約二十年が総括・止揚されねばならない。

新旧左翼の終えん

それは、何よりも今日の革命的左翼の四分五裂、分散状況と思想・政治的混迷に最も象徴されているといってよい。

それは、一九五十年代半ば以降、議会主義とブルジョア民族主義の現代修正主義に転落した日共と決別し、暴力革命、プロ独、日帝打倒・社会主義革命を掲げて、新しい革命党創建をめざして、新左翼の出発点を形成したブンドの党的破産——四分五裂に最も際だって象徴されているといっても過言ではない。

革共同は第四インター、中核、革マルに分裂した。中核派は相かわらずの人民闘争の爆発で蜂起・内戦を展望する最も典型的な小ブル急進主義で低迷しており、第四インターは、この間ブンドに代って人民闘争の指導部として急成長してきたが、「労農政府樹立」と社共統一戦線、あるいはアフガン・ポーランド問題をめぐる路線的動揺を深め、革マル派は、社民左派への純化から労働者の敵対物となり果てた。共労党も三分裂し、その大半が党的に解体している。毛派潮流の分解・再編も著しく、今日ではそのほとんどが愛国主義潮流へ合流し、また社青同解放派の分裂と解体状況、社会主義協会派からの一部離反部分の内の再分裂、さらにはブンド潮流からの毛派への解体など—新左翼諸派の現状は、その潮流区別すら定かでない程の（確固とした政治勢力としてという意味）分散と離合集散の極に達しているといってよい。

ここには深い思想・政治的根拠がある。例えばブンドに典型的にみられるように、プロ独を要とした共産主義と労働運動の結合を実践的につかむことができず、小ブルジョアの憤激に依拠し、社会主義革命の原動力を労働者階級の階級闘争にもとめず、一方でテロリズム、他方での経済主義になり、総じて急進民主主義政治に陥ってきた。急進民主主義は、端的にいえば、小ブル共産主義を基礎に、社会主義革命の実現を結局は、民主主義闘争すなわち、政府のあれこれの政策を阻止する闘争の徹底化、戦闘化の延長線上に展望するものであった。要するに社共の改良主義・議会主義に対する左からの政策的反対者としての位置を占めてきたのである。

こうしたブンドの小ブル共産主義・急進民主主義からする弱点は国際共産主義運動が前進し、帝国主義の相対的安定期が終りを告げんとしつつある時期に、事実、きたるべき革命闘争の一つの前しょう戦として闘われた六十年代末〜七十年の、安保闘争をめぐる会戦の中で、全面的にさらけ出されて以後、経済主義とテロリズムへの分裂——その拡大再生産の混迷の時代に入ったのである。

これは、ブンドにだけの特徴であっただろうか。多かれ少かれ、かかる傾向こそ、この六十年代〜七十年代の一時期におけるわが国の共産主義運動を代表してきた新左翼に共通のものであるとわれわれは考える。

今日、戦争と革命の時代の諸様相が一層鮮明となり、二大階級の真正面からの激突とブルジョア国家権力をめぐる大会戦が不可避に迫っている時代の中で、ふたたび、そして最後的に、新左翼の急進民主主義ゆえの社共の政策反対者の位置と役割の限界が鋭く暴露されたのである。

新たな党建設の大道

すなわち、その主戦場が本格的に労働運動へ移行し、社共の反対者としてでなく、どの様な路線で、どの様な組織で、社共の改良主義・議会主義にとってかわり、八十年代を闘うのかという先進的労働者の問題意識に応え、この部分性でなく、総体的な日本革命の綱領・戦術・組織におきかえ、大衆闘争の最先頭に立ちきり、領導するのかが問われているのである。

おりしも、ソ連のアフガン侵略、ベトナム、中国の変質、ポーランド「連帯」をめぐって、あるいは核・原発をめぐって、旧来の反スタ・トロツキズムや現代修正主義の誤りはともかく、マルクス・レーニン主義の創造的発展が問われている時代である。

荒々しい嵐の時代の到来に、たち遅れ、試練にさらされているのは、まさに共産主義者であり、新左翼の破産をこえてすすむ革命的左翼の形成なのである。

すでにのべたように、「八三年政治決戦」が帝国主義の戦争準備のための労働・政治・軍事をめぐる党派を媒介とした政治・組織戦であればこそ、われわれもまた、これと対決する社会主義革命の準備をかけた、全分野における政治・組織戦として闘いぬき、この過程で新旧左翼を真に止揚しうる新たな革命党を形成し、きたるべき二大階級の大会戦に向けた橋頭堡を築かねばならない。

この攻防の環は、賃金奴隷制の鎖をつよめるブルジョア階級独裁の擁護か、これからの解放をかけたプロ独の準備かをめぐって、労戦の産報化に抗する闘いと結びついた安保・日韓、自衛隊・三里塚をめぐる攻防を焦点とする。

われわれは、これら闘いを「階級間の政治闘争のもっとも純粋で、完全で、はっきりした形の表現である」（レーニン）政党間の闘争としてになうために、社共に代る革命的労働者党創建の具体的形成に着手し、八三年にはその中核体の形ある姿を登場させねば、闘いは勝負にすらならないであろう。

もちろん、この革命党は、あらゆる意味で旧来の新左翼諸党派の延長上につくられるべきではない。

わが同盟が、その結成宣言に掲げたように「ブンドを止揚し」「社共に代る革命的労働者党創建」を掲げて、「潮流をこえた団結」を呼びかけるのは、まさにこうした意味に他ならない。

わが同盟は、自らのブンド総括を綱領・路線にうち固め、分裂から統合の時代をめざして、ささやかであってもブンドの五つの分派を七十年代半ばから今日まで統合してきた経験をふまえ、やっとこの歴史的事業の一翼を担う地平まで到達した。

八二年—八三年は、この焦眉の、大規模で新しい質をもった建党運動の試金石とせねばならない。

II わが同盟の統合の新たな六条件

われわれがめざすものは、労働者階級の賃金奴隷制からの解放と、階級の廃止を実現し、全ての民族の平等と自由、抑圧された全人類の解放である。

このプロレタリアートの社会革命は、プロ独裁の実現を政治的条件に、銀行の没収をはじめ生産手段の私的所有を社会的所有にかえ、生産と分配の労働者統制等を必要とする。

この社会革命の実現のためには、われわれは、国際プロレタリアートの一員として、世界革命の有機的一構成部分として、日帝打倒・米帝一掃・プロ独樹立の日本社会主義革命の実現を当面する中心的政治任務としなければならない。

この革命を実現するためには、社共に代る全国単一の戦闘司令部—革命的労働者党が是非とも必要である。

社共に代る革命党建設のためには、わが国の多数の闘う共産主義者が、思想と政治の一致のもとで団結することが不可欠である。それは、ブンドにとどまらず、全ての潮流の諸党派、諸サークル、諸個人を対象とし、社共から離反する部分をも当然対象とする。

わが同盟は、その前史において七十年代の半ば以降、共産主義者の統合を、綱領・戦術・組織問題における原則的見地における一致をもとにはかる態度をとり、実践してきた。それは「六条件」として定式化されたもの

である。今日われわれは、それを「新六条件」として、当然その骨格を継承し、共産主義者の統合をおし進める。

それは、次のとうりである。

一、既成左翼はいうに及ばず、新左翼の破産を認め、その思想・政治路線上の誤りを自覚し、克服する必要を認めること。

二、マルクス・レーニン主義の世界観・基本原則で一致すること。

われわれはとくに、次の見地――マルクス・レーニン主義を今日のソ連現代修正主義の公式・教条ときっぱりと一線を画してとらえていること、毛沢東思想をはじめ、世界の革命の歴史的教訓に学び、マルクス・レーニン主義の理論を、今日の世界と日本の具体的現実を基礎に、これを根本的に変革する革命実践との統一として、発展させること、とりわけ、資本主義批判、「労働者階級の解放は、労働者階級自身の事業でしかありえない」の原則、プロレタリア階級独裁の核心等を、共産主義と労働運動の結合として実践に貫くこと等――を強調する。

三、企世界の被抑圧民族・社会主義国と団結し、日帝打倒・米帝一掃・プロ独樹立の社会主義革命路線を闘いとり、これを遂行することで一致すること。

われわれは、特に次の見地――朝鮮・アジアの革命との連動性を深く見すえ、これら革命と結合し、日本労働者階級の国際主義の内実を自国帝国主義打倒をカナメとした日本革命の政治路線として対象化すること、戦後いらいの「従属・自立論争」の止揚、かつまた、「安保粉砕」の政治内容として、「日米安保体制」「在日米軍の駐留」を権力問題と把握し、「米帝一掃」の任務を社会主義革命の不可欠の任務ととらえること、また、われわれの掲げる「プロ独」の内実を単なる政治権力、暴力革命一般にとどめず、プロレタリアートの社会革命全般を包括し、これと深く結びついた権力問題として把握すをこと等――を強調する。

四、国際・国内情勢の現局面の基本認識を「戦争と革命の要素の増大」で一致すること。

情勢認識のうえでは、日帝が米帝世界戦略とその指揮の下で、日米安保体制の再編強化を軸に進めている戦争の準備が、世界的規模での帝国主義戦争の一環であり、その照準が朝鮮半島にすえられていることとの一致、帝国主義戦争の危険に対する革命的祖国敗北主義等の社会主義革命の諸原則で一致ずること等を強調する。

われわれは、国際情勢を大きく規定するソ連問題について、今日のソ連は、官僚ブルジョア階級が支配する新しい形態での国家独占資本主義の社会であって、「口先の社会主義、実際の帝国主義」であると考えている。しかし、われわれは、統合の条件の中で、今日のソ連がアフガン、ポーランド問題にみられる如く、侵略主義と支配主義で被抑圧民族と国際プロレタリアートの敵対者となっている認識で一致するならば、その社会の階級的性格の定式化においての不一致は、統合後の粘りづよい論争で結着できると考える。

五、情勢の基本認識から導かれる当面の戦術「敵の要害に対する正規の攻囲」戦術の採用で一致すること。

すなわち、われわれは、現局面で「直ちの突撃戦」を組織せず、全人民的武装蜂起と、プロ独裁を根本的に準備する活動を重視する。共産主義は、現実の社会生活のすべての側面から「成長」し、その芽ばえは闘いの中での革命実践の中にあることを重視して、ブルジョア独裁のこの社会のすべての側面、分野から、これに対抗する労働者階級・人民の経済・政治・文化のあらゆる闘いを組織すること、その環が、共産主義と労働運動の結合の見地から、労働運動を主戦場に、プロレタリア的下層労働者の圧倒的多数の階級的統一をめざし、工場・地域を革命の砦にかえる活動にあり、この砦を、農民の闘いの砦、被搾取勤労大衆の闘争拠点と結合させ、巨大な単一の革命の隊列を整えるにあること、またこのかなめが、単一の戦闘司令部――革命党と、労働者と、貧農の、同盟を軸に被差別・被抑圧人民大衆の結集する社会主義統一戦線の建設にあること、等を強調する。

六、職業革命家を中核とし、工場細胞を基礎として、民主集中制を組織原則とした労働者階級の革命党の組織路線で一致すること。

われわれは次の見地を強調する。

党はなにか特別の存在ではなく、労働者階級の一部で最も階級性、献身性に富むゆえに革命的であり、労働者階級全体の利害より他の利害を持たないこと、かつ党は、革命の政治的組織的テコであり道具であること。

それ故、党は労働者階級人民の苦悩・怒り・闘いとしっかりと結びつき、これを共有し、革命の全体の利害へと発展させる様に不断の自己変革を必要とすること。党の基礎が、労働者大衆に信頼された工場・地域の細胞にあること。

また、中央集権制の原則は党内民主主義の実現の基礎の上に組織されねばならず、党内論争――闘争の党内公開性の実施と民主的組織化、大会の重視、少数意見の保障、革命家の思想・政治第一の作風、労働者幹部政策、大衆的党風等々である。

われわれは、この新六条件を掲げるにあたって、これら原則と路線が口先だけのものであってはならず、実践に貫かれ、大衆闘争の中での検証の必要を重視する。この様な理論と実践の両面における一致と統一こそ、党建設のカナメであり、共産主義者と労働者の団結を促進し、単一の戦闘司令部建設の前進にとって欠かすことのできないことであると考える。

III 共産主義者の統一協議会をつくろう

一章で分析したごとく、「八三年政治決戦」は、この政治・組織戦の攻防の環をにぎりしめ、労働者階級の歴史的未来をかけて、迫りくる八〇年代の大会戦の前しょう戦を闘い、領導する社共にかわる革命的労働者党創建をそのカギとしている。

わが同盟が、七十年代半ば以降、単一の戦闘司令部建設をめざして、分裂から統合の時代をきり開いてきたことは、最早周知の事実である。しかし、その成果は、マルクス・レーニン主義の革命的労働者党の中核の萌芽を形成しつつも、いまだささやかなものでしかない。

わが同盟は、この歴史的事業の情勢に応えた、より一層大胆な、大衆的な発展を促し、かつ二者間の統合をも否定せず、統合を推進する方法として、『統一協議会の結成』を提案する。

(1) なぜ統一協議会が必要なのか

労働階級人民が熱望してやまない単一の戦闘司令部――社共にかわる革命的労働者党創建のためには、全ての闘う、誠実な共産主義者、労働者の団結が是非とも必要であることは、だれもが認めるところである。

団結の必要は、各潮派の諸分派が日本階級闘争の個々の部分性をしか代表しえず、かつ、その諸潮流自らがその独自性を解体している現実を踏えて、これら部分の各々の蓄積と主張を、単一の思想、政治・組織に相互止揚する過程を、日本革命の綱領・路線の確定と革命党創建の共同事業としてしか闘い取ることができないからである。

情勢は急であり、この具体化は待ったなしであり、「八三年政治決戦」を節目とした八十年代半ばに至るまでに、この戦闘指令部としての革命党を、その中核体をつくり出さずして分散を是認することは、革命的左翼の武装解除を意味し、最早反動というものであろう。

今日、すでにくりかえしのべてきたように、その諸条件が広々と開けつつある。

八十年代初めから、多くの心ある同志達から、いくつかの提案がしめされ、ブロックの形成、横断的左翼の形成、統一戦線党構想等が試みられつつある。しかし、それらの試みは、いまだ、互いの歴史的経緯・見解のちがいを、一体何から、どのように、何を規準として、かつ、どのように大規模に、かつ確固として原則的に実現していくのかの根本的問題に、解決の方法を十分しめしているとはいい難いと考える。

われわれは、単なる二者間にこだわらず、革命党の緊要さと統合の必要を認める、複数の潮流をもこえた共産主義分派、労働者グループの間で、統一のための協議会を準備して、その中で思想的統一を闘い取ることが可能であり、かつ時宜にかなったものであると考える。

この共産主義者の協議会の中で、互いの綱領的団結のための路線論議と共に、一致しえる共同行動、共同闘争を行いつつ、信頼を育み、意見のちがいを粘りづよくのりこえて、統一を闘い取ることができると確信する。

今日、全国の至る所で、社共や新左翼から離反し、かつどの分派にも所属せず、誠実に闘い、革命への志を失わずに、革命党のために働く用意のある多くの同志達が存在している。また八十年代は腐りきった旧い自称「活動家」に代って、若木のような、いまだどの分派も糾合することのできない新しい活動家層が日々生み出されていく時代である。こうした部分に呼びかけ、働きかけ、労働者階級の最も戦闘的な層に依拠して党をつくり出すためにも、こうした大胆な建党運動が不可欠であると考える。

こうした統一協議会の全過程を、われわれが、労働者階級に深く深く依拠して、論争と共同闘争を公開しつつ、労働運動を主戦場としたあらゆる階級闘争の中で、彼らの闘いと結びついてなすことが重要である。このことが実現されるなら、必ずやわれわれは、真に労働者大衆の信頼を得た、大衆的な革命党をつくり出すことができると確信する。この時、われわれは、はじめて新旧左翼に対する彼らの深い不信をふり払い、われわれ自らの限界を克服し、革命的左翼としての飛躍を闘い取ることができると確信する。

こうした見地から、わが同盟は、全国の共産主義者に、互いの潮流と歴史性のちがいをこえて、共に、革命党建設の大道につくため、統一協議会をつくることを呼びかけるのである。

(2) 統一協議会は何をめざすのか

統一協議会のめざす方向は、日本革命を勝利に導きえる革命的労働者党創建以外にはない。「革命党創建のための統合をめざす統一のための機関」という点において、全国大衆共闘機関や、様々な政治共闘などの統一戦線体や、単なる研究機関、共同戦線的な運動協議会と明確に区別される共産主義者の協議会である。

われわれは、この点において、いささかのあいまいさがあっては、いたずらに混乱を招くだけであると考える。

また、統一協議会を構成する対象は一定の規準が必要である。

われわれは、こう考えている。

統一協議会の規準・運営方法を含むその「要項」のようなものは、ひとり、われわれが提案するのではなく、この必要と意義を認め、賛同する部分の中で、十分討議のうえで決められるべきである。

ここで、わが同盟は、先の統合新六条件を、決して統一協議会の政治規準だと考えたり、これを強制するものではないことを表明しておかねばならない。もちろんわれわれは、先きの統合の条件を満たす諸分派であれば、明日にも統合を望み、かつ、その実現を互いに保証をしあうが、統一協議会の規準は、統合の協議を開始することのできるいくつかの最低の規準を満たせばよいと考えている。わが同盟は、統一協議会に賛同する諸分派・グループの皆さんに、この協議会の規準を提案することを要請するし、そうした諸準備の中で、われわれの規準をも提案していく用意のあることを表明する。

こうした点を鮮明にして、統一協議会を呼びかけていくうえで、政治規準以前の、共産主義者の作風ともいうべき前提的問題について、若干の見解をのべておかねばならない。

それは、「党建設のための協議をする」以上、「思想政治面での路線が正しいかどうかが全てを決定する」ことからする路線論議、あるいは、今日、すべての共産主義者の共通の課題となっている共産主義・社会主義論争に、共同で結着をつけるためには、われわれが共に、旧い様々なこれまでの限界を克服する立場を確認して出発しなければならないことである。

それらは、一言でいえば、マルクス・レーニン主義の復権を期して、教

条主義、セクト主義を排して、互いの見解を尊重しつつ、思想・政治路線を、指導者の個人的思いつきによるのではなく、階級闘争の歴史的経験と蓄積の総括のなかから、現実の正しい分析のなかから導く態度を貫くことである。論争の作風を共同して作りだして、理論と実践の統一をかなめに、意見の不一致がどの様な性格であり、団結にとって主軸か副軸かを見きわめる態度をしっかりと養い育てることを互いの確認としなければならない。

こうした共産主義者の基本的態度が貫かれるならば、ねばり強い論争と一定の共同行動の中で、互いの意見のちがいを止揚し、統一綱領を闘いとることが可能であると確信する。なぜなら、労働者階級の利害はひとつであり、また世界と日本の現実もひとつであるからである。

(3) 何から始めるべきなのか

われわれは、まず、この統一協議会の提案に賛同する共産主義者、労働者諸グループの間で十分討議をかさね、「準備会」を組織し、そこで、この協議会の政治規準など基本構想をまとめていくことから始めるべきであると考えている。

情勢の推移からするならば、われわれは、八二年中には、この準備を成しとげるべきであろう。

と同時に、われわれは、こうした統一協議会を、旧十三派とか八派会議とかの単なる現にある分派の機械的な寄りあいに堕さしめないためにも、これらが、労働運動の現場で、工場・地域を革命の砦とする共闘に根ざし、支えられて進むべきであると考える。

また、この統一協議会の準備は、公然・非公然と進んでいる様々な方面での、新しい潮流形成、再編成、あるいは、巾の広い戦線的結合の存在を否定したり、排除したりせずにそれらと有機的に連動して進むべきであると考える。

また、八十年代情勢は、党の問題をカギとはするが、同時に要請されている、「闘う労組連」形成や、「全国政治共闘機関」等の広大な統一戦線を要求しており、この任務を統一協議会へ解消せず、併行して実行し、これと連動させねばならないことは、もはやいうまでもない。

統一協議会を真に成功させ、確固として推進するためには、その推進部隊、この核となる部分が必要である。

わが同盟は、このために、われわれ自らの独自の任務をいささかもゆるがせることなく、新六条件にもとづく統合とかつ自力の党建設をそれ故にこそ強めて、この事業の最先頭で働く決意であることを表明する。

全国の共産主義者、労働者の皆さん！

社共にかわる革命的労働者党創建に向け、勇躍して、統一協議会をつくろう！

わが同盟は、全精力を傾けて、この実現のため、奮闘することを八二年の年頭にあたって宣言する。

八三年「政治決戦」——八〇年代の来るべきブルジョア国家権力との大会戦に備えて、労働者階級の戦闘司令部を闘い取ろう！

統一協議会を創りだし、八二年を日本共産主義運動の統合の時代への歴史的転換点としよう！

全国の共産主義者、団結せよ！

発刊にあたって……………編集部

全国の同志、友人諸君、共産主義者、革命的労働者諸君、ここに共産主義者同盟中央理論機関誌『赫旗』を発刊し、届けます。

理論誌『赫旗』が目指すのは、日和見主義、修正主義の社会党、共産党に代る日本労働者階級の革命党、マルクス・レーニン主義の共産党を創建し、日本革命、日本帝国主義打倒、米帝国主義一掃、プロレタリア階級独裁樹立の社会主義革命に勝利することであり、そのための革命的理論活動である。したがって、本誌掲載の共産主義者同盟の結成宣言がすなわち『赫旗』発刊の辞である。

『赫旗』は大きくは次の三つの内容と目的で編集され、発行される。第一は、修正主義を批判し、小ブルジョア急進主義を清算し、マルクス・レーニン主義を獲得する、そして、ブンドと新左翼を総括し、社共に代る革命的労働者党を創建するための理論と論争を提起し、組織することである。第二は、八〇年代闘争を革命の準備、革命の前哨戦とするための闘争の路線と方針の提起、八三―八五年に予想されるブルジョアジーとプロレタリアートの会戦に対する革命的戦術の提起、そして、いろいろの個別闘争の方針の提起である。第三は、右翼労線統一、帝国主義労働運動に抗し、階級的労働組合運動を防衛し、発展させ、社会主義労働運動を創出するための労働運動路線、方針、政策の提起である。

われわれは政治機関紙と区別し、理論機関誌の独自の役割を発揮させるために季刊で発行する決意である。

読者諸君、支援と協力をお願いします。

（一九八二年二月）

共産主義者同盟理論機関誌

赫 せっき **旗**　　創刊号

発 行 日　　1982年２月25日
編集発行　　共産主義者同盟中央委員会
発　　行　　赤 路 社
東京　大田区大森北１〜13〜11
㊆06(462)7030
大阪　大阪市福島区大開
１〜19〜13副島ビル
㊆03(766)4729

定価　750円